

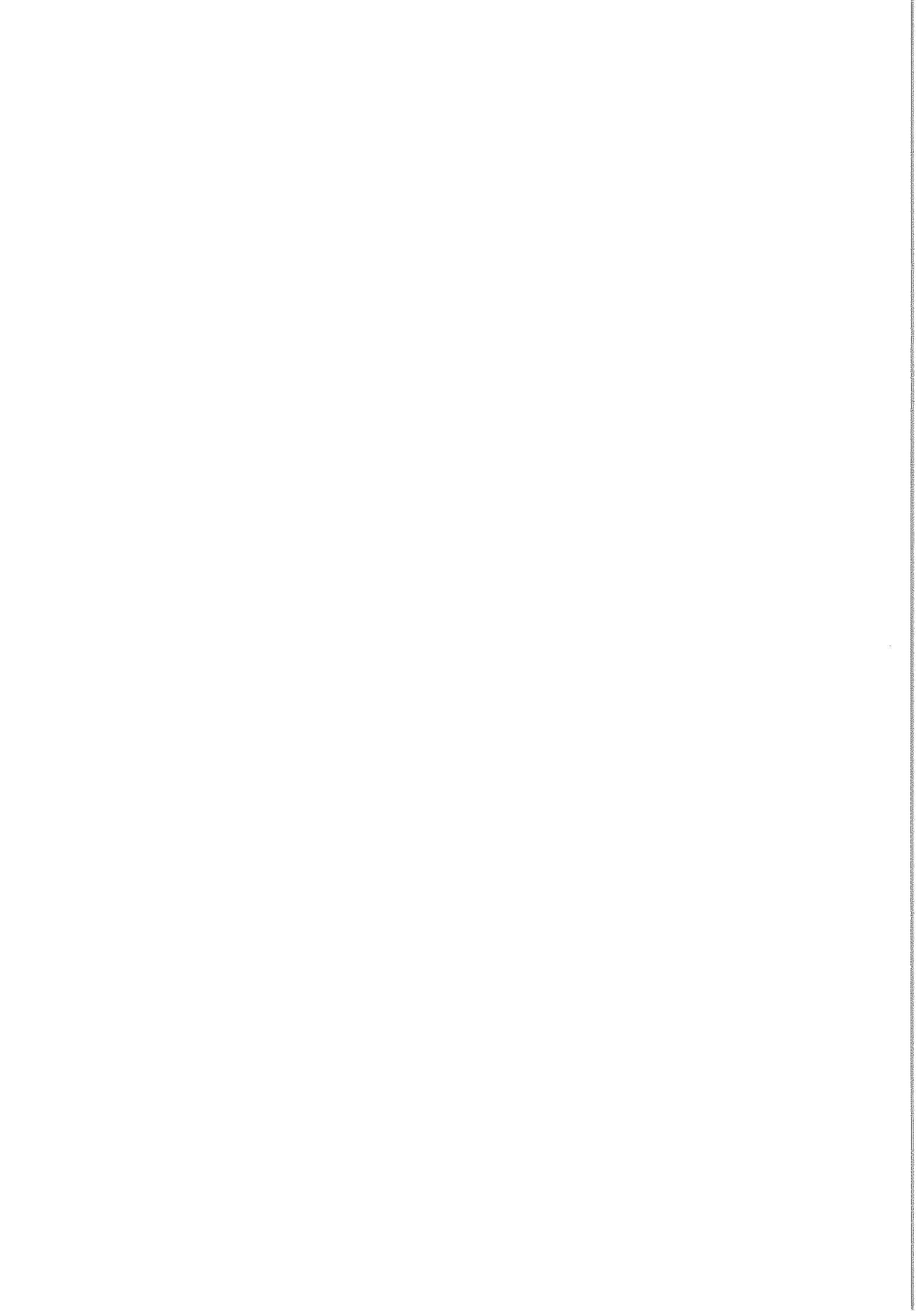
会 報

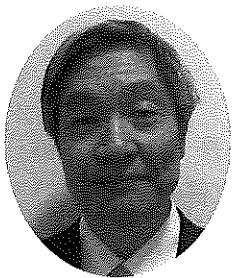
第 42 号

平成 26 年度



東京都公立高等学校副校長協会





会報第42号の発刊に寄せて

会長 福田洋三
(東京都立杉並高等学校)

「会報第42号」の発刊にあたり一言御挨拶を申し上げます。日頃から東京都公立高等学校副校長協会の事業と研究活動に御理解と御協力をいただき、厚く御礼を申し上げます。

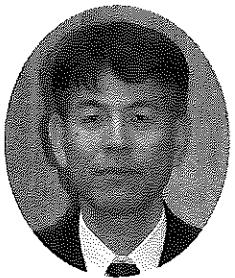
さて、東京都教育委員会は、平成9年に都立高校改革の長期計画である「都立高校改革推進計画」、平成14年に「都立高校改革推進計画・新たな実施計画」を策定し、その成果を検証するとともに、教育基本法の改正や学習指導要領の改訂を踏まえ、平成24年に平成33年度までの10年間の「都立高校改革推進計画」を策定しました。その目的は「真に社会人として自立した人間を育成する」ことであり、平成27年度までの第一次実施計画においては、「都立高校学力スタンダード」に基づく学習指導、都独自の道徳教材による道徳教育の実践、「生活指導統一基準」による生活指導体制の構築、公費による海外留学「次世代リーダー育成道場」の実施、入学者選抜の改善として推薦に基づく選抜で集団討論の導入等を実施しています。その中で、本年度は、4月に発覚した平成26年度入学者選抜の学力検査に基づく採点の誤りに端を発し、過去に遡っての教育庁と都立高校教職員挙げての答案の再点検により、過去3回の入学者選抜で総計165校3052件の誤りがあり、18校で22名の追加合格を出すという深刻な事態となりました。我々副校長は、通常の校務に加え、その対応に追われた年度でした。一方、再発防止に向け、都立高校入試調査・改善委員会が設置され、都教委の学校現場への聞き取り・調査・意見聴取や校長協会を通しての改善策の提案等により、学校現場と一体となった、全国的にも初となる、新しい採点・点検方式が9月に公表されました。その内容はマークシート方式の導入、読み上げ方式による採点・点検を2系統で行い、従来の答案と正答と見比べて3回点検する方式を改める、合格発表後年度内に他校同士で点検を行う相互点検を実施する等です。

我々副校長は、様々な課題に対して各校で方策を講じると同時に、副校長同士の連携を図り、方策や成果を共有し、情報交換により、お互い支え合い、東京都の教育の発展に寄与してきました。今後も情報交換の大切さは変わりません。副校長協会がそのための機会を提供し、一助となればと思います。

昨年度制定された副校長協会役員選出内規に基づき、会長職のお話をいただき、守屋誠一前全日制部会長、玉井篤前全国会長、錦織政晴全国事務局長、針馬利行事務局次長、瀧澤龍司全国会長、長江誠全日制部会長を始め、皆様の御陰で一年を務めさせていただきました。私自身、京都全国大会、都副校長研究協議会、群馬関東大会を始め、文部科学省による教育再生実行会議の講話や様々な情報交換を通して、新しい視点を頂き、職務に対する新たな意欲も得ることができました。平成28年度は、10年ぶりに、東京で全国大会を開催します。本年度の役員で、少しずつ準備を進めているところです。来年度の各地区の幹事・本部役員の選出では、2年後の東京大会に向けた体制づくりをお願いしています。副校長の職務は、多忙さが増すばかりですが、研究発表は、お互いの実践を交換しあう情報交換の場でもあります。東京大会の視察も兼ねて、来年度の北海道大会への参加等御協力よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、「会報第42号」を発刊するにあたり、教育庁指導部高等学校教育指導課、東京都公立高等学校長協会を始めとする多くの関係各位に、様々なご支援に対し感謝を申し上げます。また、編集・発刊に御尽力頂いた事務局の皆様、各地区的常任幹事を始めとする役員の皆様に心から感謝申し上げます。副校長先生方の御協力に感謝するとともに、皆様の御健康と御活躍を祈念いたします。

会報第42号の発刊に寄せて



全日制部会長 長江 誠
(東京都立篠崎高等学校)

「会報第42号」の発刊にあたり一言御挨拶を申し上げます。日頃より東京都公立高等学校副校長協会の事業や研究活動に御理解と御協力をいただきお礼申し上げます。

さて、これまで副校長協会の業務に携わることがほとんど皆無であった私が、全日制部会長という大役をお受けすることになって以来、多くのことを勉強させていただきました。特に、東京都以外の教頭・副校長の先生方とお会いしてお話を伺うと、都と同じ状況だと感じることと、まったくそうとは感じないことが様々ありました。つまり、いじめ防止対策などの国全体が一斉に取り組んでいる教育課題では、「どの都道府県も同じことで悩んでいるな」と思ったり、「そこまで徹底して取り組んでいるのか」と感心したりしました。また、自治体ごとに異なる教育課題の場合には、都が恵まれていると感じたり地域性の違いを感じたりしました。自分の知見を広げるのにとても良い機会となりました。

副校長の先生方は、日々の業務に忙殺されながら、時には我を見失いつつ、うまく仕事ができて当然という重圧に耐え、自分の体調管理をしながら仕事に精を出す日々だと思います。今年度、本校の教職員の中には、体調を崩してしばらく休養するという方が続出しました。何度か時間講師を探したり、様々な業務の校内調整にあたったりしました。どこか（誰か）で歪みが生じると、違うどこか（誰か）にそのしわ寄せがきて、さらに悪循環になっていると感じた次第です。副校長は、全教職員の体調等にも気を配り、学校が順風であり続けられるように努めなければならないと感じた1年でした。

この「会報第42号」は、平成26年度の活動がまとめられています。また、多くの副校長先生から原稿を出していただきました。副校長会の1年と自分の1年を振り返るのに役立つ内容です。忙しいながらも「仕事ができる幸せ」「仕事で必要とされていることのありがたさ」を感じながら読みたいと思っています。

この1年、瀧澤龍司全国会長、福田洋三都会長、針馬利行事務局次長、錦織政晴全国事務局長、玉井篤前全国会長、守屋誠一前全日制部会長をはじめ、役員の皆様、各地区の常任幹事や研究幹事の皆様、すべての副校長の皆様のお世話になりながら努めてまいりました。平成27年度は、28年度の東京大会に向けた準備を本格的に進めていく年となります。実行委員会を編成し、指導部高等学校教育指導課の御指導・御助言をいただきながら、事務局の御支援を受けて、つつがなく取り組む必要があります。皆様の御理解と御協力をお願いいたします。

目 次

会長・部会長あいさつ（発刊によせて）

1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創設以前の教頭会	1
2. 会員数と会費の変遷	3
3. 本会のあゆみ	7
4. 本会のあゆみ一覧	11

2. 総務部会報告

1. 本部の活動	17
2. 平成 26 年度予算	18
3. 平成 26 年度事業報告	20
4. 副校長協会 総会	21
5. 全日制部会 総会	21
6. 幹事会	22
7. 総務部会	22
8. 指導部との賀詞交歓会	25
9. 特別委員会	26

3. 主な活動報告

1. 全国高等学校教頭・副校長会	…	27
2. 都立高校副校長研究協議会	…	28
3. 関東大会報告	…	29

4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部 A 地区副校長会	31
2. 東部 B 地区副校長会	32
3. 東部 CD 地区副校長会	33
4. 中部 AB 地区副校長会	34
5. 中部 CD 地区副校長会	35
6. 西部 A 地区副校長会	36
7. 西部 B 地区副校長会	37
8. 西部 C 地区副校長会	38
9. 西部 D 地区副校長会	39

5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会	40
2. 商業科副校長会	42
3. 農業科副校長会	44

6. 研究部会報告

1. 管理運営研究部会		
第 1 委員会（学校管理関係）	…	47
第 2 委員会（職務、待遇関係）	…	49
2. 高校教育研究部会		
第 1 委員会（教育課程）	…	51
第 2 委員会（教育対策）	…	53
3. 生徒指導研究部会		
第 1 委員会（生活指導・進路指導）	…	55
第 2 委員会（教科以外の教育指導）	…	57

7. 退任者の声

8. 転任者の声	…	61
9. 新任者の声	…	68

10. (1) 挨拶

東京都教育庁指導部主任指導主事 佐藤 聖一 先生	…	86
-----------------------------	---	----

(2) 挨拶

東京都公立高等学校長協会会長 柴田 哲 先生	…	88
---------------------------	---	----

(3) 講演「副校長に期待すること」

前都立葛飾総合高等学校 兼本所工業高等学校長 三田 清一 先生	…	90
---------------------------------------	---	----

(4) 講演「都立高校と私立高校の違い」

元都立墨田川高等学校長 前千代田女学園中学校・高等学校長 大澤 紘一 先生	…	102
---	---	-----

(5) 講演「夢を持てば子供は変わる」

株式会社 P&H 代表取締役 高岸 実 氏	…	105
--------------------------	---	-----

11. 会員異動

会員異動	…	114
------	---	-----



1. 教頭会・副校長会のあゆみ

1. 本会創立以前の教頭会

明治 19 年 10 月勅令 65 号「尋常師範学校官制」第 3 条「教頭ハ教諭中ヨリ之ニ兼任シ、學校長ノ監督ニ属シ、教務ヲ整理シ教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル」とあり、また昭和 16 年 3 月勅令第 148 号「国民学校令」で「學校長及ビ教頭ハ其ノ學校ノ訓導ノ中ヨリ之ヲ補ス、教頭ハ學校長ヲ補佐シ校務ヲ掌ル」と定めるなど、戦前は教頭職制度があった。その当時の教育制度は 5 年制の中学校・高等女学校・工業学校・商業学校・農業学校などに分かれていた。戦前の教頭会は関係の深い学校同志が校務連絡と親睦のため集まる程度の会はあったが教頭会としての組織化されたものはなかった。

戦後の昭和 22 年 3 月法律第 26 号「学校教育法」公布により、教頭職は法制的になくなつたので、校長の命ずる校務分掌の一部として名ばかりの教頭が存在していた。昭和 30 年都教委は、「校務主任」の制度を設け、教頭全員に「校務主任」の辞令を渡し、12 月 1 日付で任命した。このようなことから普・工・商・農などの教頭会は規約をもうけるなどし、各々「校務主任会」

を組織、やや教頭会的活動を行うようになった。その後昭和 38 年に全都の高校で組織する本会を創設した。本会が創立する以前の教頭会の歴史は次の通りである。(昭和 49 年 2 月内山調)

東教会（普通科）

昭和 12 年創立。昭和 38 年本会の創立により、昭和 38 年発展的解散

昭和 12 年春、府立第 7 高女に府立高女全校の教頭 10 名が集り親睦と校務連絡を目的に会を創設した(故松岡忍岡高女教頭の日記より)。昭和 18 年に都政がしきれ、府立高女も市立高女も全部都立高女と呼ばれるようになった。そのとき全都立高等女学校 25 校が忍岡高女に集り総会を開き組織を強化した。その後、戦争のため会は開けなかつたが、昭和 24 年より開けるようになり、昭和 30 年頃より男子系高校の入会も増加し会は発展してきた。昭和 32 年に都立高校校務主任会が発足したがこれと並行して会は存続、昭和 38 年都立高校教頭会が創立したので昭和 39 年 1 月 23 日、南多摩高校で最後の総会を開き発展的解散した。

年 度	昭 12 年	昭 13 年	昭 18 年	昭 19 年	昭 24 年	昭 25 年
会 員 数	10 校	10 校	25 校	25 校	31 校	35 校
会 費	—	—	—	—	300 円	300 円
当番幹事 校と会場	府立第 7 高女	昭 14~17 年 不明	忍 岡	戦争のため昭 和 24 年まで中 断する	駒場、富士、 忍岡、足立	竹台、井草、 千歳、鷺宮

昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年
35 校	35 校	35 校	38 校	40 校	42 校	46 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
八潮、市谷、 紅葉川、明正	京橋、本所、 台東、三田	不 明	不 明	豊島、玉川、 桜町、深川	雪谷、武藏、 北野、大崎	南多摩、目黒、 神代、江北

昭 33 年	昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年	昭 38 年	昭 39 年
48 校	50 校	50 校	60 校	63 校	63 校	63 校
300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円	300 円
千歳丘、一橋、 足立、荻窪	白鷗、南多摩、 富士森、府中	竹早、本所、 広尾、青山	志村、板橋 北多摩	不 明	不 明	不 明

会合は毎年 5 回を目標にし、4 回は学校、1 回は外部の会場を選んだ。

(昭和 49 年 2 月神藤調、昭和 50 年神藤訂正)

東京都立高等学校校務主任会（普通科）

昭和32年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後普通科高校教頭会支部となる。

昭和32年1月17日駒場高校で普通科高校が集り、各学区から幹事を出し、その中から代表幹事をきめる組織で創立総会を行った。目的は親睦と校務連絡が主なもので、第1回の総会と

年2~3回の幹事会を行う程度の会であった。組織は普通科高校全体であるが、大島・三宅・八丈の島関係は未加入、昭和35年府中高、昭和38年は深沢・小岩・小平・南・大山の5校新設入会とし、86校となる。

年 度	昭32年	昭33年	昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
会員数	76校	76校	76校	77校	77校	77校
会 費	500円	500円	500円	500円	500円	500円
代表幹事	鈴木 菊雄 (駒場)	森本久次郎 (日比谷)	岸田 文男 (西)	渡辺 元 (板橋)	細沼 清 (白鷗)	田代清三郎 (両国)

(昭和49年2月神藤、内山調、昭和50年2月神藤、内山訂正)

東京都立工業高等学校教頭会

昭和25年創立。昭和38年本会創立全校入会、その後工業高校教頭会支部となる。

はじめは校長会主催の教頭をねぎらう親睦の会であったが、昭和31年に校務主任会と名称を変え、会則を設けるなどし、会長と幹事3名で運営するようになり、昭和38年には幹事長と副幹事長、幹事4名に変更され現在に至ってい

る。組織は工業高校全校であるが、昭和31年共同実習所入会、昭和34年一橋工と羽田工が合併、同年烏山工新設、昭和38年は練馬・荒川・足立・葛西・田無・多摩・砧・杉並・町田・府中の新設10校、同年航空工廃止し、共同実習所を含めて29校となる。

年 度	昭25年	昭26年	昭27年	昭28年	昭29年	昭30年	昭31年	昭32年	昭33年	昭34年
会員数	19校	19校	19校	19校	19校	19校	20校	20校	20校	20校
会 費	会場校の負担から必要に応じ徴収するようになる						500円	500円	500円	500円
備 考	校長会主催の会から教頭会に発展									
	都立工業高校校務主任会									

昭35年	昭36年	昭37年
20校	20校	20校
500円	500円	500円
都立工業高校校務主任会		

(昭和19年2月内山・遊佐調、昭和50年2月内山・元田訂正)

東京都立商業高等学校教頭会

創立は昭和26年頃らしい。昭和38年本会創立時に全校入会。その後商業高校教頭会支部となる。

はじめのうちは記録がないので不明である

が、昭和32年に組織を強化し、幹事長制度を設け、年に数回の会合を行っている。

その後、昭和38年に四谷・赤羽の2校新設入会し、25校となった。

年 度	昭32年	昭33年	昭34年	昭35年	昭36年	昭37年
会員数	不	明			25校	
会 費	不	明			1,000円	
備 考	都立商業高校校務主任会					

(昭和49年2月八田調)

東京都立農業高等学校教頭会

昭和 24 年創立。昭和 38 年本会創立時に全校入会。その後農業高校教頭会支部となる。

はじめは記録がないので不明であるが、教頭の集まる会はあった。昭和 30 年に会則を設け、持ち廻り幹事で運営していたが、昭和 36 年に幹

事を 2 名に強化し、毎年 6 回の会合を行っている。会員数は昭和 32 年に農産高が独立、昭和 36 年大島・三宅・八丈の農業科 3 校入会、昭和 40 年瑞穂農芸高独立し、9 校となる。

年 度	昭 24 年	昭 25 年	昭 26 年	昭 27 年	昭 28 年	昭 29 年	昭 30 年	昭 31 年	昭 32 年	昭 33 年
会員数	4 校	4 校	4 校	4 校	4 校	4 校	4 校	4 校	4 校	5 校
会 費	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	500 円	500 円	500 円	500 円
備 考	教頭の集まる会はあったが細部不明									

昭 34 年	昭 35 年	昭 36 年	昭 37 年
5 校	5 校	8 校	8 校
500 円	500 円	500 円	500 円
都立農業高校校務主任会			

(昭和 49 年 2 月池田調、昭和 50 年 2 月山本訂正)

2. 会員数と会費の変遷

本会創立から現在まで、学校数・会員数・会費・新設校のあゆみを次の表にまとめた。

<変遷表について>

1. 本会が設立した昭和 38 年度は新設 17 校と廃校 1 校があるので 125 校から 140 校となつた。
2. 昭和 38 年～昭和 45 年は普十商・普十農・本校十分校・共同実習所など各々 1 校として入会、会員数は実際の学校数より多い。

3. 昭和 38 年大森高馬込分校（定）は南高として新設、同年代々木高（定）は 3 部制となり入会。

4. 昭和 40 年浅草高（定）は東高（全）に変り新設、昭和 46 年大島高差木地分校は大島南校に変り新設。
5. 昭和 44 年秋川高、昭和 48 年大島南高に舍監長制度が新設され入会、昭和 48 年だけ世田谷工高は 2 人教頭であった。（昭和 52 年 2 月神藤・内山調、その後追加）

[会員数と会費の一覧表] (昭和 38 年以降)

年 度	学 校 数	会 員 数 (人)					年 会 費 (円)					新 設 高 校 名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1 校で 2 科や 2 名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計			
昭和 38 年	140 校	86 人	28 人	25 人	8 人	148 人	—	500 円	—	500 円	深沢 小岩 小平 南 大山 四谷商 赤羽商 荒川工 杉並工 砧工 練馬工 足立工 葛西工 田無工 多摩工 町田工 府中工 (計 17 校)	杉並共実 北多摩 三宅 代々木 五日市 八丈 赤坂 大島	(計 8)
# 39	141	88	30	25	8	151	—	500	—	500	練馬 (計 1 校)	杉並共実 赤坂 浅草(定) 八丈 江東共実 北多摩 大島 代々木 五日市 三宅 (計 10)	
# 40	144	90	30	24	9	153	—	500	—	500	秋川 久留米 東 瑞穂農芸 (計 4 校)	杉並共実 赤坂 大島 江東共実 北多摩 三宅 代々木 五日市 八丈 (計 9)	
# 41	145	91	30	20	6	147	—	500	—	500	日野 (計 1 校)	杉並共実 江東共実 (計 2)	

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※ 募集停止校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人	計		
昭和 42年	146	92	29	20	6	147	—	1,000	—	1,000	羽田 (計1校)	杉並共実 (計1)
" 43	147	94	29	20	6	149	—	1,000	—	1,000	東村山 (計1校)	秋川(含監長) 杉並共実 (計2)
" 44	149	97	28	20	6	151	—	1,000	—	1,000	国分寺 小笠原 (計2校)	秋川(含監長) 差木地分校(大島) (計2)
" 45	149	97	28	20	6	151	1,000	—	—	1,000	— (なし)	前年に同じ (計2)
" 46	155	102	28	20	6	156	1,000	—	—	1,000	淵江福生 新島 東大和忠生 大島南 (計6校)	秋川(含監長) (計1)
" 47	161	108	28	20	6	162	1,000	—	—	1,000	片倉府中東冲津 永山保谷芸術 (計6校)	前年に同じ (計1)
" 48	164	112	29	20	6	167	9,000	—	—	9,000	葛西南猪江清瀬 (計3校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 世田谷工(2人制) (計3)
" 49	168	116	28	20	6	170	9,000	—	—	9,000	高島足立西調布北 久留米西 (計4校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) (計2)
" 50	172	120	28	20	6	174	9,000	—	2,000	11,000	水元府中西武藏村山 野津田 (計4校)	前年に同じ (計2)
" 51	177	125	28	20	6	179	9,000	—	5,000	14,000	光丘八王子東青梅東 足立東武藏村山東 (計5校)	前年に同じ (計2)
" 52	184	132	28	20	6	186	9,000	—	5,000	14,000	青井調布南稻城 羽村篠崎小平西 秋留台 (計7校)	前年に同じ (計2)
" 53	191	139	28	20	6	193	9,000	—	6,000	15,000	蒲田八王子北昭島 大泉北成瀬城東 清瀬東 (計7校)	前年に同じ (計2)
" 54	196	144	28	20	6	198	9,000	—	6,000	15,000	永福足立新田南野 砂川武藏野北 (計5校)	前年に同じ (計2)
" 55	202	150	28	20	6	204	9,000	—	6,000	15,000	大森東大泉学園館 小川日野台小金井北 (計6校)	前年に同じ (計2)
" 56	202	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	田柄松ヶ谷 (計2校)	前年に同じ (計2)
" 57	204	152	28	20	6	206	9,000	—	6,000	15,000	— (なし)	前年に同じ (計2)
" 58	207	155	28	20	6	209	9,000	—	6,000	15,000	小平南田無山崎 (計3校)	前年に同じ (計2)
" 59	209	157	28	20	6	211	9,000	—	6,000	15,000	東大和南東村山西 (計2校)	前年に同じ (計2)
" 60	210	159	28	20	6	213	11,300	—	6,000	15,000	南平(計1校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 (計3)
" 61	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	— (なし)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計4)

年 度	学 校 数	会員数(人)				年会費(円)				新設高校名 ※募集停止・閉課程校名 ○転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名	
		普 通	工 業	商 業	農 業	計	都 費	私 費	個 人			
昭和 62年	210	160	28	20	6	214	11,300	—	6,000	17,300	—— (なし)	前年に同じ (計 4)
" 63	211	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	八王子高陵 (計 1校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 国際(開設) (計 5)
平成 元	212	162	28	20	6	216	11,300	—	8,000	19,300	国際 ※赤城台 (計 1校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 (計 4)
" 2	213	163	28	21	6	218	11,300	—	8,000	19,300	単位制 (計 1校)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 単位制(普・商) (計 5)
" 3	212	162	28	21	6	217	11,300	—	8,000	19,300	単位制を新宿山吹と改称	秋川(含監長) 大島南(含監長) 紅葉川中央校舎 隅田川堤校舎 新宿山吹(普・商) (計 5)
" 4	212	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	※紅葉川中央校舎 ○赤坂(普→商) ○五日市(普→商)	前年に同じ (計 5)
" 5	212	160	29	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	—— (なし)	前年に同じ (計 5)
" 6	213	160	28	23	6	217	11,300	—	10,000	21,300	(公立学校開設)	秋川(含監長) 大島南(含監長) 隅田川堤校舎、新宿山吹(普・商) (計 4)
" 7	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	※北京橋、京橋南 飛鳥開設	前年に同じ (計 4)
" 8	214	161	28	23	6	218	11,300	—	10,000	21,300	晴海総合高校開設 (計 1校)	前年に同じ (計 4)
" 9	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	—— (なし)	前年に同じ (計 4)
" 10	211	159	28	22	6	215	11,300	—	10,000	21,300	※江東工	前年に同じ (計 4)
" 11	211	158	28	22	6	214	11,300	—	10,000	21,300	——	新宿山吹2名から1名となる
" 12	212	167	33	21	6	230	11,300	—	10,000	21,300	桐ヶ丘南工開設 ※羽田、城北、秋川	教頭複数配置校大幅増 (計 18)
" 13	208	169	40	21	6	239	11,300	—	10,000	21,300	※明正、墨田川堤、 桜水商、牛込商、 清瀬東(英語コース) ○町田工(機械、電気情報、 工業化学→総合情報) 墨田工(自動車科新設)	教頭複数配置校 31校 (計 31)
" 14	207	170	39	20	6	238	11,300	—	10,000	21,300	つばさ総合 ※城南、大森東、永福、 大泉北、館、武蔵村山東、 稲城、八王子高陵、 池袋商、港工業、 大泉学園(国際教養コース)	同上 (計 31)
" 15	207	173	37	19	9	238	11,300	—	10,000	21,300	芦花 ※南、大泉学園、南野 新宿(進学重視型単位制)	同上 (計 31)
" 16	200	167	37	18	9	231	0	—	19,000	19,000	六郷工科、千早、大江戸 上水、杉並総合 ※忍岡、北野、青梅東 砂川、本所工業	同上 (計 31)

年 度	学 校 数	会員数(人)					年会費(円)				新設高校名 ※ 募集停止 ▲ 閉校名 △ 閉課程校名 ○ 転科した高校名	1. 1校で2科や2名教頭などの入会校名 2. 分校・共同実習所などの入会校名	
		普 通	工 業	商 業	農 業	そ の 他	計	都 費	私 費	個 人	計		
平成 17	194	165	34	18	8	/	225	0	—	19,000	19,000	一橋、六本木、美原 大泉桜、上野（一橋分校） 翔陽、砂川、若葉総合	副校長複数配置校 (計 26)
# 18	212	177	32	17	8	/	234	0	—	19,000	19,000	桜修館中等、小石川中等 両国附属中学、浅草、 青梅総合、総合工科 ※水元、深川商業、四谷商業 第二商業（全日）	同 上 (計 29)
# 19	191	167	26	12	7	/	214	0	—	19,000	19,000	板橋有徳、橘 八王子桑志、葛飾総合 東久留米総合 ※九段（普通科）、玉川 忠生（普通科）、第二商業（定） 王子工業（工業科） 赤坂（商業科） 市ヶ谷商業（商業科）	同 上 (計 23)
# 20	201	138	23	12	7	29	209	0	—	19,000	19,000	世田谷総合 ※小金井工業（工業科） ▲九段、忠生、王子工業 赤坂、市ヶ谷商業 農林、世田谷工業 王子工業、台東商業	同 上 (計 17)
# 21	201 <u>九段中等 含む</u>	138	21	11	6	32	208	0	—	18,000	18,000	大田桜台 ▲久留米、向島工業 八王子工業、向島商業 四谷商業、第二商業 △定期制で11校	同 上 (計 16)
# 22	204 <u>九段中等 分校含む</u>	135	21	11	5	36	208	0	—	18,000	18,000	富士附属中学、大泉附属中学 総合芸術、総合芸術駒場校舎 町田総合、多摩科学技術 南多摩中等、三鷹中等 ▲小石川、都立大学附属	同 上 (計 16)
# 23	202 <u>九段中等 分校含む</u>	134	21	11	5	36	207	0	—	18,000	18,000	王子総合 ▲芸術、総合芸術駒場校舎	同 上 (計 18)
# 24	200 <u>九段中等 含む</u>	133	21	11	5	35	205	0	—	16,500	16,500	▲北多摩	同 上 (計 18)
# 25	199 <u>九段中等 含む</u>	133	21	11	5	39	209	0	—	16,500	16,500		同 上 (計 22)
# 26	199 <u>九段中等 含む</u>	133	21	11	5	38	208	0	—	16,500	16,500		同 上 (計 21)

「その他」には総合学科、産業、芸術、国際、中等教育学校、付属中学校を含む。

3. 本会のあゆみ

昭和 32 年度 12 月 : 文部省は「学校教育法施行規則」を改正、第 22 条に教頭職を位置づけた。

昭和 35 年度 4 月 : 都教委は「東京都公立学校の管理運営に関する規則」に教頭職を設け、「校務主任」を「教頭」に改め、辞令を渡した。

4 月 : 文部省は教頭を「管理または監督の地位にある管理職手当支給対象」に入れた。都教委は教頭を管理職と位置づけ、はじめて管理職手当 7% を支給した。

昭和 37 年度 38 年 1 月 : 全国高等学校教頭会は、都立両国高校で創立総会を開催した。

昭和 38 年度 6 月 20 日 : 都立高校校務主任会（普通科教頭会）と各職業高校校務主任会（各職業科教頭会）が合同し、「東京都立高等学校教頭会」が誕生した。当時の会員数は 140 校 148 人であった。

昭和 39 年度 40 年 1 月 : 「I L O 78 号条約批准にともなう国内法の改正」により「人事院規則 17-0」を改正した。都教委は管理職手当を 8% に増額した。

昭和 41 年度 7 月 9 日 : 文部省は教頭を正式に管理職の範囲に指定した。

昭和 42 年度 6 月 : 都教委は教頭の管理職手当を 10% に増額した。

昭和 45 年度 : 都教委は教頭の管理職手当を 10% から 15% に増額、教頭会に教育研究団体会費（都費）1 校あたり 1,000 円の割で補助された。本会はこの年「全国高等学校教頭会」に正式加入し、本会会則の一部改正により、毎年交代制の代表幹事を、継続できる会長制に改め、組織を強化した。この年から東京都立高等学校教頭研究協議会が箱根三昧荘にて 1 泊 2 日で始まった。翌年からは 2 泊 3 日の研究協議会になった。

昭和 46 年度 5 月 : 「教育職員の給与等に関する特別措置法」の公布があり、教諭に 4% の教職調整額が支給された。

47 年 1 月 : 都教委は教頭が教諭なので、管理職手当を 15% から 13% に減額した。

昭和 47 年度 「教頭職の法制化」を望む世論の高まりと共に教頭会意識も強まり、「親睦会的体質」から「活動できる体質」へ改善に着手した。役員組織、学区別・学科別支部教頭会、研究部会組織、継続活動のできる独立した事務局、これらの運営に必要な資金等を調査研究し、翌年度から 3 年計画で実施することにした。

昭和 48 年度 会則を変更し、活動のための細則を新設した。また、全国高等学校教頭会と協力し事務所を新設した。本会は新役員組織と活動組織を新しくスタートさせ、本会の基礎となる大改革に着手した。都教委のご理解により、教育研究団体会費（都費）が 1 校 1,000 円から 9,000 円に増額された。そのお蔭で研究集録・会報の増刊号が刊行できた。

49 年 2 月 25 日 : 法律第 2 号「教員の人材確保に関する特別措置法」の公布があり、教頭職の法制化を望む世論の高まりと共に教頭会の活動に期待をよせる声が高まった。本会は全国高等学校教頭会に協力し、教頭職法制化と教頭職 1 等級格付に全力をあげ活動した。

昭和 49 年度 6 月 1 日 : 法律第 70 号「学校教育法の一部を改正する法律」の公布により、教頭職が法制化されたので、都教委は 10 月 1 日教頭に「教頭職」を命ずる辞令伝達式を挙行した。

50 年 3 月 31 日 : 法律第 9 号「一般職の職員の給与に関する法律の一部を改正する法律」が公布される。（昭和 49 年神藤、内山調）

昭和 50 年度 4 月 1 日 : 都教委は教頭職の 75% を 1 等級に昇格発令した。これで「3 年計画」の 3 年目、永年の念願が法律上完成了。本会の活動のため、会則の一部改正と各種内規を設け、活動資金 1 名 5,000 円（個人負担）の特別会費を 10 月に臨時総会を開き決定した。「活動できる体質」改善 3 年計画は、全員一致協力のもとでめでたく完了した。

12 月 : 文部省は主任制度化のための学校教育法施行規則の改訂を公布した。

昭和 51 年度：石油ショックで、東京都立高等学校教頭研究協議会は宿泊研修を中止し、2日の日程で、都内実施となった。

昭和 53 年度 6 月 8 日：総会で、特別会費 5,000 円から 6,000 円に改正された。

昭和 55 年度 5 月 22 日：法律第 57 号改正「教頭定数法」が施行され、教諭定数内で扱われていた教頭は、正式定数と定められた。その給与は地方交付税制度により、保証が受けられる。

5 月：事務局は渋谷区宇田川のアパートから、同区道玄坂の島田ビル 4 階へ移転した。

7 月 15 日：東京都条例第 71 号改正給与条例の公布と、東京都教育委員会規則第 29 条「昇給等に関する規則」の改正により、本年 4 月 1 日付で、校長は特 1 等級、教頭は 1 等級に全員格付けされた。これは昭和 52 年 12 月 21 日「給与法の一部改正」の公布によるものである。

昭和 57 年度：創立 20 周年を迎えて、3 月 4 日「創立 20 周年記念号」を発行した。

昭和 59 年度 8 月：臨時教育審議会設置法が公布された。

昭和 60 年度 6 月 13 日：総会で、教育研究団体会費（都費）1 校あたり 9,000 円から 11,300 円へ改正され、通常会費が増額された。そのお陰で全日制・定時制合同の東京都立高等学校教頭研究協議会「研究協議会報告」創刊号が刊行できた。

昭和 62 年度：臨時教育審議会第 3 次答申（4 月）と最終答申（8 月）があった。これらに呼応して、研究部が中心となり、新しい時代の高校教育の改善と充実に務めていくことにした。

昭和 63 年度 5 月：文部省は、初任者研修法を公布した。

6 月 9 日：総会で、特別会費 6,000 円から 8,000 円に改正された。

平成 2 年度 9 月：都教委は、校長・教頭・指導主事の任用制度を改正した。

3 月 1 日：文部省は校長・教頭・永年勤続教諭に、期末・勤勉手当の傾斜配分加算率を通知した。

平成 3 年度 12 月：文部省は生徒数急減のため、学級定員を 45 ~ 40 名に学級編成基準を弾力化した。

平成 4 年度 6 月 23 日：本会の 30 周年記念式を挙行し、総会で、特別会費 8,000 円から 10,000 円に改正された。

9 月：学校 5 日制を目指し、月 1 回土曜日が休業日になる。これに対応するよう総務部が中心となり、各校の校内態勢整備に務めてきた。

（平成 4 年 赤津改訂）

平成 6 年度 4 月：普通科等の学級編成が 1 学級 40 人となり、入学選抜制度が、グループ選抜から各学校単独選抜となった。この制度は平成 6 年度の入学者から適用された。また、今年度から、高等学校學習指導要領が改定され、各校新教育課程の実施が始まった。本教頭会では、平成元年度から研究部が中心になって、これに伴う研究を継続してきた。

6 月：平成 8 年 7 月に行われる全国大会（東京大会）を主管するため、本会は企画委員会を発足させた。

12 月：都教委は、全都立学校の校長及び教頭に、職務に関する目標と成果及び職務に関する希望を自己申告させ、それらを参考して今年 12 月の期末手当から、勤勉手当へ成績率を導入し経過措置として人事管理の適正を図った。

平成 7 年度 5 月：全国大会（東京大会）準備委員会が総務部を母体にして結成され、11 月に団結式が行われた。

6 月：都教委は教頭問題等検討委員会を設立し、教頭の職務・任用制度・表彰制度・再雇用制度等について検討を始めた。本会からは川島副会長がその担当となった。（平成 7 年 奥井追加）

平成 8 年度 4 月・5 月：「補欠募集要項」、「全日制間の転学」について改正が行われた。

7 月～11 月：「教頭問題等検討委員会報告」（平成 8 年 3 月）、を受けて「校長及び教頭の任用に関する基準及び東京都教育委員会表彰実施要項の一部改正」（7 月）、「教頭職務の明確化のための規定整備について」（10 月）、「校長・教頭

業務実態調査について」(11月)、「東京都立学校事案決定規程の制定」(1月)等が相次いで出された。

7月23・24日：全国高等学校教頭会総会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

10月：本会の研究部活動活性化に向けての「アンケート調査」が行われた。

1月25日：「これからの中立高校の在り方」についての答申が公表された。

平成9年度 6月：第15期中央教育審議会が「21世紀を展開したわが国の教育の在り方について」、審議のまとめを答申した。

7月：教育職員養成審議会第1次答申が提出された。

8月：教育改革プログラムの主な改訂点が公表された。

9月：都立高校の予算について、検討報告書(案)が提出された。

10月：都立高校改革推進計画の概要が公表され、向う10年間の長期計画が具体化されることになった。

本年度の特徴的な活動として、都教委(指導部)との協議(2回)、定通・事務長との話し合いが持たれた。

3月：「都立学校あり方検討委員会報告書」が答申された。

平成10年度 6月：学校教育法の一部改正により、公立の中・高一貫校の設置が可能になった。都立高校では都立大学付属高校、三宅高校が発足する予定である。

7月：「東京都公立学校の管理運営に関する規則」の一部改正が行われた。

12月：東京都教員の「人事考課に関する研究会」より中間まとめが公表された。

3月：「高等学校学習指導要領」が公布された。

教頭会は都教委と本部役員会との連絡会を2回開催し、諸課題について情報交換を行い、全教頭に周知徹底に努めた。

平成11年度 10月：都立高校改革・二次実施計画により、全日制23校、定時制17校が統廃合または再編成計画の対象として発表された。

12月：教員人事考課制度につき検討委員会報告が出され、平成12年度より実施されることとなった。

平成12年度 4月：教頭複数配置校が複数学科、工業・農業学科、単位制その他の高校を中心に15校増加された。従来からの舎監・分校を含め計18名となった。

同月：教員人事考課制度発足。

9月：全定教頭研究協議会が教育庁主催から全定教頭会の共催に変更された。教育予算削減等によるものであり、この会の意義については認識に変化なく引き続き教育庁の指導・支援を得ながら運営すべきことが確認された。

平成13年度 4月：教頭複数配置校が31校になる。都教委主催の教頭連絡会が発足。教頭会への出席の服務の取り扱いが、職免へと変更。教頭の管理職手当が15%になる。

6月：学校運営連絡協議会が全部で実施される。

10月：学校運営組織に「主幹」の設置が決定され、実施は平成15年度からとなる。

平成14年度 4月：管理職降格制度の導入。

10月：都立学校改革推進計画、新たな実施計画の策定(15-18年)

11月：主幹選考の実施。

12月：自律経営推進予算の導入。

1月：入試学区の廃止。

平成15年度 4月：学校経営計画の導入。

11月：毎年11月第1土曜日を「東京都教育の日」とする。

11月：都からの分担金一挙全廃さる。

11月：事務局は渋谷区道玄坂の島田ビル4階から、文京区湯島のナーベルお茶の水2階へ移転した。

1月：「東京都教育ビジョン」中間まとめ発表。

3月：16年度より教頭の名称を副校長と変更。

平成16年度 4月：補助金なしの団体となる。(会費年1人19,000円)

6月：団体名を東京都立高等学校副校長会とする。

副校長任用一次筆記試験実施最終年度。

平成17年度 4月：副校長複数配置校が26校となる。

副校長研究協議会が9月から8月に変更。

平成18年度 4月：副校長複数配置校が29校となる。

7月：26～28日 第45回全国高等学校教頭会・研究協議大会が本会の主管で開催された。

副校長研究協議会が日程の関係で8月から9月に変更。

平成19年度 4月：副校長複数配置校23校となる。

8月：副校長研究協議会が日程の関係で9月から8月に変更。

管理職再雇用・再任用制度改革される。

平成20年度 9月：学校経営における副校長の役割の明確化（検討委員会最終報告）

12月：主任教諭制度の設置（平成21年度より）

平成21年度

定通副校長会との合併協議始まる。

教員用TAIMS端末が配備される。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成22年度

定通副校長会との合併が総会で承認される。

全日制部会の規約の改正が臨時総会で承認される。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

成績管理サーバー、旅費システム、自己申告システムが導入される。

平成23年度

東京都公立高等学校副校長協会の総会が開催された。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成24年度

都立高校改革推進計画第一次実施計画の初年度。

各学校で宿泊防災訓練を実施した。

成績管理システムが全校に配付された。

創立50周年記念式典、祝賀会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

推薦入試に集団討論が導入された。

平成25年度

都立高校改革推進計画第一次実施計画の2年目。

教科主任、教科会が設置された。

各学校でビブリオバトルに取り組む。

定期考查の民間会社による調査。

名古屋塾講師からの国語を除く定期考查問題の開示請求。

道徳・奉仕（仮称）の先行実施始まる。

各学校で宿泊防災訓練を実施。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。

平成26年度

都立高校学力スタンダード、生活指導統一基準、次世代リーダー育成道場が開始される。

入学者選抜の答案の再点検、マークシート方式の導入等新しい採点・点検方式の導入。

JETが配置される。

英語科教員の3か月海外派遣研修。

副校長研究協議会後に教育懇談会を実施した。

指導部との賀詞交歓会を実施した。



4. 本会のあゆみ一覧

本会運営は、昭和38年創立当初は幹事長制度、45年から会長制度、48年度には役員組織と部会組織の規定を設け、現在に至っている。

年 度	幹 事 長	総 会	刊 行 物
昭和 38	内山（立 川）	創立総会、白鷗（一）	会員名簿（13P）
〃 39	中馬（九 段）	総会、日比谷（一）	〃 （13P）
〃 40	志村（玉 川）	〃 白鷗（一）	〃 （13P） 私費軽減（10P）
〃 41	小笛（富 士）	〃 教育会館（一）	〃 （13P）
〃 42	鈴木（向 丘）	〃 私学会館（80名）	〃 （13P） 年間行事状況（4P）
〃 43	岸野（足 立）	〃 精養軒（90名）	〃 （13P） 会報（4P）
〃 44	池田（小松川）	〃〃（90名）	〃 （13P）〃（4P）
〃 45	青木（北 園）	〃〃（90名）	〃 （13P） 調査（5P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）不明 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）不明
全国高等学校教頭会に東京都全員入会			
〃 46	青木（北 園）	総会 出版クラブ（90名）	会員名簿（13P） 高校生徒指導研究協議会発表要旨（都教委編）33P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編）40P

年 度	○ 会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 総 務 部 会	研 究 部 部員数（部長名）	刊 行 物
昭和 47	○神 藤（桜 町） 波多野（江東商）	な し	総会、青山会館（100名） 臨時総会、私学会館（80名） 常任幹事会 5回 体質改善計画立案と実施準備	な し	会員名簿 15P 教頭勤務実態 10P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 49P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 40P
〃 48	○若 林（ 東 ） 波多野（江東商） 内 山（鳥山工）	○神 藤	総会、青山会館（110名） 臨時総会（90名） 総務部会 14名 5回 「体質改善3年計画」初年度着手 全国教頭会事務局内に本会事務局を設置	管理研 25名（安 部） 高校研 24名（西 村） 生徒研 23名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 67P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 不明	会員名簿 16P 会報創刊号 40P 研究集録創刊号 43P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 67P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 不明
〃 49	○内 山（鳥山工） 波多野（江東商） 安 部（北多摩）	○神 藤	総会、青山会館（100名） 総務部会 18名 6回 全国大会運営委員会（22名） 全国大会（九段会館・都市センター）	管理研 28名（吉 野） 高校研 24名（長 里） 生徒研 22名（古 賀） 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 32P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 48P 文部大臣特別出席	会員名簿 18P 会報第2号 58P 教頭職に関する調査・研究 25P 高校教頭研究協議会発表要旨（都教委編） 32P 高校生徒指導研究協議会研究集録（都教委編） 48P 出席 520名

年 度	○会長 副会長	事務局長 次長	総 会 総務部会	研 究 部 部員数(部長名)	刊 行 物
昭和 50	○内山(鳥山工) 千野(井草) 石坂(小石川)	○神藤	総会、出版クラブ(130名) 臨時総会、〃(85名) 総務部会19名5回 教頭会「体質改善3年計画」完了	管理研 28名(吉野) 高校研 26名(長里) 生徒研 22名(小林) 高校教頭研究協議会発表要旨(都教委編) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 18P 会報第3号 49P 研究集録第2号 72P 28P 44P
" 51	○千野(井草) 西村(千歳) 吉野(西)	○神藤 内山	総会、青山会館(125名) 総務部会29名5回	管理研 29名(金井) 高校研 30名(長里) 生徒研 37名(小林) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 19P 会報第4号 69P 研究集録第3号 75P 校長選考方法調査 5P 54P
" 52	○千野(井草) 梅本(北園) 伊藤(忍岡)	○神藤 内山	総会、青山会館(135名) 総務部会26名5回 全国大会運営委員会(79名) 全国大会(国立教育会館・プレスセンター・サンケイ会館)	管理研 35名(金井) 高校研 39名(山崎) 生徒研 37名(諏訪部) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 24P 会報第5号 75P 教頭研究協議会資料(研究集録第4号兼全国大会資料) 72P 44P 出席 736名
" 53	○青木(南) 乃方(目黒) 大畑(広尾)	○神藤 内山	総会、市ヶ谷会館(136名) 総務部会29名6回	管理研 48名(杉江) 高校研 51名(浅川) 生徒研 46名(吉田) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 24P 会報第6号 81P 研究集録第5号 33P 46P
" 54	○青木(南) 吉田(志村) 安西(農林)	○神藤 内山	総会、市ヶ谷会館(142名) 総務部会29名5回	管理研 50名(高橋) 高校研 73名(佐藤) 生徒研 52名(大滝) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第7号 83P 研究集録第6号 34P 63P
" 55	○川島(四谷南) 鮎沢(戸山) 大滝(葛西南)	神藤 代 ○内山 古賀	総会、市ヶ谷会館(161名) 総務部会30名5回 全国大会準備委員会(6名)	管理研 59名(高橋) 高校研 78名(田辺) 生徒研 54名(松井) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第8号 82P 研究集録第7号 42P 49P
" 56	○鮎沢(戸山) 赤津(大森) 桑原(板橋)	○内山 神藤 古賀	総会、市ヶ谷会館(175名) 総務部会32名5回 全国大会運営委員会(69名) 全国大会(国立教育会館・サンケイ会館・農協ホール)	管理研 65名(山田) 高校研 72名(鈴木) 生徒研 66名(白井) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 28P 会報第9号 88P 研究集録(全国大会資料兼) 42P 出席 973名
" 57	○赤津(大森) 牛込(駿宮) 岡田(国立)	○内山 神藤 古賀	総会、市ヶ谷会館(176名) 総務部会36名4回	管理研 65名(山田) 高校研 70名(鈴木) 生徒研 69名(白井) 創立20周年臨時号 (教頭の職務に関する研究特集) 高校教頭研究協議会研究集録(都教委編)	会員名簿 26P 会報第10号 74P 研究集録第8号 66P 研究集録第9号 138P 53P

年 度	○会 長 副 会 長	事務局長 次 長	總 會 總 務 部 會	研 究 部 部員數(部長名)	刊 行 物
昭和 58	○大 森(田園調布) 劍 持(杉並) 鈴 木(三商)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(174名) 総務部会33名 4回	管理研 66名(高橋) 高校研 71名(大山) 生徒研 72名(永井)	会員名簿 26P 会報第11号 78P 研究集録第10号 66P
" 59	○高 橋(明正) 飯 島(蒲田) 村 上(練馬工)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(154名) 総務部会34名 4回 全国大会調査委員会8名	管理研 66名(高橋) 高校研 75名(篠田) 生徒研 70名(山本)	会員名簿 26P 会報第12号 81P 研究集録第11号 67P
" 60	○山 本(駒場) 杉 内(江北) 清 水(国分寺)	○内 山 古 賀	總会、市ヶ谷会館(164名) 総務部会34名 4回 全国大会準備委員会34名 4回	管理研 68名(高橋) 高校研 78名(篠田) 生徒研 67名(岡本)	会員名簿 26P 会報第13号 83P 研究集録第12号 77P 研究協議会報告創刊号 54P
" 61	○山 本(駒場) 杉 内(江北) 小 宮(富士森)	○内 山 古 賀 赤 津	總会、市ヶ谷会館(177名) 総務部会35名 4回 全国大会運営委員会64名 4回 全国大会(国立教育会館、石垣ホール、ニッショウホール)	管理研 67名(白井) 高校研 72名(篠田) 生徒研 75名(白田)	会員名簿 26P 会報第14号 78P 研究集録第13号 74P 研究協議会報告第2号 59P 出席 1,101名
" 62	○中 村(竹早) 白 川(新宿) 廣 瀬(保谷)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(161名) 総務部会34名 4回	管理研 84名(高橋) 高校研 61名(田口) 生徒研 69名(栗田)	会員名簿 26P 会報第15号 74P 研究集録第14号 71P 研究協議会報告第3号 63P
" 63	○白 川(新宿) 廣 瀬(保谷) 中村(新)(千歳丘)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(158名) 総務部会34名 4回	管理研 93名(鈴木) 高校研 61名(田口) 生徒研 62名(栗田)	会員名簿 26P 会報第16号 71P 研究集録第15号 69P 研究協議会報告第4号 71P
平成 元	○崎 田(狛江) 奥 井(豊島) 小 峰(練馬)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(160名) 総務部会34名 4回	管理研 86名(木村) 高校研 64名(澤井) 生徒研 68名(福島)	会員名簿 27P 会報第17号 73P 研究集録第16号 63P 研究協議会報告第5号 68P
" 2	○奥 井(豊島) 木 村(国分寺) 和 田(光丘)	○古 賀 赤 津	總会、グランドビル市ヶ谷(151名) 総務部会34名 4回	管理研 85名(井上) 高校研 65名(進藤) 生徒研 68名(延藤)	会員名簿 27P 会報第18号 74P 研究集録第17号 68P 研究協議会報告第6号 73P
" 3	○木 村(国分寺) 和 田(光丘) 嶋 澤(芝商)	○赤 津 奥 井	總会、青山会館(140名) 総務部会33名 4回	管理研 86名(野中) 高校研 64名(大室) 生徒研 67名(原口)	会員名簿 27P 会報第19号 73P 研究集録第18号 68P 研究協議会報告第7号 69P
" 4	○高 橋(小平南) 栗 林(大泉学園) 井 上(瑞穂農芸)	○赤 津 奥 井	總会、青山会館(174名) 創立30周年記念式典・祝賀会 青山会館(120名) 総務部会34名 4回	管理研 81名(浦野) 高校研 70名(大室) 生徒研 66名(結城) 創立30周年記念誌 編集委員会(高橋)	会員名簿 27P 会報第20号 78P 研究集録第19号 66P 研究協議会報告第8号 55P 創立30周年記念誌 81P

年度	○会長 副会長	事務局長 次長	総会 総務部会	研究部 部員数(部長名)	刊行物
平成5	○高橋(小平南) 浦野(保谷) 井上(瑞穂農芸)	○赤津 奥井	総会、星陵会館(142名) 総務部会35名 4回	管理研 77名(桑原) 高校研 71名(武田) 生徒研 69名(横田) 平成5年1月、奥井	会員名簿 27P 会報第21号 67P 研究集録第20号 64P 研究協議会報告第9号 54P 昭和45~58年度について追加
#6	○原口(南野) 川島(富士) 内海(墨田工)	○赤津 奥井	総会、星陵会館(132名) 総務部会34名 4回 全国大会企画委員会(12名) 2回	管理研 74名(牛島) 高校研 75名(武田) 生徒研 68名(横田)	会員名簿 27P 会報第22号 68P 研究集録第21号 64P 研究協議会報告第10号 53P
#7	○原口(南野) 川島(富士) 白鳥(芝商)	○赤津 奥井	総会、星陵会館(130名) 総務部会35名 4回 全国大会企画委員会(12名) 3回 全国大会準備委員会(全員) 5回	管理研 73名(新妻) 高校研 75名(森本) 生徒研 70名(横田)	会員名簿 27P 会報第23号 68P 研究集録第22号 64P 研究協議会報告第11号 58P
#8	○白鳥(芝商) 安盛(小松川) 中西(井草)	○奥井 坪井	総会、星陵会館(137名) 総務部会35名 4回 全国大会企画委員会(12名) 5回 全国大会運営委員会(65名) 5回 全国大会(国立教育会館、灘尾ホール、石垣ホール)	管理研 74名(新妻) 高校研 72名(森本) 生徒研 72名(廣見)	会員名簿 27P 会報第24号 82P 研究集録第23号 62P 研究協議会報告第12号 60P 出席1,260名
#9	○白鳥(芝商) 安盛(小松川) 中西(井草)	○奥井 坪井	総会、星陵会館(152名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(松江市) 61名参加	管理研 64名(新妻) 高校研 74名(東) 生徒研 77名(小泉)	会員名簿 24P 会報第25号 60P 研究集録第24号 54P 研究協議会報告第13号 54P
#10	○東(富士) 山口(府中) 松尾(農業)	○奥井 坪井	総会、星陵会館(144名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(秋田市) 82名参加	管理研 70名(新妻) 高校研 73名(松尾川) 生徒研 72名(中村)	会員名簿 24P 会報第26号 58P 研究集録第25号 56P 研究協議会報告第14号 62P
#11	○鈴木(深川) 山口(府中) 齋藤(中野工)	○奥井 高橋	総会、星陵会館(169名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(高知市) 83名参加	管理研 72名(新妻) 高校研 71名(小林) 生徒研 71名(大澤)	会員名簿 24P 会報第27号 60P 研究集録第26号 49P 研究協議会報告第15号 56P
#12	○山口(府中) 上林(武蔵野北) 相川(三商)	○奥井 高橋	総会、星陵会館(108名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(横浜市) 85名参加	管理研 78名(白木) 高校研 73名(小林) 生徒研 79名(橋本)	会員名簿 24P 会報第28号 60P 研究集録第27号 48P 研究協議会報告第16号 55P
#13	○相川(三商) 矢嶋(足立) 渡邊(向島工)	○高橋 白鳥	総会、星陵会館(65名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(長崎市) 83名参加	管理研 78名(平山) 高校研 79名(村井) 生徒研 82名(坂本)	会員名簿 24P 会報第29号 56P 研究集録第28号 48P 研究協議会報告第17号 55P
#14	○町田(保谷) 坂本(小平南) 合津(藏前工)	○高橋 白鳥	総会、フロラシオン青山(59名) 創立40周年記念式典・祝賀会、 フロラシオン青山(83名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(富山市) 82名参加	管理研 72名(針馬) 高校研 80名(初見) 生徒研 84名(梶野)	会員名簿 24P 会報第30号 62P 研究集録第29号 49P 研究協議会報告第18号 55P 創立40周年記念誌 88P

年 度	○会 長 副 会 長	事務局長 次 長	総 会 總 務 部 会	研 究 部 部員數(部長名)	刊 行 物
平成 15	○坂 本(小平南) 錦 織(稻 城) 後 藤(農 業)	○高 橋 白 鳥	総会、星陵会館(28名) 総務部会35名 4回 幹事会 65名 2回 全国大会(岐阜市) 68名参加	管理研 76名(伊 藤) 高校研 77名(福 鳴) 生徒研 83名(鹿 目)	会員名簿 22P 会報第31号 63P 研究集録第30号 44P 研究協議会報告第19号 47P
" 16	○錦 織(府 中) 和 田(南 野) 高 田(台東商)	○高 橋 白 鳥	総会、公文書館(150名) 総務部会33名 5回 幹事会 48名 1回 全国大会(和歌山市) 44名参加	管理研 88名(北 林) 高校研 68名(根 本) 生徒研 73名(山 本)	会員名簿 22P 会報第32号 69P 研究集録第31号 34P 研究協議会報告第20号 51P
" 17	○錦 織(府 中) 和 田(保 谷) 小 島(蔵前工)	○白 鳥 松 野	総会、都教職員研修センター(約20名) 総務部会33名 5回 幹事会 48名 1回 全国大会(札幌市) 37名参加	管理研 106名(古 山) 高校研 68名(菊 池) 生徒研 54名(長 島)	副校長名簿 23P 会報第33号 88P 研究集録第32号 34P 研究協議会報告第21号 55P
" 18	○和 田(保 谷) 小 島(蔵前工) 玉 井(志 村)	○白 鳥 綿 田	総会、エミール(50名) 総務部会31名 5回 幹事会 38名 1回 全国大会(東京都大田区) 233名参加	管理研 72名(本 多) 高校研 78名(塚 本) 生徒研 84名(都 築)	副校長名簿 26P 会報第34号 101P 研究集録第33号 66P 研究協議会報告第22号 75P
" 19	○和 田(調布北) 玉 井(竹 台) 飯 島(農 産)	○白 鳥 綿 田	総会、都立忍岡高校(28名) 総務部会30名 6回 幹事会 29名 3回 全国大会(山口市) 37名参加	管理研 67名(有 馬) 高校研 71名(佐 藤) 生徒研 76名(都 築)	副校長名簿 27P 会報35号 101P 研究集録34号 48P 研究協議会報告23号 74P
" 20	○錦 織(武 藏) 玉 井(竹 台) (会長代行) 都 築(雪 谷) 高 橋(市ヶ谷商)	○白 鳥 町 田	総会、家庭クラブ会館(47名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(郡山市) 41名参加	管理研 68名(下 條) 高校研 75名(志 村) 生徒研 66名(熊 谷)	副校長名簿 28P 会報36号 102P 研究集録35号 53P 研究協議会報告24号 58P
" 21	○玉 井(竹 台) 都 築(雪 谷) 守 屋(墨田工業)	○白 鳥 針 馬	総会、家庭クラブ会館(31名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(高松市) 27名参加	管理研 71名(宮 本) 高校研 70名(仁井田) 生徒研 67名(鈴 木)	副校長名簿 31P 会報37号 121P 研究集録36号 44P 研究協議会報告25号 68P
" 22	○都 築(雪 谷) 小 堀(農 産)	○白 鳥 針 馬	総会、文京シビックセンター(49名) 臨時総会、文京シビックセンター(46名) 総務部会 31名 年6回 常任幹事会 23名 年3回 幹事会 年1回 全国大会(宇都宮市) 22名参加	管理研 76名(遠 山) 高校研 64名(齋 藤) 生徒研 68名(藪 田)	副校長名簿 30P 会報38号 121P 研究集録・研究協議会報告37号 128P

年 度	◎会長 ○部会長 副部会長	事務局長 次長	総 会 総務部会	研究部 部員数(委員長)	刊行物
平成 23	◎堀 江(武蔵村山) ○都 築(大崎) 守屋(総合工科) 昼間(葛飾商業)	○白鳥 針馬	総会、都立大崎高校(62名) 全日制部会総会、〃(36名) 幹事会 28名 年1回 総務部会 37名 年11回 関東大会(甲府市) 15名参加 全国大会(大分市) 20名参加	管理研① 34名(木田) 管理研② 37名(小林) 高校研① 36名(生田) 高校研② 28名(高島) 生徒研① 42名(樋口) 生徒研② 30名(岡島)	副校長名簿 30P 会報39号 120P 研究集録・研究協議会 報告38号 128P
〃 24	◎小堀(農産) ○守屋(総合工科) 都築(大森) 黒澤(多摩工業)	○白鳥 針馬	総会、都立農産高校(54名) 全日制部会総会、〃(34名) 幹事会 22名 年1回 総務部会 37名 年11回 関東大会(宇都宮市) 9名参加 全国大会(長野市) 22名参加	管理研① 33名(小林) 管理研② 32名(富川) 高校研① 41名(渡邊) 高校研② 29名(宮川) 生徒研① 37名(吉田) 生徒研② 33名(難波)	副校長名簿 30P 会報40号 124P 研究集録・研究協議会 報告39号 126P 創立50周年記念誌 114P
〃 25	◎中間(江北) ○守屋(総合工科) 瀧澤(足立工業) 柄倉(飛鳥)	○白鳥 針馬	総会、文京区民センター(62名) 全日制部会総会、〃(36名) 幹事会 28名 年1回 総務部会 38名 年11回 関東大会(水戸市) 13名参加 全国大会(伊勢市) 13名参加	管理研① 30名(高山) 管理研② 32名(川口) 高校研① 38名(福田) 高校研② 36名(中山) 生徒研① 30名(博田) 生徒研② 43名(外川)	副校長名簿 30P 会報41号 119P 研究集録・研究協議会 報告40号 122P
〃 26	◎福田(杉並) ○長江(篠崎) 笹平(王子総合) 榎(武藏)	○錦織 針馬	総会、文京区民センター(59名) 全日制部会総会、〃(33名) 幹事会 28名 年1回 総務部会 38名 年10回 関東大会(高崎市) 14名参加 全国大会(京都市) 27名参加	管理研① 35名(服部) 管理研② 33名(渋谷) 高校研① 32名(加藤) 高校研② 42名(今井) 生徒研① 30名(山下) 生徒研② 36名(室岡)	副校長名簿 30P 会報42号 117P 研究集録・研究協議会 報告41号 120P



2. 総務部会報告

全日制部会長 長江 誠

1. 本部の活動（総務部会・幹事会の詳細は別記）

平成26年

- 4月10日(木) 都第1回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
5月 1日(木) 都会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
5月 8日(木) 都第2回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
5月 9日(金) 全国会計監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
5月19日(月) 全国第1回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
6月 9日(月) 全国第1回理事研究協議会（アルカディア市ヶ谷）
6月14日(土) 都第3回総務部会（文京区民センター）
6月14日(土) 都第1回幹事会（文京区民センター）
6月14日(土) 平成26年度 都副校長協会総会（文京区民センター）
6月14日(土) 平成26年度 都副校長協会全日制部会総会（文京区民センター）
7月 3日(木) 都第4回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
7月 4日(金) 全国第2回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
7月 7日(月) 第1回校長協会、経営企画室長会等連絡会議（ナーベルお茶の水・会員集会室）
7月30日(水) 全国第2回理事研究協議会・研究部会（京都府 ルビノ京都堀川）
7月31日(木) 全国高等学校教頭・副校長会総会、研究協議大会（京都府 みやこめっせ）
8月 1日(金) 全国高等学校教頭・副校長会研究協議大会（京都府 みやこめっせ）
8月13日(水) 都副校長研究協議会（都教職員研修センター）
8月28日(木) 全国研究集録 編集会議（ナーベルお茶の水・事務局）
8月28日(木) 都第5回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
10月 2日(木) 都中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
10月 3日(金) 全国中間監査・本部役員会（ナーベルお茶の水・事務局）
10月 9日(木) 都第6回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
10月20日(月) 全国第3回総務部会（アルカディア市ヶ谷）
11月 6日(木) 都第7回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
11月21日(金) 全国第3回理事研究協議会（フロラシオン青山）
12月 4日(木) 都第8回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
12月 5日(金) 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会（群馬県高崎市 高崎シティギャラリー）
12月17日(水) 第2回校長協会、経営企画室長会等連絡会議（都校長協会会議室）

平成27年

- 1月 8日(木) 都第9回総務部会（個室宴会場 AGORA（アゴラ））
1月 8日(木) 教育庁指導部との賀詞交歓会（個室宴会場 AGORA（アゴラ））
3月12日(木) 都第10回総務部会（ナーベルお茶の水・会員集会室）
3月27日(金) 本部新旧役員引継ぎ会（ナーベルお茶の水・事務局）

2. 平成26年度予算

【一般会計】

平成 26 年 4 月 1 日
東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

収入

(単位:円)

項目	前年度予算	前年度決算	本年度予算	備考
一般会費	2,562,500	2,546,000	2,550,000	12,500 円 × 204 名
研究助成金	800,000	800,000	800,000	(財) 日本教育公務員弘済会東京支部
雑収入	500	306	300	預金利息
繰越金	1,201,417	1,201,417	1,307,153	平成 25 年度より
その他	100,000	111,000	100,000	全国高等学校教頭・副校長会
合計	4,664,417	4,658,723	4,757,453	

支出

項目	前年度予算	前年度決算	本年度予算	備考
運営費	会議費	120,000	111,032	総務部会・幹事会・総会・役員会
	印刷費	100,000	19,635	資料・封筒・コピー・用紙等
	旅費交通費	300,000	297,320	総務部会交通費・関東大会
	涉外費	100,000	24,000	講師謝礼・友好団体祝儀等
	運搬送料費	200,000	129,657	宅配郵送料等
	資料費	100,000	93,105	教職員名簿・日本教育会(0円3600×21名)等
	周年行事積立金	100,000	100,000	平成 34 年度予定 (60 周年)
	全国大会積立金	200,000	200,000	平成 28 年度予定
	通信信費	200,000	124,174	郵券・振込料、H P 作成費
	消耗品費	30,000	10,964	事務用品等
事業費	雑費	2,000	400	
	小計	1,452,000	1,110,287	1,752,000
	学科別副校長会費	60,000	56,082	商業・工業・農業 @ ¥20000 × 3
	地区別副校長会費	360,000	354,425	@20000 × 6 地区(A, C) @40000 × 6 地区(B, D)
	地区研究部会費	60,000	60,000	@ ¥5000 × 12 地区 (全地区)
	研究協議会費	40,000	15,181	40,000
	会員名簿	100,000	42,072	80,000 A4 550 部
	会報費	500,000	396,270	450,000 A4 630 部
維持費	研究集録・研究協議会報告	400,000	303,655	400,000 A4 650 部
	小計	1,520,000	1,227,685	1,450,000
	慶弔費	30,000	23,937	香典・見舞金等
	人件費	650,000	578,000	全国分担金 (実質 7/100)
	家賃・光熱費	450,000	389,000	全国分担金 (実質 14/100)
	小計	1,130,000	990,937	1,130,000
	予備費	562,417	22,661	425,453
合計		4,664,417	3,351,570	4,757,453

全国会費預かり金

項目	前年度予算	前年度決算	本年度予算	備考
全国会費	820,000	820,000	816,000	全都立校副校長分 (@¥4000 × 204名)

平成 26 年度積立金会計

平成 26 年 4 月 1 日
東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

〈創立 60 周年積立金〉

(単位:円)

項目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
創立 60 周年積立金	1,400,000	100,000	1,500,000	平成 34 年度実施予定
雑 収 入	1,440	150	1,590	預金利息
合 計	1,401,440	100,150	1,501,590	

〈全国大会積立金〉

(単位:円)

項目	繰越金	本年度積立予定額	合 計	備 考
全国大会積立金	1,400,000	300,000	1,700,000	平成 28 年度実施予定
雑 収 入	2,602	150	2,752	預金利息
合 計	1,402,602	300,150	1,702,752	

(注) 日本教育会に都会計より振込して、以下の人たちが入会する。

- ・常任幹事 15 名
 - ・都部会長 (1) ・都副部会長 (2) 3 名
 - ・全国会長 (1) ・副会長 (1) ・会計 (1) 3 名
- 21 名

1 人 ¥3,600 (年間)

3. 平成 26 年度事業報告

平成 27 年 3 月 31 日

東京都公立高等学校副校長協会 全日制部会

会合

幹事会 6月14日(土) 文京区民センター

総会 6月14日(土) 文京区民センター

副校長研究協議会 8月13日(水) 都教職員研修センター

総務部会 4月10日(木) 5月 8日(木) 6月14日(土) 7月 3日(木) 8月28日(木)

10月 9日(木) 11月 6日(木) 12月 4日(木) 1月 8日(木) 3月12日(木)

ナーベルお茶の水 会員集会室他

指導部との賀詞交歓会 1月 8日(木) 個室宴会場 A G O R A (アゴラ)

地区支部副校長会 原則として副校長連絡会の日 地区ごとに開催

学科支部副校長会 原則として副校長連絡会の日 (3 学科)

研究部会 各地区 部・委員会ごとに開催

総務部会

- 1 諸会議についての協議と原案の作成、学科・研究部相互の連絡・情報交換を行った。
- 2 副校長名簿、研究集録・研究協議会報告等を編集し発行した。
- 3 教育庁、全国高等学校教頭・副校長会、各種友好団体との連絡・情報交換・陳情・提言を行った。
- 4 教育庁、校長協会、経営企画室長会等関係団体との連絡・協議・連携の維持を行った。
- 5 全国高等学校教頭・副校長会第53回全国大会(京都大会)への参加と支援を行った。
- 6 「北から南から」(全国教頭・副校長会出版)を、新任副校長に配付した。
- 7 ホームページ及びメーリングリストの管理・運営を行った。

研究部会

- 1 全会員が管理運営・高校教育・生徒指導の3部会6委員会に分かれ研究協議を行った。
- 2 研究成果を研究集録・研究協議会報告にまとめ、教育庁・都立高等学校長・全定通副校長に配付した。
- 3 都立高等学校副校長研究協議会には各委員会より各1主題の発表を行った。
全国高等学校教頭・副校長会の全国大会には1主題(管理研)の研究発表を行った。西部Cが担当した。
- 4 都立高等学校副校長研究協議会発表担当者は、東部B(管理研第1)・東部D(管理研第2)・西部D(高校研第1)・中部B(高校研第2)・中部D(生徒研第1)・西部B(生徒研第2)であった。

全国大会

1 期 日 7月30日(水) 全国研究部会・全国理事会

31日(木) 総会・研究協議会(分科会)

8月 1日(金) 研究協議会(分科会)

2 開催地 京都府京都市 みやこメッセ 都の参加者 27名

関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会

1 期 日 12月 5日(金)

2 開催地 群馬県高崎市

3 主 管 群馬県高等学校教頭・副校長会 都の参加者 14名

刊行物

総会資料(平成26年度版)	6月刊行	20p	教育庁・校長・全定通副校長等に配布	500部
平成26年度副校長名簿	6月刊行	30p	"	550部
研究集録・研究協議会報告(第41号)	平成26年12月刊行	120p	"	650部
会報(第42号)	平成27年 3月刊行	117p	"	630部

4. 副校長協会 総会

平成26年6月14日(土)14時40分～16時00分

場所 文京区民センター3階 3-A会議室

講 演「副校長に期待すること」

前都立葛飾総合、本所工業高等学校長

三田 清一 先生

開会の辞……………司会 定時制副部会長

大島 和華子（神代）

国歌斉唱

副校長協会挨拶……………全日制部会長

守屋 誠一（総合工科）

東京都教育委員会挨拶……指導部主任指導主事

佐藤 聖一 先生

東京都公立高等学校長協会挨拶……………協会長

柴田 哲 先生（墨田川）

議事

1. 平成25年度事業報告……………会 長

2. 平成26年度役員選出……………会 長

3. 新会長挨拶……………新会長

4. 副会長他役員紹介……………新会長

5. 平成26年度常任幹事承認……………新会長

6. 平成26年度各部会役員委嘱……………新会長

7. 平成26年度事業計画（案）について

……………新会長

閉会の辞……………司会 定時制副部会長

大島 和華子（神代）

注 議事はいざれも異議なく承認された。

(出席者 59名)

5. 全日制部会 総会

平成26年6月14日(土)16時05分～16時50分

場所 文京区民センター3階 3-A会議室

開会

部会長挨拶

議事

1. 平成25年度事業報告……………部 会 長

2. 同 決算報告……………会 計

3. 同 会計監査報告……………会計監査

4. 平成26年度役員選出……………部 会 長

5. 同 全日制部会幹事について…部 会 長

6. 正副部会長他紹介（全国推薦者を含む）

常任幹事・会計・会計監査・研究部長・

委員長・事務局等紹介……………新部会長

7. 平成26年度事業計画(案)について新部会長

8. 同 予算案について……新 会 計

閉会

注 議事はいざれも異議なく承認された。

(出席者 38名)



6. 幹事会

総会に次ぐ機関で主に総会提出議案や全日制部会や定通制部会からの原案を審議する。

平成26年6月14日(土) 14時15分～14時35分

場所 文京区民センター 3-A会議室

出席者 会長、副会長、会計、会計監査

全日制常任幹事、定通制常任幹事

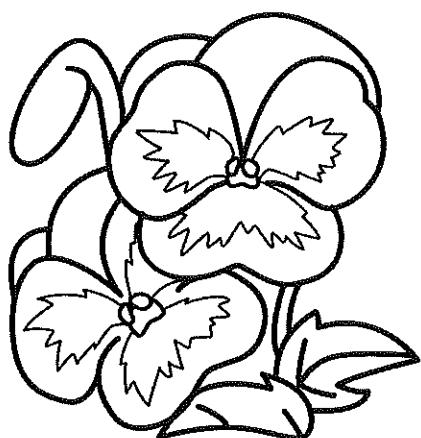
計 28名

【会議次第】

- | | |
|------------------|----|
| 司会・議長 部会長 | |
| 1 会長挨拶 | 会長 |
| 2 平成25年度事業報告 | 会長 |
| 3 平成26年度役員について | 会長 |
| 4 平成26年度事業計画について | 会長 |
| 5 総会の運営について | 会長 |
| 6 研究協議会の実施について | 会長 |

※幹事会は年1回、6月に開催される。

(出席者 22名)



7. 総務部会

第1回総務部会

平成26年4月10日(木) 19時00分～20時30分

- 於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- | | |
|------------------------------|--------|
| 1 部会長挨拶 | 守屋部会長 |
| 2 自己紹介 | 出席者 |
| 3 昨年度の報告と今年度の課題
(事業計画他) | 守屋部会長 |
| 4 会合日程その他の連絡 | 事務局 |
| 5 新役員推薦（会長、部会長、副部会長、会計、会計監査） | 守屋部会長 |
| 6 全国役員候補（会長、副会長、会計）推薦 | 守屋部会長 |
| 7 新旧役員（全国、都関係）挨拶 | 新旧役員 |
| 8 全国高等学校教頭・副校长会報告 | 玉井全国会長 |
| 9 前期会費の集金について | 守屋部会長 |
| 10 各地区での活動について | 守屋部会長 |
| 11 地区・学科からの報告 | 各常任幹事他 |
| 12 事務局より | 事務局 |

第2回総務部会

平成26年5月8日(木) 19時00分～20時30分

- 於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- | | |
|----------------------|------------|
| 1 部会長挨拶 | 守屋部会長 |
| 2 平成25年度事業報告と会計報告 | 守屋部会長、加瀬会計 |
| 3〃 会計監査報告 | 杉本会計監査 |
| 4 平成26年度役員組織（都・全国候補） | 守屋・玉井会長 |
| 5 新旧役員挨拶（4月に欠席した役員） | |
| 6 平成26年度事業計画と予算案 | 守屋部会長、会計 |
| 7 事務局より | 事務局 |
| 8 地区、学科からの報告・意見等 | 常任幹事 |
| 9 その他 | |

第3回総務部会

- 平成26年6月14日(土) 13時40分～14時10分
於、文京区民センター 3-A会議室
- 1 部会長挨拶……………守屋部会長
 - 2 平成25年度事業報告と会計報告……………守屋部会長、加瀬会計
 - 3 " 会計監査報告……………杉本会計監査
 - 4 平成26年度役員組織（都・全国候補）……………守屋・玉井会長
 - 5 平成26年度事業計画と予算案……………新部会長、会計
 - 6 事務局より……………事務局
 - 7 地区、学科からの報告・意見等……………常任幹事
 - 8 その他

第4回総務部会

- 平成26年7月3日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告……………玉井全国会長
 - 3 全国大会（京都大会）について……………玉井全国会長
 - 4 副校長協会総会の総括……………長江部会長
 - 5 副校長研究協議会について……………長江部会長
 - 6 全・定・通合同教育懇談会の開催について……………長江部会長
 - 7 校長協会、企画室長会との第1回連絡会について……………長江部会長
 - 8 地区、学科からの報告……………常任幹事
 - 9 事務局より……………事務局
 - 10 協議・情報交換・今後の課題などについて……………長江部会長他
 - 11 その他

第5回総務部会

- 平成26年8月28日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告（京都大会について）……………瀧澤全国会長
 - 3 北海道大会での東京の発表について……………長江部会長
 - 4 副校長研究協議会の報告・反省……………長江部会長

- 5 「研究集録・研究協議会報告」の作成について……………長江部会長
- 6 校長協会、企画室長会との第1回連絡会について……………長江部会長
- 7 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………長江部会長
- 8 後期会費納入のお願い……………長江部会長
- 9 地区、学科の報告……………常任幹事
- 10 事務局より……………事務局
- 11 協議・情報交換・今後の課題などについて……………長江部会長
- 12 その他

第6回総務部会

- 平成26年10月9日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告……………瀧澤全国会長
 - 3 平成27年度全国大会（北海道）について、発表地区など……………長江部会長
 - 4 平成28年度全国大会（東京）について……………長江部会長
 - 5 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………長江部会長
 - 6 「研究集録・研究協議会報告第41号」の作成について……………長江部会長
 - 7 会計中間報告、会計監査報告……………会計・会計監査
 - 8 後期の会費納入について……………長江部会長
 - 9 会報第42号（平成26年度）の編集について……………長江部会長
 - 10 地区、学科の報告……………常任幹事
 - 11 事務局より……………事務局
 - 12 今後の課題（来年度以降の役員）……………長江部会長
 - 13 その他

第7回総務部会

- 平成26年11月6日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告……………瀧澤全国会長

- 3 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………長江部会長
- 4 指導部との賀詞交歓会について……………長江部会長
- 5 後期の会費納入について……………長江部会長
- 6 会報第42号（平成26年度）の編集について……………長江部会長
- 7 地区、学科の報告……………常任幹事
- 8 事務局より……………事務局
- 9 協議・情報交換・今後の課題などについて……………長江部会長
- 10 その他

【講演】

「都立高校と私立高校の違い」

元都立墨田川高等学校長

前千代田女学園中学校・高等学校長

大澤 紘一 先生

第8回総務部会

- 平成26年12月4日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告……………瀧澤全国会長
 - 3 来年度の役員選出について……………長江部会長
 - 4 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会について……………長江部会長
 - 5 指導部との賀詞交歓会について……………長江部会長
 - 6 後期の会費納入について……………長江部会長
 - 7 校長協会・企画室長会との第2回連絡協議会について……………長江部会長
 - 8 地区、学科の報告……………常任幹事
 - 9 事務局より……………事務局
 - 10 協議・情報交換・今後の課題などについて……………長江部会長
 - 11 その他

【講演】

「夢を持てば子供は変わる」

株式会社 P & H 代表取締役

高岸 実 氏

第9回総務部会

- 平成27年1月8日(木) 18時30分～18時50分
於、個室宴会場 AGORA(アゴラ)
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 来年度以降の役員選出について……………長江部会長
 - 3 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会報告……………長江部会長
 - 4 校長協会・企画室長会との第2回連絡協議会について……………長江部会長
 - 5 事務局より……………事務局
 - 6 その他
- 引き続き、指導部との賀詞交歓会を行ったため、短時間となった。

第10回総務部会

- 平成26年3月12日(木) 19時00分～20時30分
於、ナーベルお茶の水2階 会員集会室
- 1 部会長挨拶……………長江部会長
 - 2 全国高等学校教頭・副校長会報告……………瀧澤全国会長
 - 3 平成28年度全国大会（東京）について……………長江部会長
 - 4 来年度の役員選出について……………長江部会長
 - 5 地区、学科の報告及び今年度の反省……………常任幹事
 - 6 事務局より……………事務局
 - 7 協議・次年度の活動目標
平成27年度活動計画、体制作り、副校長研究協議会、異動などについて……………長江部会長
 - 8 その他

8. 指導部との賀詞交歓会

平成27年1月8日(木) 19時00分～21時00分

場所 個室宴会場 AGORA(アゴラ)

新宿区西新宿 1-24-1

エステック情報ビル 4F

次第

司会 笹平全日制副部会長

開会のことば……………福田副校長協会会长

教育委員会挨拶……出張教育改革推進担当部長

乾 杯……………出張教育改革推進担当部長

歓 談

指導部挨拶……………鯨岡指導推進担当部長

指導部出席者紹介

副校長会挨拶……………瀧澤全国会長

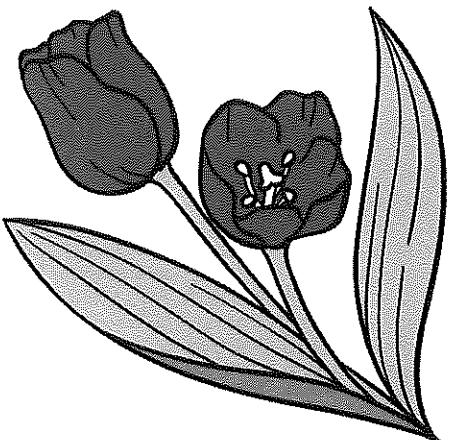
副校長協会出席者紹介

(東部・中部・西部毎紹介)

歓 談

閉会のことば……………長江全日制部会長

この指導部との賀詞交歓会は、副校長全員に呼びかけて実施しているものである。今年度で6回目となる。参加者は教育庁や指導部から部長、課長、主任指導主事、統括指導主事が12名、副校長は37名、合計49名であった。指導部と副校長協会との交流ができた。



9 特別委員会

全日制部会長 長江 誠

- 1 東京都教育管理職等連絡会理事会
出席実績無し
- 2 東京都教職員互助会運営委員会
出席実績無し
- 3 教育公務員弘済会評議委員会
出席実績無し
- 4 東京都公立高等学校 P T A 連合会相談役
特になし
- 5 周年行事、開校・閉校式典等
東京都立蔵前工業高等学校創立 90 周年記念式典 10 月 18 日（土）

3. 主な活動報告

1. 全国高等学校教頭・副校長会

1. 会合

5月 9日（金）会計監査・本部役員会	東京・事務局
5月 19日（月）第1回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
6月 9日（月）第1回理事研究協議会 (含、地区研究協議会)	東京・アルカディア市ヶ谷
7月 4日（金）第2回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
7月 30日（水）研究部会 第2回理事研究協議会	京都府・ルビノ京都堀川 〃
7月 31日（木）総会・研究協議大会（第1日）	京都府・みやこめっせ
8月 1日（金）研究協議大会（第2日）	〃
10月 3日（金）中間会計監査・本部役員会	東京・事務局
10月 20日（月）第3回総務部会	東京・アルカディア市ヶ谷
11月 21日（金）第3回理事研究協議会	東京・フロラシオン青山

2. 地区研究協議会

北海道地区 ① 5月14日～15日	石狩支部	東海地区 10月17日	愛知県主管
②11月14日	石狩支部	近畿地区 全国大会と兼ねる	京都府主管
東北地区 10月23日～24日	福島県主管	中国地区 本年度開催なし	
関東地区 12月 5日	群馬県主管	四国地区 10月23日～24日	徳島県主管
東京地区 8月13日	東京都	九州地区 10月 9日～10日	鹿児島県主管
北信越地区 11月13日～14日	新潟県主管		

3. 刊行物

・発表資料集 第34号 平成26年 7月	110頁 2,100部	参加者・県教委・校長会などに配付
・会報 第88号〃 6月	20頁 6,500部	会員・県教委・校長会などに配付
・会報 第89号〃 10月	32頁 6,500部	〃
・研究集録 第39号〃 11月	214頁 6,500部	〃
・全国大会集録（京都府）〃 11月	124頁 6,500部	〃
・会報 第90号 平成27年 2月	20頁 6,500部	〃
・調査研究集 第38号〃 3月	113頁 6,500部	〃

4. 研究発表

県・題（東京4題、京都3題、岩手2題、14県各1題）

部門	全 国 大 会	研 究 集 錄	計
管理運営	熊本、北海道、東京、京都、東京(誌上)	茨城、福岡、大分、三重	8県9題
高校教育	京都、新潟、岩手、島根、東京(誌上)	山形、千葉	7県7題
生徒指導	埼玉、徳島、岐阜、京都、東京(誌上)	岩手、静岡	7県7題

5. 特別調査

本年度関東地区（調査研究集に掲載）、来年度は九州地区が担当。

2. 東京都立高等学校副校長研究協議会

東京都公立高等学校副校長協会

平成 26 年度東京都立高等学校副校長研究協議会を教育庁指導部及び各地区の学校経営支援センターのご支援をいただき平成 26 年 8 月 13 日（水）に東京都教職員研修センター研修室及び視聴覚ホールを会場として実施いたしました。当日は補欠募集の日程と重なりましたが、141 名の副校長が参加いたしました。

分科会では、研究主題を『都民に信頼される魅力ある都立高校づくりを目指して』として、4 つの分科会（管理運営、高校教育、生徒指導、定時制通信制）において 7 つの主題の研究発表及び研究協議を行い、活発な質疑応答が交わされ、教育庁指導部の指導主事や課務担当係長の先生方から指導講評をいただきました。

全体会においては「学校における教育相談の充実～高校生の意識から～」と題して講話をいただきました。

分科会（午後 1 時 30 分から午後 3 時）

第 1 分科会（全日制 管理運営研究部）

703 研修室

発表① 主題：「学校広報活動と副校長の関わり」

第一委員会 東部 B チーム

服部 幸一郎（竹早）

発表② 主題：「併設型中高一貫教育校の組織的運営について」

第二委員会 東部 D チーム

渋谷 寿朗（両国附属中）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課
課務担当係長 小高 潤子 先生

第 2 分科会（全日制 高校教育研究部）

803(3) 研修室

発表① 主題：「学力スタンダード等の実施上の課題と副校長の役割について」

第一委員会 西部 D チーム

加藤 竜吾（東村山）

発表② 主題：「次世代リーダー育成道場の制度を活用した留学について」

第二委員会 中部 B チーム

今井 啓介（目黒）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 鈴木 宏治 先生

第 3 分科会（全日制 生徒指導研究部）

803(1) 研修室

発表① 主題：「携帯電話やインターネット利用の指導に関して」

第一委員会 中部 D チーム

山下 一郎（光丘）

発表② 主題：「特別指導の運用と副校長の役割について」

第二委員会 西部 B チーム

室岡 誠一（府中東）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 西牧 豊実 先生

第 4 分科会（定時制・通信制）

803(2) 研修室

発表① 主題：「年間行事計画の編成上の課題と副校長の役割について」

中部研究委員会

佐々木 一憲（農芸）

指導講評：教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 山本 勇 先生

各分科会とも充実した調査研究による発表が行われ、活発な協議のあと貴重な指導助言を頂きました。

全体会（午後 3 時 20 分～午後 5 時 視聴覚ホール）

福田 洋三 東京都公立高等学校副校長協会長、瀧澤 隆司 全国高等学校教頭・副校長会長、佐藤 聖一 指導部高等学校教育指導課主任指導主事よりご挨拶を頂いた後、「学校における教育相談の充実～高校生の意識から～」と題して、今村 泰洋 東京都教育相談センター主任教育相談員から講話を頂きました。

思春期の心理と行動など喫緊の課題について、学校の組織的な運営や関係機関との連携、副校長の役割など、今後の教育相談活動における対応等についての理解を深め、大きな参考とすることことができました。

全日制副部会長 榎 茂喜（武藏）記

3. 関東地区高等学校教頭・副校長会 研究協議会 報告

1 はじめに

関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会は「関東地区高等学校教頭・副校長の連携を図るとともに、高等学校教育の諸問題について、研究協議を実施し、時代の進展に即応する教頭・副校長としての資質の向上と高校教育の充実を図ること」を目的に昭和62年に始まり、平成26年度群馬大会で28回を迎えていた。

東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨の各県と神奈川県の横浜市、川崎市、横須賀市の8都県、3市の教頭会及び副校長会で構成され、開催は東京を除く各県・市の持ち回りとなっている。

平成26年度の群馬大会には、各都県市より174名の参加者が集まった。東京からは、事務局を含め15名が参加した。

2 平成26年度群馬大会の概要

期日 平成26年12月5日（金）

会場 高崎シティーギャラリー

JR高崎駅西口から徒歩約10分

(開会式)

開式のことば

国歌斉唱

群馬県高等学校教頭・副校長会長あいさつ

全国高等学校教頭・副校長会長あいさつ

来賓あいさつ

群馬県教育委員会高校教育課次長

群馬県高等学校長協会会長

日本教育公務員弘済会群馬支部長

閉式のことば

諸連絡・日程説明

<講演>

講師 濱口 富士雄 先生

(群馬県立女子大学学長)

演題 「漢文を通しての教科書観」

<研究協議>

◇テーマ

「個性を伸ばし、自立した生徒を育てる高校教育の推進」

◇発表

① 神奈川県立神奈川総合高等学校

副校長 阿部直彦

② 山梨県立甲府東高等学校 教頭 小林俊一郎

③ 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校 教頭 君山弘

④ 千葉県立柏高等学校 教頭 弘海政信

(閉会式)

開式のことば

群馬県高等学校教頭・副校長会長あいさつ

次年度開催県 千葉県高等学校教頭・副校

長会 会長あいさつ

閉式のことば

3 研究発表の要旨

① 神奈川県立神奈川総合高等学校

副校長 阿部直彦

「個性の伸長と主体的に学ぶ意欲の醸成を目指す単位制普通科高校の教育実践」

学年の区別やホームルームがなく、学年を超えた講座編成から生徒は自分で授業を選択する。200科目ものフィールド科目と呼ばれる自由選択科目がある。1コマ90分の授業では、生徒主体の授業展開を目指している。特別活動の行事等も生徒主導で企画・運営されている。一方、教員の担当科目の複雑さや課題を抱える生徒の把握やサポート、集団としての相互信頼感の醸成等に課題があるとの報告があった。

② 山梨県立甲府東高等学校 教頭 小林俊一郎

「本校における土曜授業推進事業について及び山梨県における土曜日の活用実態と職員の勤務について～アンケート調査より～」

「生徒一人一人が生き生きと高校生活を送り、自分自身の生き方を身につける」ことは、キャリア教育の目標でもあり、その枠組みの中で特に理数コースの生徒を対象として、外部の研究機関・施設等に出向いて見学・体験、或いは講義を受講する時間を土曜日に設定し、実践を続けている。アンケートから70%を超える高等学校で週休日である土曜日に授業や課外等を行っている実態が明らかとなった。ただし、教育課程内の「土曜授業」を行っているのは2校のみ。各校で管理職が「勤務時間の割振り変更願簿」等を作成管理し、容易にその日の休暇職員等の入力ができ一覧表示できるようなシステム管理も必要である。

③ 茨城県立竜ヶ崎第一高等学校 教頭 君山弘

「教員評価の実際」

本県における教員評価は、平成 21 年度から全公立学校の校長、教頭、教諭、養護教諭、実習助手及び寄宿舎指導員を対象に新しい教員評価を実施している。しかし、教員評価における実際の実施方法や内容については各学校にある程度の裁量があり、その実態が多岐にわたっている。この研究を通して感じたことは、評価者（管理職）が「教員評価」を行う上で被評価者（教職員）を適切に評価するための様々な工夫が定着していること。さらに、教員評価の目標を、評価者（管理職）が被評価者（教員）に多く発言させることで意見を吸い上げ、学校経営に参画している意識を向上し、教職員自身の目標と学校目標とをリンクさせていたことである。その成果として、被評価者（教職員）の視野を広げ、やる気を起こさせ、学校経営上の課題に対して管理職を含めたベテランや新人など全ての教職員が共通の方向性を持って協働することで、生徒にとっての教育環境の充実やアカンタビリティ（成果責任）の達成に結び付けていることが印象的であった。

④ 千葉県立柏高等学校 教頭 弘海政信 「言語活動の充実を図るための各校の方策」

言語活動を充実させることで、生徒の思考力や判断力、表現力を育成し、そのことが個性を伸ばし、自立した生徒を育てることにつながるとの考えから、県内学校へのアンケート結果を元にした発表であった。生徒による授業評価の項目に「言語活動の充実」に関する項目を入れている学校は予定を含めて 30 % だったが、学習計画表やシラバスへの明記、および職員研修については、さらなる充実が望まれることであった。

4 講演の要旨

演題 「漢文を通しての教科書観」

前半は、御専門である漢文についての講義であった。漢文を学ぶことは古代中国語を学んでいること。日本の地名や姓の読み方の中に当時の中国語の名残を残していること。中国語の文法的な構造や日本人が中国語を読み書きするために工夫した方法について、豊富な具体例をあげながらの興味深いお話をあった。

後半では、委員として携わった教科用図書検定調査審議会について、教科書検定の透明化と

教科書の改善について具体的なお話をいただいた。平成 18 年に教科書検定のあり方が社会的に取り上げられたことを受け、平成 20 年には、「教科書検定手続きの改善方策」と「新しい教育課程の実施に対応した教科書の改善方策」の 2 項について審議が行われた。同年にとりまとめた「教科書の改善について（報告）」では、改善の具体的方策として以下の 4 点があげられた。
①教育基本法で示す目標等を踏まえた教科書改善、
②知識・技能の修得、活用、探究に対応するための教科書の質・量両面での格段の充実、
③多面的・多角的な考察に資する公正・中立でバランスのとれた教科書記述、
④教科書記述の正確性の確保。また、教科書検定の信頼性を高めるために、部会における議事の概要の作成・公表など、検定の手続きの改善が盛り込まれたとのことであった。

さらに、同報告の中では教科書観の転換が求められていることに言及された。「児童生徒は、教科書に記述された内容をすべて学習しなければならない」とする、従来型の教科書観から「個々の児童生徒の理解の程度に応じて指導を充実する」、「児童生徒が興味関心を持って読み進められる」、「児童生徒が家庭でも主体的に自学自習ができる」とする教科書観への転換が必要だと強調された。最後に、学長の立場から高大連携の推進や、センター試験からの変更に象徴される入試改革に触れ、高等学校教育がさらに充実していくことへの期待を述べて講演は締めくくられた。

5 平成 27 年度関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会開催要項（案） 一抜粋一

主催 関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会
主管 千葉県高等学校教頭・副校長会
期日 平成 27 年 11 月 20 日（金）
会場 ホテルポートプラザちば ロイヤル
発表 ①群馬 ②埼玉 ③東京 ④栃木

事務局 記

4. 地区別支部副校長会報告

1. 東部A地区副校長会

1 はじめに

今年度の東部A地区副校長会の構成は以下の通りである。

普通科 9校

専門学科 商業(2校) 工業(1校) 農業(1校)

総合学科 1校

計 14校 17名

運営は以下の4名を中心に行った。

常任幹事 佐々木 巧(淵江)

常任幹事代理 加藤 正和(青井)

研究幹事 外川 裕一(南葛飾)

研究幹事代理 玉川 弘文(足立西)

A地区の各高等学校は足立区、葛飾区に位置しており、生活指導や学習指導等、共通の課題が多く、他校の取組を知ることで参考になることが多かった。また、運営面では経営支援室の学校経営支援主事と連携を取りながら、円滑にチーム別連絡会が進行できるよう心がけた。

2 活動報告

○チーム別連絡会について

(1) 4月18日 教職員研修センター

① 支援センターより

- ・個人情報の適正な管理について
- ・交通安全(自転車)指導について

(2) 5月13日 小石川中等教育学校

① 支援センターより

- ・定期考查の適正実施について
- ・クリーンデスクの徹底

② 基調報告「情報モラル教育に係る指導について」に関する情報交換

(3) 6月10日 江北高等学校

① 支援センターより

- ・プール水管理、交通事故防止指導について
- ・個人情報保護について

(4) 7月8日 教職員研修センター

① 支援センターより

- ・1学期総括について
- ・予算(次年度に向けて)

② 基調報告「児童・生徒の健全育成について」に関する情報交換

(5) 9月4日 教職員研修センター

① 支援センターより

- ・自己申告(中間申告)について
- ・危機管理について

② 事故の未然防止に関する情報交換

(6) 10月14日 新宿山吹高等学校

① 支援センターより

- ・10月訪問に向けて
- ・危機管理について

② 基調報告「業績評価における副校長の役割」に基づく情報交換

③ 新タイムスに関する情報交換

(7) 11月11日 忍岡高等学校

① 支援センターより

- ・来年度に向けての準備について
- ・事故・苦情への対応について

② 基調報告「行政系副校長の取組について」に基づく情報交換

③ 部活動体験の保険に関する情報交換

(8) 12月9日 教職員研修センター

① 支援センターより

- ・非常勤教員について
- ・1月訪問について

② 協議 平成27年度東京都立高等学校副校長研究協議会発表主題について

(9) 1月15日 教職員研修センター

① 情報交換

- ・入学者選抜の採点、点検方法について
- ・平成27年度外国人英語等教育補助員の配置について

(10) 3月17日 教職員研修センター

3 おわりに

今年1年間、常任幹事を担当させていただきましたが、正直などろ勝手がよく分からず、多々ご迷惑をおかけすることになり、誠に申し訳ございませんでした。

日々の業務のなかで、ともすれば余裕を失いがちになりますが、このような情報交換の場を有効に活用し、各校の課題や工夫等について、ざっくばらんな雰囲気の中で話し合い、副校長間のネットワークを構築することが、相互の心の支えになるのではと考えています。この一年間、支えていただいた皆様に感謝申し上げます。

常任幹事 佐々木 巧(淵江)記

2. 東部B地区副校長会

1 はじめに

本地区には、15校・18名の副校長が所属している。内訳は、普通科高校9校、専門学科高校3校、中等教育学校2校（区立含む）、附属中学校1校である。今年度は、新任・転任あわせて9名の方を新たにお迎えした。

2 活動報告

今年度は、担当の東部学校経営支援センター経営支援室と相談の上、少人数で情報交換を行い、それを全体で共有する形式を基本とした。

各月のテーマは、センター別連絡会での講演や基調報告等に関連したもの、時期的に有益な事項を設定した。各学校での取組や課題について、率直な情報交換ができた。

**【4月18日（金）】教職員研修センター
「学力スタンダード実施に伴う週案の作成について」（出席者からの要望）**

**【5月13日（火）】小石川中等教育学校
「情報モラル教育に係る指導について」**

**【6月10日（火）】江北高等学校
「苦情等の対応について」**

**【7月8日（火）】教職員研修センター
「児童・生徒の健全育成について」
☆東部A地区と合同懇親会**

**【9月4日（木）】教職員研修センター
「前期学校事故のまとめと対策について」
(支援室からの提案)**

**【10月14日（火）】新宿山吹高等学校
「業績評価における副校長の役割について」**

**【11月11日（火）】忍岡高等学校
「学校経営におけるミッションへの取組について」（支援室からの提案）
*基調報告「行政系副校長の取組について」**

**【12月9日（火）】教職員研修センター
「人材育成に資する取組成果と課題について」**

☆懇親会

**【1月15日（木）】教職員研修センター
「入学者選抜に向けての情報交換」（支援室からの提案）
*基調報告「アドバンス校としてのミッション達成に向けた取組成果と今後の課題」**

**【2月17日（火）】
教職員研修センター（中止）**

【3月17日（火）】教職員研修センター

3 おわりに

月一回、副校長連絡会の前週に副校長協会総務部会へ出席し、連絡事項を正確に各校へ伝える。学校経営支援主事と連絡をとり、連絡会の流れをつかんでおく。私は毎月ドキドキしていた。本地区の副校長先生、副校長協会事務局の先輩方は、私以上にドキドキ、ハラハラさせていたことと思う。あんなことも、こんなこともやっておくべきだったと反省点も多い。

しかしながら、私のこの一年は、某テレビ局の「はじめてのおつかい」ならぬ「はじめての常任幹事」という状態であった。周囲の心配をよそにおつかいに行く本人は楽しんでいる、というあの状態だったのである。私はドキドキしながらも、貴重な経験と学ぶことで、実は楽しかったのである。あの番組のナレーションのように、優しく寛大な気持ちで支えていただいたことに心から感謝申し上げ、報告を終える。ありがとうございました。

常任幹事 造作 聰美（白鷗高校附属中）記

3. 東部C・D地区副校長会

発表者：墨田川高等学校 副校長 余湖浩一

1 はじめに

本副校長会は、東部学校経営支援センター支所（以下、東部支所）所管の学校30校の33名の副校長で構成されている。学校の内訳は、東部C地区は、普通科高校5校、総合学科高校2校、専門学科高校3校（商業系2校、工業系1校）、東部D地区は、普通科高校13校、専門学科高校6校（商業系2校、工業系3校、産業1校）、附属中学校1校である。

平成26年度の常任幹事はC地区武市（蒲田）、D地区杉森（葛西南）、研究幹事はC地区竹尾（三原）、D地区渋谷（両国付属中）が担当した。

2 活動報告

(1) 副校長連絡会における意見交換会

東部支所所管のC・D地区副校長会合同で昨年度、一昨年度に引き続き意見交換会を実施した。意見交換のテーマとして東京都の教育課題について推進指定校に指定されている学校における取組や課題を報告いただき、各学校における副校長の課題について意見交換を行った。

意見交換会は、進学校班、中堅校班、生活充実班、専門学科班、定時制班の5班に分かれて実施した。

意見交換会のテーマ及び発表者は以下の通りである。

【第1回】4月18日金曜日（教職員研修センター）
テーマ：「学力スタンダードの進捗状況について」

【第2回】5月13日火曜日（東部支所）
テーマ：「事故対応について」

【第3回】6月10日火曜日（東部支所）
テーマ：「言語能力向上の取組」
発表者：大田桜台高等学校 副校長 石山智典

【第4回】7月8日火曜日（芝商業高校）
テーマ：「学力スタンダード推進校としての取組」
発表者：深川高等学校 副校長 稲葉久男

【第5回】9月4日木曜日（教職員研修センター）
テーマ：「進学指導推進校としての取組」

【第6回】10月14日火曜日（科学技術高校）

テーマ：「防災教育の取組」
発表者：江東商業高等学校 副校長 太田充幸

【第7回】11月11日火曜日（大江戸高校）

テーマ：「規範意識向上推進モデル校としての取組」

発表者：紅葉川高等学校 副校長 池田美穂

【第8回】12月9日火曜日（東部支所）

テーマ1：「人間としての在り方生き方に関する新教科の試行について」

発表者：第三商業高等学校 副校長 新井智恵子

テーマ2：「入選の採点・点検作業における課題とその解決について」

【第9回】1月15日木曜日（教職員研修センター）

テーマ：「部活動推進指定校の取組について」
発表者：小岩高等学校 副校長 斎藤直子

【第10回】3月17日火曜日（東部支所）

(2) 副校長研究協議会

8月13日水曜日に行われた東京都立高等学校副校長研究協議会に参加した。

(3) 意見交換・交流会

今年度については、昨年度に引き続きC・D地区合同で、年間を通じて交流を図り、活発に情報交換を行うことを目指した。7月、12月には合同の交流会を実施した。副校長として日々の課題や、東京都の課題に対する取組の情報交換が進み、有意義な時間とすることができた。

3 おわりに

東部C・D地区的副校長のみなさまには、1年間、ご協力いただき、ありがとうございました。今後も、当地区副校長会が、情報交換と親睦の場となり、互いの研鑽の場となりますよう、よろしくお願ひいたします。

常任幹事 武市 玲子（蒲田）
杉森 共和（葛西南）記

4. 中部 A B 地区副校長会

去る 2 月 8 日、味の素スタジアムで行われた第 6 回中学生東京駅伝に本校生徒の応援に行ってきました。中部 A チーム幹事校は三鷹市にあるため、本校三鷹市代表生徒の応援と、サッカー全国大会で大変お世話になった三鷹市の応援も目的だったのだが、東京各区市町村の代表選手一人ひとりが悪天候にもかかわらず全力で走り切ったのを見て、実にすがすがしい気持ちにならなかった。

この日は、都立中学校にとっては「適性検査」明けの、また、都立高校にとっても推薦選抜の発表と学力検査にもとづく選抜の願書受付直後の日曜日だ。平成 26 年度は、「学力検査に基づく選抜における採点の誤り」の対応に追われた 1 年であった。マークシート方式の採用や、採点時の答案用紙の複写、採点日の扱いの改善など、今後都民の期待を裏切らないための新しい試みが行われている。その中で 27 年度入試にむけ、私自身が気を張っていたためか、中学生の懸命な走りを見て気持ちが癒されたのかもしれない。入選業務に向けた新しい取り組みについては、副校長会でも様々な疑問点や情報交換がなされたが、都立への志願者が懸命に取り組んだ成果だからこそ、慎重しすぎてもしそうということはない。今後も気持ちを引き締めて取り組まなければならない。

副校長連絡会で話題になったこととしては、J E T の配置がある。私自身が英語科の教員であるため、J E T の導入は自分にとってはありがたいことだ。生徒が英語をいつでも活用することができる環境を提供することができる。個人的には J E T による校内英会話サロンという情報を得て、本校でも J E T ジャーナルや生徒との昼食会など新たな取り組みを始めた。一方、J E T の導入を巡って必ずしも円滑にいったとは言えない報告も多々あった。取引銀行の印鑑準備や生活の諸手続きを副校長が同行したという例もあったようだ。本校では A L T とともに英語科の教員とうまくやっているのであまり心配はなかったが、今後全校に配置が拡大されることもあり、27 年度導入校では導入に向け準備をすることになる。

英語教育関係で大きな話題はほかにも 2 点あった。まずは英語科教員の 3 か月海外派遣研修だ。担任配置の難しさと、後補充講師の検

索が課題となった。後半に話題に上ったのが、A L T の配当時間数増加である。各校コミュニケーション英語 I に全時間配当との通知に困惑を隠せなかつたようだ。特に話題に上がつたのが追加の A L T 候補者確保の課題であった。J E T も A L T 時間数増加も英語科教員海外派遣も、「授業は英語で指導することを基本」とする新学習指導要領の具現化を目指したものであり、今後の英語教育の改善に資するものだと考えるが、定着するのにもう少し時間を要するようである。

次に話題になったこととしては、アウトランクシステムへの移行である。LOTUS に慣れた我々としては、新システムへの移行については、ほぼ毎回の連絡会で情報交換が行われた。グループアドレス誤送信など続いたが、連絡会で出た内容としては、これまでのように組織末端メールを教員が見ることができなくなってしまうという課題だ。教員も職層に応じて組織末端へのメールを見ることで学校経営参画の一端を担うことになると考えるが、本校では今この問題は解決できていない。また、容量が増えたものの、すでに「メールボックスがほぼいっぱい」になっている。

A B チームではこのほかにもその都度の情報交換がなされてきた。宿泊防災訓練の実施に向けた防災講話講師の共有化提案や、関東地区高等学校教頭・副校長会研究協議会、28 年度の東京大会などについてももちろん話題に上がつた。今年度常任幹事として不十分な点が多くなったことを反省する一方で、今後副校長連絡会の回数が減るからこそ、より充実した情報交換の場となることを期待する。

常任幹事 北鹿渡昭喜（三鷹中等）記
平林 信彦（総合芸術）

5. 中部C D地区副校長会

1 はじめに

中部C D地区副校長会は、連絡会及び意見交換をC D合同で開催してきたことから本報告においても同様に申し上げます。

C地区は高校 11校 17名（内定時制 6名）

D地区は高校 19校 24名（内定時制 5名）

平成 26 年度の C 地区常任幹事は北園高校亀崎隆彦副校長、研究幹事は文京高校山田道人副校長が担当し、D 地区常任幹事は杉並工業高校山本誠副校長、研究幹事は光丘高校山下一郎副校長が担当しました。

校種別連絡会では、冒頭に中部学校経営支援センターから連絡等をいただきその後に研究協議（全 6 回）、意見交換等を行いました。

2 活動報告

（1）副校長連絡会

① 平成 26 年 4 月 18 日（金）

会場：教職員研修センター

② 平成 26 年 5 月 13 日（火）

会場：鷺宮高等学校

③ 平成 26 年 6 月 10 日（火）

会場：戸山高等学校

研究協議（第 1 回）

「板橋有徳高校のこれまでの取り組みとこれから」

板橋有徳高等学校 副校長 中山 繁

④ 平成 26 年 7 月 8 日（火）

会場：中部学校経営支援センター支所

研究協議（第 2 回）

「地域連携型防災教育の推進について」

千早高等学校 副校長 石野 隆

⑤ 平成 26 年 9 月 4 日（木）

会場：教職員研修センター

⑥ 平成 26 年 10 月 14 日（火）

会場：井草高等学校

研究協議（第 3 回）

「デュアルシステムの紹介」

北豊島工業高等学校 副校長 古藤一弘

⑦ 平成 26 年 11 月 11 日（火）

会場：北豊島工業高等学校

研究協議（第 4 回）

「学校を組織的に運営していくための方策」

中野工業高等学校 副校長 豊岡耕一郎

⑧ 平成 26 年 12 月 9 日（火）

会場：千早高等学校

研究協議（第 5 回）

「学校広報活動とO J Tについて」

北園高等学校 副校長 亀崎隆彦

⑨ 平成 27 年 1 月 15 日（木）

会場：教職員研修センター

⑩ 平成 27 年 2 月 17 日（火）

会場：志村学園

（入選対応のため中止）

⑪ 平成 27 年 3 月 17 日（火）

会場：中部学校経営支援センター支所

研究協議（第 6 回）

「創立 10 周年に向けた取り組みについて」

大泉桜高等学校 副校長 杉山智子

（2）副校長研究協議会

平成 26 年 8 月 13 日（水）

教職員研修センター

（3）意見交換・交流会

意見交換では、事務連絡の外、各時期に相互に抱える課題や問題点等について、情報や各学校の実態を実際的に共有し、改善に向けた取り組みの指針や方策の一助とすることができました。また、交流会（全 2 回）では、様々な課題に向けて、支援センターの諸先生方と共に考え、実際的な意見交換の場とすることができました。

3 おわりに

今年度は、入学選抜採点において都立高等学校の信頼が著しく脅かされる事態が生じその対応に追われ、平成 27 年度入学選抜では、新たにマークシートが試行されるなど都立高等学校において深く記憶に残る年となりました。幹事の準備不足や不手際で、中部 C D 地区の副校長先生方には、ご迷惑を多々お掛けしたことと存じます。会費の徴収をはじめとして、研究協議、交流会、など各会の運営に御協力・ご支援を賜りましたことに感謝申し上げます。

本会が互いの学校経営に資する研究協議、意見交換の場となりますよう、今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

常任幹事 亀崎 隆彦（北園）

山本 誠（杉並工）記

6. 西部A地区副校長会

1 はじめに

西部学校経営支援センターAチームは、普通科の成瀬・小川・町田・山崎・野津田・永山の6校と総合学科の町田総合・若葉総合の2校、そして専門学科の町田工業の1校から構成されている。今年度、新たに他の地区から副校長として異動されてきた方が1名である。

人数は比較的少ないが、その分、忌憚のない情報交換が行われ、日常の業務に生かすことができる内容を共有して進めることができた。

2 活動報告

○副校長連絡会の情報・意見交換について

- (1) 4月18日（金）教職員研修センター
 - ア 学力スタンダードの作成について
 - イ 週案の点検方法について
- (2) 5月13日（火）多摩社会教育会館
 - ア 副校長研究協議会での研究テーマについての意見交換
- (3) 6月10日（火）多摩社会教育会館
 - ア 6月のセンター訪問について
 - イ いじめ防止対策基本方針の策定について
 - ウ 採点の誤りに関わる派遣について
- (4) 7月8日（火）多摩社会教育会館
 - ア 8月13日の副校長研究協議会の出席者及び役割分担確認
- (5) 9月4日（木）教職員研修センター
 - ア 新TAIMSのインストールについて
 - ・不具合など
 - イ いじめの条件について
 - ・作成状況など
 - ウ JETについて
 - ・活用状況など
- (6) 10月14日（火）多摩社会教育会館
 - ア 校内人事のヒアリングの実施について
 - イ 新TAIMSのメールの取り扱いについて
 - ウ 入選関係について
 - ・採点日の取り扱いなど
- (7) 11月11日（火）多摩社会教育会館
 - ア 教育課程届関係について
 - ・学校設定科目
 - ・評価計画の記載
 - ・来年度の奉仕 など

イ 入選関係について

- ・答案の保存年限
- ・答案のコピー対策 など

- (8) 12月9日（火）立川ろう学校

ア 会費納入について

イ 関東大会、来年度の全国大会について

ウ 来年度の役員及び本部役員の選出について

エ 週休日の出勤カードシステムについて

オ 暖房の設定及び入選後の授業について

- (9) 1月15日（木）教職員研修センター

- (10) 2月17日（火）多摩社会教育会館（中止）

- (11) 3月17日（火）多摩社会教育会館

- ・次年度の常任幹事、研究幹事、本部役員の選出について

3 平成26年度役員

常任幹事 生田 武美（山崎）

研究幹事 増田 雅子（町田総合）

4 おわりに

Aチームの研究幹事としては、今年度は研究発表の担当がBチームだったため調査に協力する体制をとった。来年度はAチームが発表の担当になるので今年度から準備を進めて行きたいとAチームでは話し合った。常任幹事会は2人で協力しながら出席することができ、全国大会・関東大会もAチームから参加した。

毎回、チーム別連絡会の時間を設定しているにもかかわらず、時間を有効に使えない場面もあり、内容を各自が提案し研修を深めようとする最終の時間が来てしまい途中で打ち切りといった場面もあり残念であった。

支援主事の方々やAチームのメンバーと協力しながら1年間副校長会を運営してきたことは大変有意義であった。各学校で副校長として様々な課題に立ち向かい奮闘している副校長は横の連携をより強くして、より良い取り組みは共有し、苦しい場面では援助し合い、より良い学校運営に取り組むことができました。

常任幹事 生田 武美（山崎）記

7. 西部B地区副校長会

1 はじめに

今年度は、1月の副校長連絡会で急遽、2月の副校長連絡会は中止だと知らされた。そこで、本年度は8月と2月を除く毎月1回、年10回の開催となった。この10回の副校長連絡会の後の時間で西部地区の副校長会を実施した。実施場所は、教職員研修センターが4回、西部所・支所別に学校現場に出向いての実施が1回、多摩社会教育会館での実施が5回となった。

常任幹事 宮田 明子（立川国際中等）

研究幹事 室岡 誠一（府中東）

2 活動報告

多摩社会教育会館で実施された当初2回の副校長会は、西部A・Bが合同の開催だったが、情報共有という観点でややすれが生じた。よって、10月以降はA・B地区を分けて実施できるように支援センターに配慮していただいた。

4月（教職員研修センター）

○情報交換

- ・スクールカウンセラーの全員面接実施方法
- ・週案の実施方法

5月（多摩社会教育会館）

○情報交換

- ・8月13日研究発表でのテーマについて
- ・成績推奨ファイルの運用について

6月（多摩社会教育会館）

○情報交換

- ・学校いじめ基本方針の策定について

7月（多摩社会教育会館）

○講義「いじめ防止に向けた組織的な取り組みについて」 教育相談センター

指導主事 渡邊 祐介氏

○情報交換

- ・8月13日の研究協議会の打ち合わせ、出席者確認、司会・記録者の決定
- ・27年度多摩地区国公立大学の合同説明会開催（10月10日予定）

9月（教職員研修センター）

○情報交換

- ・入選の新しい取組に関する課題等
- ・新タイムスへの移行について
- ・学校いじめ基本方針について

10月（多摩社会教育会館）

○情報交換

- ・成績推奨ファイル研修、服務事故防止研修、体罰防止研修の報告書について
- ・英語教員海外派遣にともなう充当講師
- ・新タイムスへの移行について
- ・休日の防犯体制について

11月（多摩社会教育会館）

○学校経営支援センターより

- ・教職員の服務の厳正について
 - ・自己申告の確定、免許更新、教育課程の届出
- ##### ○情報交換
- ・英語教員海外派遣研修の実情について
 - ・J E T配置にともなう課題等

12月（立川ろう学校／羽村特別支援学校）

○情報交換

- ・事故発生時の連絡体制について
- ・個人情報の適正な管理について（答案等）
- ・英語教育推進リーダー中央研修の進行管理
- ・出張システムの要修正案件について
- ・新タイムス（Outlook）での組織端末へのアクセスについて

1月（教職員研修センター）

○情報交換

- ・入選実施にともなう各校での工夫について
- また、準備の進捗状況について
- ・新幹事の選出について

3月（多摩社会教育会館）

3 おわりに

他の地区副校長会では、年度当初に年間計画を定め、前もって依頼した副校長先生や外部講師に事例研究や発表をしてもらった地区もあったと聞く。それに比べると我が地区では、常任幹事の計画性の無さが原因で、ずいぶんと即興的な情報共有の場になってしまったことは否めない。来年度は副校長連絡会の開催回数が今年度より減ることもあり、連絡会後のこの情報共有の時間が有効に活用されることが必要になるだろう。来年度幹事の方に引き継ぎたいと思う。最後ではありますが、1年間ご協力いただいた副校長先生方に、感謝申し上げます。

常任幹事 宮田 明子（立川国際）記

8. 西部C地区副校長会

1 はじめに

西部C地区は、4月に3名の副校長の異動があった。異動の副校長は1名、新任の副校長は2名だった。昨年度は、6名の異動があったが、今年は少なかった。

メンバーの構成は、全日制副校長11名と定時制の副校長2名の合計13名と他の地区と比べ人数が少ないので、チームワークも良くそれで、連絡調整もスムーズに行うことができた。京都で開催された全国大会へもCチームから7名もの参加があった。また意見交換会や懇親会等の出席率も高く、会の運営に対して協力的であった。しかし、8月の研究協議会は、補欠募集と重なったこともあり、若干出席者が減った。来年度の研究協議会や再来年度の東京開催の全国大会の準備を全員で協力して実践したい。役割分担も少人数のため、一人一役で全員に割り振り、研究会や副校長会に関われるようしたい。

今年度の成果としては、様々な課題や連絡会等でチームワーク良くまとまれたことと、情報交換や意見交換が積極的に行われたことである。

2 活動報告

4月 18日 教職員研修センター

- ・総務部から事業報告、事業予定
平成25年度の事業報告
平成26年度の事業予定について
- ※ 回覧にて名簿等確認
- ・研究部 本年度の研究について
研究テーマについて

5月 13日 多摩社会教育会館

- ・研究発表会について
- ・アンケートの依頼、集計等について

6月 10日 武蔵村山高等学校

- ・武蔵村山高等学校の施設管理・見学
「武蔵村山高等学校の概要」
「武蔵村山高等学校の取り組み」
他
- ・アンケートの依頼、集計から発表原稿の作成について

7月 8日 多摩社会教育会館

- 「夏季休業中の熱中症予防」「けがの予防及び事故後の連絡体制の確立」

9月 4日 教職員研修センター

- 「文化祭に関わる指導の徹底」
- 「生徒の貴重品管理の徹底」
- 「宿泊を伴う行事の実施計画書の作成及び提出について」

10月 14日 多摩社会教育会館

- 「ツイッター等でのトラブルの予防」
- 「調査書の誤記入及び就職書類の作成と提出に関する注意」
- 「自然災害の対応について」

11月 11日 多摩社会教育会館

- 「痴漢や付きまとい被害の増加」
- 「免許更新について」
- 「定期異動について」

12月 9日 羽村特別支援学校

- 「事故対応について」「教育課程の事前相談」
- 「卒業式・入学式の要項作成」

1月 15日 教職員研修センター

- 「生徒の調査書の記入漏れや記入ミスの防止」「教員の免許更新について」「入選の適正な実施とミスを起こさない採点について」

2月 17日 多摩社会教育会館

中止

3月 17日 多摩社会教育会館

3 おわりに

今年度は、副校長会の総務部会からなるべく多くの情報を会員に紹介するように心がけた。また、情報交換の時間を多く作った。

来年度は、昇進、退職、異動でメンバーが変わることもあるが、Cチームの協力体制を維持しながら運営していきたい。

事務量の多さは相変わらずで、複雑多岐にわたる副校長業務であるが、副校長間で仲間意識を強く持って、健康に留意しながら職務にあたっていきたい。

常任幹事 請地 政元（田無）記

9. 西部D地区副校長会

1 はじめに

西部D地区の都立高校副校長会は、19校23課程25人（全日制21人、定時制4人）で構成されています。今年度4月に6名の新たな副校長をお迎えし、前年度幹事の意向を継承し、横の繋がりを強化できる会の運営を心掛けました。たとえば、総務部会での情報の提供、情報交換、懇親会の開催などをより活性化させ、副校長の皆様が、自校の課題等の解決に役立てる場になればと心掛けました。

2 活動報告

4月18日 教職員研修センター

- ・自己紹介
- ・総務部から事業報告、事業予定
平成25年度の事業報告

平成26年度の事業予定について

※ 回覧にて名簿等確認

- ・研究部 本年度の研究について

5月13日 多摩社会教育会館

「スクールカウンセラーの全員面接」

「英語教員の海外派遣」

「入学者選抜再点検及び平成27年度入学選抜に向けて」

※ 前期会費集金

6月10日 武藏村山高校

- ・武藏村山高校の施設管理・見学
- ・研究発表会について

※ 司会・記録等の役割分担

7月8日 多摩社会教育会館

・研究発表会について

※ 発表内容、役割分担等

「サポートチームについて」

「体罰の面接等について」

「J E Tについて」

9月4日 教職員研修センター

- ・全国高等学校教頭・副校長会の報告
- ・東京都立高等学校副校長研究協議会の報告
- ・関東地区教頭・副校長研究協議会の参加について

「英語教員海外派遣研修の通勤手当等の対応」

「J E T配置時の状況、及び今後の活用」

10月14日

「OutLookについて」

「J E Tの活用について」

11月11日 教職員研修センター

「入選について」

「英語科教員海外派遣研修ホームステイ先の環境、後補充の講師等について」

※ 後期会費集金

関東大会参加の呼びかけ

12月9日 羽村特別支援学校

「入選について」

※ 夜、西部支所管内高校、特別支援副校長で懇談会を実施した。

1月15日 教職員研修センター

「外国人英語等教育補助員の配置について」

「入選について」

※ H27 全国大会の発表について

H27 の役員について、意見聴取

3月17日 多摩社会教育会館

※ H27 常任幹事等決定

研究発表について

3 おわりに

校務多忙の中、総務部会での情報交換、副校長全国大会への参加、副校長研究協議会での地区発表・懇親会、西部支所管内全体で開催できた懇親会、賀詞交歓会など、副校長連絡会以外にも、様々な場面で、多くの副校長の方々と情報交換や資料交換等の機会を得られました。各校副校長の方々が、各職場において、課題解決に活かして頂けたならば、幸いです。

特に、総務部会での本部委員からの情報提供や各地区の工夫された運営方法は、私には貴重な刺激を受けました。

また、西部Dチームの副校長研究協議会発表（学力スタンダード）が、次年度の全国大会における発表に決定されました。これも、研究幹事のご尽力、副校長の皆様のご協力のおかげと感謝しています。

来年度は副校長連絡会も縮減され、効率的な運営が一層大事になりますが、西部Dチームの伝統を引き継げるよう努めていきます。

常任幹事 菅 勇真（青梅総合）記

5. 学科別副校長会報告

1. 工業科副校長会

(1) 平成 26 年度役員構成と定例会について

都立工業高等学校副校長会は、全日制課程と定時制課程の副校長で構成され 4 年目を迎えた。また、工業副校長会の会員は工業校長会に加入している総合高校や産業高校、科学技術高校を加え 24 校 39 名の構成となった。

役員構成以下の通りである。

会長 高 幹明（墨田工業高校）
副会长 山本 誠（杉並工業高校）
副会长 福田健昌（荒川工業高校）
会計 桐野勝利（六郷工科高校）
書記 奥澤 稔（工芸高校）

定例会は年間 10 回、副校長連絡会実施日の午前中に工芸高校で行った。年 3 回行われている副校長研修がある回は、副校長連絡会の会場で実施した。

(2) 工業科生徒研究成果発表大会について

平成 26 年度の本会の重要課題である「工業科生徒研究成果発表大会の更なる活性化」を通して工業高校生のすばらしさを都民に広報することを主目的として昨年度に引き続き開催した。今年で第 21 回となる本大会は工業校長会が主催であり、東京都教育委員会との共催で行われるが、実質は副校長会が運営を行っている。

昨年度は東京都教職員研修センターの視聴覚ホールで実施したが、今年度は日程的に困難であったため、一昨年の会場校である総合工科高校をお借りして実施することとなった。

参加は口頭発表 23 本、パネル発表 7 本であった。昨年度より、口頭発表は学術研究部門と実践報告部門の 2 部門となり、実践報告部門は、工業技術に関する競技会やコンテストへの参加や資格取得、ボランティアなどの実践発表とした。学術部門は、工業技術に関する研究を発表項目として審査を行った。

今年度の発表は、研究内容、プレゼンテーション技術、研究成果要旨の表現、体裁など、全ての面で向上しており、審査員の先生方からも高い評価を得ることができた。

以下に平成 26 年度第 21 回大会受賞校を紹介する。

入選団体及び研究主題
口頭発表
最優秀賞 学術研究部門 科学技術高校
「ハイドロタルサイトによるプラスチック油化」
最優秀賞 実践報告部門 六郷工科高校
「光で学ぶ・遊ぶ電子玩具」
優秀賞 学術研究部門 科学技術高校
「洗剤のひみつを探る」
優秀賞 学術研究部門 多摩科学技術高校
「空間動作認知型マウス」
優秀賞 実践報告部門 杉並工業高校
「内燃機関に思いを寄せて」
優秀賞 実践報告部門 藏前工業高校
「省エネカーの製作と研究」
東京都産業教育振興会長賞 多摩工業高校
「バッ克ロードホーンスピーカーとデジタルアンプの製作」
日本設計工学会特別賞 八王子桑志高校
「庭園／枯山水の製作」
特別賞 実践研究部門 藏前工業高校
「1 年生による模型製作への挑戦」
特別賞 実践研究部門 北豊島工業高校
「空飛ぶ車いすボランティア活動」
特別賞 実践研究部門 田無工業高校
「神輿～技術の伝承～」
東京都立工業高等学校 P T A 連合会理事長賞
荒川工業高校
「高校生活での資格等の取り組み」
パネル発表部門
東京都産業教育振興会長賞 北豊島工業高校
「無念、E V 大会の敗北の検証」
入選を逃した発表者には努力賞が贈られた。
また、ポスター製作では練馬工業高校の錢龍太郎さんが入選し、本年度のポスターとして使用させて頂いた。
今年度は口頭発表、パネル発表ともに昨年よりも増え、充実した研究成果発表大会となった。しかし、開催会場が固定できない現状等、以前からの課題であった中学校や企業、都民等が参

観できる環境づくりの課題改善には至っていない。また、今後も中学校の行事日程等も視野に入れた開催日の決定や、広報等の方法についても工夫・改善が求められている。

(3) 本年度工業副校長対応事業について

- ①東京都科学技術週間への参加（2校参加）
ふしぎ祭（サイ）エンス出展
- ②「わくわくどきどき夏休み工作スタジオ」
平成 26 年 7 月 23 日～8 月 28 日
19 校で 64 講座実施
申し込み数 9703 通
参加人数 1357 名
- ③設備拠点校実習推進協議会ワーキンググループの開催
- ④産業労働局「職業能力開発センター」と都立工業高等学校との連携
- ⑤都立高校改革推進計画（第一次実施計画）
 - ・学力スタンダード
 - ・技能スタンダード
 - ・企業訪問、企業研究
 - ・教員の専門的指導力、技術力の向上
- ⑥創造ものづくり教育フェア in TOKYO
- ⑦都立高等学校合同説明会
工業科・科学技術科相談コーナー設置
- ⑧全国指導主事連絡協議会への資料提出
- ⑨都立工業高校生徒作品展
都庁での生徒作品展示
平成 26 年 11 月 7 日～11 月 13 日
- ⑩ものづくり人材育成プログラム
ものづくり講座（工業高校 18 校で実施）
特定分野推進校（工業高校 6 校で実施）
- ⑪工業校長実践研究協議会後援会参加
 - ・㈱ベネッセコーポレーション
咲花 亮
「基礎学力定着の取組について」
 - ・ものづくり大学名誉教授
細田 保弘
「若年技術者の育成について」
- ⑫平成 26 年度関東地区工業高校研究協議会
神奈川大会
平成 26 年 12 月 5 日
神奈川総合高校
- ⑬平成 26 年度高校生夕張キャンプ
夕張メロン等農産物の流通体験と現地交流

活動

- 平成 26 年 7 月 22 日～7 月 25 日
- 専門高校 6 校 24 名参加
- ⑭工業副校長会 研究部会発表会
平成 27 年 3 月 17 日

(4) 研究活動について

研究組織は工業教育研究部会、管理運営研究部会、生徒指導研究部会、定時制課程研究部会の 4 つの部会とした。平成 25 年度から始まった教育課程、都立高校改革推進計画・第一次実施計画を進めるため、工業高校の特色を生かし、日常の学校運営や教育活動に資する研究テーマで取り組んできた。各部会の研究テーマは以下のとおりである。

工業教育研究部会

「自己啓発による教育職員資格取得支援制度について」

管理運営研究部会

「工業科教員の現状と専門性向上についての調査」

生徒指導研究部会

「生徒指導統一基準に向けた各校の取組状況と課題について」

定時制課題研究部会

「都立夜間定時制工業高校の現状と課題」

(5) おわりに

専門高校においては、「学力スタンダード」とともに「技能スタンダード」が今年度より全ての工業高校に導入され、実習等の授業や資格取得の取組に活性化が図られている。

また「都立高校改革推進計画第一次実施計画」を受けて、「都立専門高校改編基本構想検討委員会」が設置され、私自身、工業分科会委員として今後の工業高校の在り方について、他の先生方と議論を重ねてきた。工業高校の改善の方向性は、デュアルシステムや課題研究等の実践における外部人材の活用推進と、魅力ある工業高校を発信するための学科名称の改編・開設等がポイントとなる。よってそれらの課題に対し、工業副校長会としても、様々な意見を出し合い、集約し、改革・推進に積極的に関わっていきたい。

常任幹事 高 幹明（墨田工業）記

2. 商業科副校長会

東京都商業関係高等学校副校長会は、会員校13校の副校長13名で構成されています。内訳は、商業高校9校、普通科併設校1校、産業科（ビジネス情報分野）1校、ビジネスコミュニケーション科2校となっています。

商業関係高等学校副校長連絡会は、8月を除いて毎月開催される11回の学校経営支援センター別副校長連絡会の日の午前中、全商會館（公益財団法人全国商業高等学校協会会館）を主たる定例会会場として実施しています。

定例会では、教育庁指導部高等学校教育指導課から指導主事の参加をいただき、東京都教育委員会からの連絡・報告、東京都商業教育研究会からの連絡・報告、商業関係高等学校間での研究協議・情報交換等を行い、商業関係高等学校の活性化の方策や学校運営についての研究を行っています。

今年度の活動実績は、次のとおりです。

第1回定例会 教職員研修センター

平成26年4月18日（金）9時05分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・教育庁指導部高等学校教育指導課より
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
- (3) 情報交換等
 - ・自己紹介等

第2回定例会 全商會館

平成26年5月13日（火）10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・文部科学省 教員研修
 - ・社会保険労務士及び司法書士の活用
 - ・夕張キャンプ
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
- (3) 情報交換等
 - ・1月全商簿記検定の実施場所
 - ・検定料の処理
 - ・都公立高等学校副校長協会総会日程
 - ・各校の様子

第3回定例会 全商會館

平成26年6月10日（火）10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡

- ・文部科学省 教員研修
- ・都立専門高校改編基本構想検討委員会
- ・学校Webページの更新
- ・商業高校視察

- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・商高連（東京都立商業高等学校体育活動連絡会）定期総会・研究協議会日程
- (3) 情報交換等
 - ・「学校いじめ防止基本方針」の策定状況
 - ・6月ワープロ大会PC搬入の対応
 - ・商P連（東京都公立商業高等学校PTA連合会）文化交流会日程
 - ・全商珠算競技大会新人戦日程
 - ・各校の様子

第4回定例会 全商會館

平成26年7月8日（火）10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・商高連 加盟費
- (3) 情報交換等
 - ・進学用調査書
 - ・「学力スタンダード」導入後の「第1回学力調査（各校作成）」の実施状況
 - ・高校生書評合戦東京都大会当日の全商情報処理検定の実施方法
 - ・各校の様子

第5回定例会 教職員研修センター

平成26年9月4日（木）9時05分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・商業関係高等学校教務主任研究協議会
- (3) 情報交換等
 - ・生徒商業教育研究発表大会東京都代表
 - ・英語教員海外派遣研修の後補充講師

第6回定例会 全商會館

平成26年10月14日（火）10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・独立行政法人教員研修センター
教職員等中央研修 副校長・教頭等研修
 - ・全国指導主事連絡協議会
テーマ 授業改善
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡

- ・都商研ビジネスコミュニケーション分科会研究協議会日程
- ・商業関係高等学校生活指導主任研究協議会
- (3) 情報交換等
 - ・技能スタンダード作成の進捗状況
 - ・都立専門高校改編基本構想検討委員会報告書による提言
 - ・募集対策 中学校訪問の実施状況
 - ・東京都高等学校図書館研究会の会費納入状況
 - ・校内人事と職員会議運営の聞き取り調査
 - ・商P連文化交流会
 - ・各校の様子

第7回定例会 全商会館

平成26年11月11日(火) 10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
 - ・合同学校説明会実施状況
 - ・都立商業高等学校等の進路指導に関する連絡協議会
- (3) 情報交換等
 - ・就職内定状況
 - ・来年度の入学者選抜
 - ・都立専門高校改編
進捗状況、今後の方向性
 - ・各校の成果検証
 - ・技能スタンダード作成の進捗状況
 - ・商P連文化交流会
 - ・各校の様子

第8回定例会 全商会館

平成26年12月9日(火) 10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・全国指導主事協議会
 - ・中央教育審議会
初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について
 - ・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会(商業分科会)
 - ・学校Webページの更新 進路実績の更新
 - ・東京都教育研究員
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡

- (3) 情報交換等
 - ・推進校の状況
「人間としての在り方生き方に関する新教科」先行実施校
 - ・各校の様子

第9回定例会 教職員研修センター

平成27年1月15日(木) 9時05分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
 - ・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会(商業分科会)
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
- (3) 情報交換等

第10回定例会 全商会館

平成27年2月17日(火)

- ・平成27年2月6日付事務連絡「平成26年度第10回(2月分)副校長連絡会及び経営企画課(室)長連絡会の開催中止について」の主旨に沿って中止

第11回定例会 全商会館

平成27年3月17日(火) 10時00分から

- (1) 東京都教育委員会からの連絡
- (2) 東京都商業教育研究会からの連絡
- (3) 情報交換等
 - ・今年度の総括
 - ・各校の様子

8月28日に出された都立専門高校改編基本構想検討委員会報告書における提言は、とりわけ商業関係高等学校にとり、厳しいものとなっています。学科改編や統廃合が噂される中、商業関係高等学校が都民のニーズに対応し、生徒にどのような付加価値を提供できるかを明確に示すことが喫緊の課題です。ハードウェアではなく、ソフトウェアを創造する能力を教育しているのために視覚的にアピールができず、不利な面があります。課題解決のために、商業関係高等学校副校長連絡会での研究協議を通じて、商業教育の改善と商業関係高等学校の活性化に邁進していきたいと思います。

常任幹事 新井 智恵子(第三商業)記

3. 農業科副校長会

東京都農業関係高等学校副校長会は、都教育委員会より平柳指導主事の参加をいただき、会員学校数9校・15名で、支援センター別副校長連絡会の午前中に都立農芸高等学校を会場にして開催している。

定例会では、都教育委員会からの連絡、各部署からの連絡・報告、情報交換、連携事業などの調整等を行い、農業教育の推進と一層の活性化を目指している。

今年度は、特に10月に関東支部農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会を開催するための打ち合わせや準備に時間を割いた。

第1回定例会

日時 平成26年4月18日(金) 9:00～9:30

会場 教職員研修センター

内容 ①指導部高等学校教育指導課より

②平成26年度役割分担の確認

③幹事会報告

④農業クラブ都連盟

⑤都庁花壇植栽

⑥都農研

⑦情報交換

夕張キャンプ、高校総体、全国農業高等学校長協会総会、関東支部農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会など

第2回定例会

日時 平成26年5月13日(火) 9:30～11:00

会場 都立農芸高等学校

内容 ①指導部高等学校教育指導課より

②幹事会報告

③都庁花壇植栽

④農場主任会議

⑤東京都農業祭

⑥都農研

⑦農業クラブ都連盟

⑧農場協会

⑨東京都学習成果発表会

⑩全国農業高校収穫祭

⑪農業クラブ関東大会

⑫情報交換

全国農業高等学校長協会総会、夕張キャンプ、関東支部農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会など

第3回定例会

日時 平成25年6月10日(火) 9:30～11:00

会場 都立農芸高等学校

内容 ①指導部高等学校教育指導課より

②幹事会報告

③都庁花壇植栽

④農場主任会議

⑤東京都農業祭

⑥都農研

⑦農業クラブ都連盟

⑧農場協会

⑨東京都学習成果発表会

⑩全国農業高校収穫祭

⑪農業クラブ関東大会

⑫関東支部農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会

⑬情報交換

夕張キャンプ、防災宿泊など

第4回定例会

日時 平成25年7月8日(火) 9:30～11:00

会場 都立農芸高等学校

内容 ①指導部高等学校教育指導課より

②幹事会報告

③都庁花壇植栽

④農場主任会議

⑤東京都農業祭

⑥都農研

⑦農業クラブ都連盟

⑧農場協会

⑨東京都学習成果発表会

⑩全国農業高校収穫祭

⑪農業クラブ関東大会

⑫関東支部農業関係高等学校教頭・副校長研究協議会

⑬情報交換

第5回定例会

日時 平成25年9月4日(木) 9:00～9:30

会場 教職員研修センター

- 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議
 ⑤東京都農業祭
 ⑥都農研
 ⑦農業クラブ都連盟
 ⑧農場協会
 ⑨東京都学習成果発表会
 ⑩全国農業高校収穫祭
 ⑪農業クラブ関東大会
 ⑫関東支部農業関係高等学校教頭・副
 校長研究協議会
 ⑬情報交換

1か月に迫った関東支部農業関係高等学校教頭・副校长研究協議会について、研修会終了後にも集まって打ち合わせを行った。

第6回定例会

日時 平成25年10月14日(火) 9:30～11:00
 の予定であったが、台風の対応で参加者が少なく、流会となつた。

第7回定例会

- 日時 平成25年11月11日(火) 9:30～11:00
 会場 都立農芸高等学校
 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③都庁花壇植栽
 ④農場主任会議
 ⑤東京都農業祭
 ⑥都農研
 ⑦農業クラブ都連盟
 ⑧農場協会
 ⑨東京都学習成果発表会
 ⑩全国農業高校収穫祭
 ⑪農業クラブ関東大会
 ⑫関東支部農業関係高等学校教頭・副
 校長研究協議会
 ⑬情報交換

全国農業校長協会の表彰、学力スタンダード、技能スタンダード、合同説明会の状況、文化祭など

第8回定例会

- 日時 平成25年12月9日(火) 9:30～11:00
 会場 都立農芸高等学校
 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③農場主任会議
 ④都農研
 ⑤農業クラブ都連盟
 ⑥農場協会
 ⑦農業クラブ関東大会
 ⑧関東支部農業関係高等学校教頭・副
 校長研究協議会
 ⑨情報交換
 中学生及び保護者の学校説明会への
 参加状況など

第9回定例会

- 日時 平成26年1月15日(木) 9:00～9:30
 会場 教職員研修センター
 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③農場主任会議
 ④関東支部農業関係高等学校教頭・副
 校長研究協議会
 ⑤情報交換
 講師等の人数確保に関する情報交換

第10回定例会

- 日時 平成26年3月17日(火) 9:30～11:00
 会場 都立農芸高等学校
 内容 ①指導部高等学校教育指導課より
 ②幹事会報告
 ③次年度の役割分担
 ④農場主任会議
 ⑤都農研
 ⑥農業クラブ都連盟
 ⑦農場協会
 ⑧関東支部農業関係高等学校教頭・副
 校長研究協議会
 ⑨情報交換

さらに今年度は、第65回関東支部農業関係高等学校教頭・副校长研究協議会を10月16日(木)、17日(金)にフロラシオン青山を会場に開催した。

来賓に文部科学省教科調査官 田畠淳一氏を

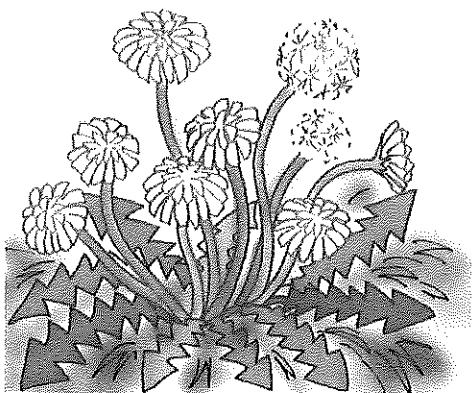
始め、東京都教育庁からも藤井大輔指導部高校教育改革担当課長をお招きし、関東1都6県に山梨県と静岡県を含む計9都県の農業関係高等学校の教頭・副校長多数の参加があった。

初日には3件の発表、2日目には3会場に分かれて研究協議等を行い、参加された方々には有意義な時間を見たと考へている。

農業科副校長会は、各校・各課程それぞれが様々な問題を抱えている中、副校長として職務遂行に必要な助言や情報が得られる有意義な時間となっている。9校・15名というこじんまりした部会であるが、農業高校の専門性を活かした特色化を積極的に図り、魅力ある農業高校の活性化に向け、島嶼を含めた農業系高校が連携している。また、各種の行事・事業等に取り組んでいる。

今後も農業科副校長会を連絡調整、情報交換のみにとどまらず、農業教育の発展を目指して取り組んでいきたい。

常任理事 重中 由香里（瑞穂農芸）記



6. 研究部会報告

1. 管理運営研究部会

第1委員会（学校管理関係）

1 はじめに

都立高校改革が推進され、都立高校の個性化・特色化が進展するとともに、都立高校に対する都民のニーズが多様化する中、中学生やその保護者、中学校の教員等に対する情報提供のため、学校広報活動が充実してきた。現在、都立高校改革推進計画・第一次実施計画（平成24年2月 東京都教育委員会）に基づく様々な事業が実施される中で、生徒一人一人の能力を最大限に伸ばす学校づくりが求められている。この中で、各学校で展開される教育活動を理解したうえで入学意志を明確にもった生徒を募集するためにも、学校広報活動は、ますます重要になっている。

また、学校管理職育成指針（平成25年5月 東京都教育委員会）において、学校管理職に求められる「学校マネジメント能力」の一つである外部折衝力として、地域対応・学校広報が挙げられている。

そこで、学校広報活動の現状について調査・研究し、今後の各学校での広報活動の展開や副校长自身の「学校マネジメント能力」の向上に役立てることをねらいとした。

2 調査について

- (1) 調査期間 平成25年12月～平成26年1月
- (2) 調査方法 質問紙による調査
- (3) 調査対象 都立高校（全、昼間定）及び中等教育学校（含附属中）199校
- (4) 回答数 92校（通信制を含む93課程）
回収率46%

3 調査結果について

以下、回答があった93課程について

(1) 募集対策

- ①学校案内：99%の課程が作成
作成部数 平均約5,400部 最大13,000部
- ②学校説明会：全校が実施 平均3.3回
- ③学校説明会用ポスター：79%の課程が作成
作成部数 平均約450部 最大10,000部
- ④学校紹介（説明会）用DVD：63%の課程が

作成

- ⑤学校説明会等使用写真データ集約・管理：
88%の課程が実施
- ⑥塾等主催での学校説明会・相談会：
78%の課程が参加 平均4.9回 最大40回
- ⑦塾・出版社関係アンケート：
98%の課程が回答 平均6.6回 最大50回
- ⑧中学校訪問：95%の課程が実施
- ⑨中学校での出前授業：70%の課程が実施
実施回数 平均3.3回 最大20回
- ⑩高校での模擬授業：57%の課程が実施
実施回数 平均2.1回 最大25回

(2) ホームページ作成関連

- ⑪年間運営計画作成・管理：80%の課程が実施
- ⑫運用（更新）：全課程が実施 月2回～毎日
- ⑬個人情報対応：83%の課程で実施

(3) 地域連携

- ⑭町会長連合会等：40%の課程が参加
- ⑮地域活動や催事：84%の課程が参加
- ⑯近隣小・中学校の行事：54%の課程が参加

4 まとめ

(1) 募集対策

担当部署を中心に行われているが、塾等の説明会・アンケートへの副校长の関わりが他の項目に比べて大きい。

学校説明会等で、生徒を活用して、来校者から好評を得ているという報告や、学校全体で組織的に取組む姿勢が中学生等に伝わり、応募倍率が上昇したという報告がある。生徒や教職員が組織的に取組めば、教職員の業務の軽減にもつながり、効果的な募集活動を行えると考える。また、評判や応募倍率の上昇という成果が、募集対策に協力的でない教員の意識改革につながると考える。

担当部署（分掌・教科・部活動）の負担大、教員の温度差、従事者の人選・育成、情報発信内容の統一といった課題に対しては、誰が説明しても同じ内容になるようなレジュメを管理職と担当部署で協議したうえで作成し、全教職員にこれをもとにして説明させることが解決策として考えられる。更に各教職員に当事者意識をもたせることができれば、自校の特色を自分の

言葉で語れると考える。

また、近年は中学校1・2年生等への説明の機会が増えてきており、それに対する説明内容を用意している学校もある。中期的な募集対策も必要になっている。

(2) ホームページ作成関連

「東京都立学校ホームページ管理運用規定の制定及び各学校におけるホームページの充実について（通知）」（平成16年2月6日 15教指企第806号）及び「都立学校ホームページシステム運用基準の制定について（通知）」（平成21年10月1日 21教学高第1036号）に基づいて、ホームページの充実を図るとともに適切な管理運用に努めることとされている。

通知では、「最低、月に1度は更新を行うことを基本とし、できるだけ、頻繁に更新するように心がける。」とされている。回数を記入した学校すべてで最低限の更新はされているが、更新が頻繁に行えないことを課題として挙げている。技術を有した人材の不足は簡単に解決できる問題ではないが、掲載原稿作成と更新の業務を分担するシステムを構築できれば、更新担当者の負担が軽減し、更新回数が増えると考える。そのためには、副校長が両者の間で調整を図る必要がある。

また、更新機器についても、TAIMS-PCから行えるようになると、ICT-PCを立ち上げる不便さが解消され、更新回数が増えると考える。

個人情報保護等については、「生徒等の作品、肖像等をホームページ上で公開する場合は、生徒及び保護者等の同意を得たうえで行う。なお、氏名の表示について教育上必要がある場合は、生徒及び保護者等の同意を得て、原則として姓を用い名は使わない。」と規定されている。回答があった課程の17%で対応をとっていないと回答している。ホームページに個人情報を掲載している場合には、副校長が中心となって、早急に対応する必要がある。

ホームページを見やすくしたら、アクセス数の増加につながったという報告がある。ホームページは広報活動の有効な手段であるので、さまざまな課題を解決しながら、充実させていく必要があると考える。

(3) 地域連携

地域連携については、(1)、(2)に比べて管

理職の関わりが大きい。特に、町会長連合会等への参加者については顕著であり、学校代表者としての参加と考える。

「重要だが、忙しく、手が回らない。」との回答がある一方、「地域から喜ばれている。」、「地域からの好評価は学校活動の活性化につながっている。」、「近隣からの苦情対応に時間がとられるが、地域等との連携で認められるようになってきた。」などの成果が報告されている。防災訓練を契機として、地域との連携が深まった報告も複数寄せられている。また、専門高校ならではの「生産品販売で地域連携は活発で良好。」という報告もある。特色ある学校は、その特色を活かした地域連携を行うことができるを考える。

生徒の通学区域が広く地域への意識が低かった学校においても、前述のように、地域と連携した防災訓練などを契機として、学校へ対する地域の理解が深まると考えられるので、副校長の関わりが重要である。

5 おわりに

アンケート結果から、広報活動全体について組織的に行っている学校もあるが、担当者の負担、人材育成、教職員の意識（温度差）に課題を抱え、意欲的な個々の教員の力量に頼っている学校もあり、学校全体の組織的な取組にしていきたいと考えている副校長の意識も伺える。

地域対応・広報活動を充実させるためには、教員の意識を改革し、これを担う人材を育成することが必要である。副校長として、率先垂範とともに、広報活動の成果を応募倍率、学校評価アンケート結果等、目に見える形で教員に示すことによって更なる動機付けができるのではないかと考える。

協議・意見交換では、新しい視点として中学生の不安を解消する広報活動も大事であるという意見や、生徒の声を記した文書を配布している事例などが報告された。

指導・講評では、副校長の重要な役割は教職員が同じ目標に取組んでいく中で、学校全体の取組になるように指導していくこと。その中で「学校マネジメント」能力も向上すると考えるので、強いリーダーシップが重要である、というお話をいただいた。

委員長 服部 幸一郎（竹早）記

第2委員会（職務、待遇関係）

「併設型中高一貫教育校へようこそ」

～両国中高の場合～

I はじめに

8月の発表は、中高一貫教育校併設型（以下、「併設型」と略記）の構造的な課題について考察した結果をまとめたものであったが、改めて読みかえしてみると、中高一貫教育校併設型とはどのような組織なのかということについて十分に触れることができていない。このため、中高一貫教育校に勤務経験のない方にとって、リアリティーを持ちにくいものであったと思われる。そこで今回は、その組織構成と業務について、現任校である東京都立両国高等学校と東京都立両国高等学校附属中学校（以下、それぞれ「両国高」、「両国中」と略記。また、両国高と両国中を合わせて表記する場合は「両国中高」と略記）を例に考察してみる。

II 教育系職員の構成

併設型というと、中学校と高等学校の二つの学校がそれぞれ別の校地、または同じ校地に別棟で存在し、教育系職員の構成は、中学校には中学校での教職経験をもつ教員だけ、高校には高校での教職経験をもつ教員だけが配置されていると思われていることが多いようである。実態はどうであるのか。両国中高の常勤の教育系職員（管理職を含む）は61名である。それぞれ両国高か両国中にその本来の所属（原籍）があり、もう一方を兼務している。また、両国中高に異動する前の教職経験を見てみると、都立高校、区市立中学校、私立の中学校・高校、新規採用などと様々である。これをまとめると次の表1のようになるが、両国中高の場合、高校からの異動者等がおよそ80%を占めている。

表1 両国中高赴任前の在職状況

高校職（都立高校等）	49
中学校職（区市立中学校等）	9
新規採用者	3

次に、同じ視点で両国中高の計6学年の構成（両国中の1～3学年の正副担任と両国高の1～3学年の15人の正担）を見てみると次の表2のようになる。

表2 担任の教職経験からみた学年団構成

学年	中学職	高校職	新採
中1	3	3	0
中2	3	1	2
中3	2	4	0
高1	1	4	0
高2	0	5	0
高3	0	5	0

表2を補足すると、両国中の学年主任のうち2名が高校職出身、1名が高校職であるが、より正確に言えば、前任校は併設型である。また、両国中の教務主任及び生活指導主任には中学校での経験が豊富な教員を当てている。高校ならではの学習や生活指導に対する考え方を高校の文化、中学ならではものを中学の文化と呼ぶことがあるが、本校ではそれらが互いに刺激を与えつつ、両国中高という一つの文化を形成している。都立高校1校ないし2校を経験した若手の高校職教員が、中学校での経験豊富なベテランに指導を受けながら中学校担任を務めたり、中学職の教員が高校生の授業や部活動の指導を行ったりする中で、それぞれが、本来知りえなかった、生徒の「これまで（過去）」と「これから（未来）」を実際に見ることができる。他の併設型や中等教育学校にも当てはまるが、まさに中高一貫教育校の醍醐味ということができる。

III 併設型の業務

1 副校長の業務

副校长としては、教員の「籍と担当」、そして「両国中・両国高・両国中高という学校の区別」といったことが業務分担に大きくかかわってくる。籍については既に触れたが、難しいの

は、それまでの教員の経験と、本校での「籍」に連続性がない場合があることである。また、「担当」についても、必ずしも「籍」と一致しないことが問題を複雑にしている。例えば本校では、都立高歴 30 年というベテラン教員が、本校に異動した際に中学校籍となり、しかしながら高校の学年主任を務めつつ、中学校と高校の授業を持っているという例がある。その逆で、区立中学校歴 30 年というベテラン教員が、本校では高校籍で、中学校の学年主任を務めているという例もある。教員本人の前職と籍には連続性が無く、籍と担当は必ず一致するものではないということは、籍や担当に応じて回答しなければならない調査や割り振らなければならない業務分担で副校長を悩ますことになる。出張の命令について例を挙げてみる。本校では、担当（本校では、高校担当を高担、中学担当を中担と呼称しているが、言葉による式で表せば「全教育系職員一（引く）中学校の正副担任 18 名一中学校担当の養護教諭 1 名一中学校担当の副校長 1 名」=高校担当者、となる。）に応じて、二人の副校長が教員の出張の命令権者となっている。が、時に中担の教員が高校の部活動で引率をするような場合もあり、その場合は中学担当の副校長が旅費システムに高校副校長としてログインして処理するというような処理を行うことになる。また、ある教員については、前年度は中学校三年生の担任だったため、中担の副校長が出張命令していたが、その教員が、翌年度は高校一年生の担任となったため、高校副校長による命令のための設定変更をしなければならないことがある。また、調査などでは、中学校だけ、または高校だけ、あるいは両方が回答しなければならないということが明確なものは問題がないが、中には該当するのかどうかが通知文や報告フォーマットからは分かりにくい場合もあり、結局電話等で問い合わせることがあるなど、課題と感じることもある。

2 教員の業務

教員の業務については、学年担任や分掌という点について既に書いたが、授業という面ではどうであろうか。表 3 にまとめてみた

表 3 教科別の中高担当状況 単位は名

教科	中学校のみ	高校のみ	両方を担当
国語	1	4	4
地歴※	0	2	4
公民	0	0	2
英語	3	7	2
数学※	1	6	5
理科※	2	2	6
保健体育※	0	0	6
芸術	0	0	2
技家	0	0	1
情報	0	1	0

※ 非常勤教員を含む

中高両方の授業を担当している教員は、国語で約 44%、地歴で約 67%、公民で 100%、英語で約 16%、数学で約 42%、理科で 60%、保健体育、芸術、技術家庭で 100% となっている。地歴と公民を合わせると 75% となり、理科とともに目立った割合となっている。中には、時間割の都合で、高 3 の受験指導をした直後に中学校の授業を担当する教員もあり、授業準備などを工夫しながら対応している。

III 終わりに

今回、改めて現任校について調べるなかで、いくつかの発見もあった。この機会を与えてくださったことに心から感謝している。

委員長 渋谷 寿朗（両国附属中）記

2. 高校教育研究部会

第1委員会（教育課程）

主題：「学力スタンダード等の実施上の課題と副校長の役割について」

1 研究のねらい

高等学校教育における学習到達度を明確化し、卒業までに身に付けさせるべき力を示していくことは、生徒の学力を保証していく上で大変重要なことである。東京都教育委員会は、「都立高校改革推進計画 第一次実施計画」の中で、「都立高校学力スタンダード」策定事業を掲げ、平成25年度は、推進校32校が先行実施し、平成26年2月に学力調査を実施した。平成26年度からは、進学指導重点校や定時制課程等を除く全校が、これまで実施してきた「学力向上開拓推進事業」を「都立高校学力スタンダード」事業に発展させ、学力スタンダードに基づく学習指導と評価に取り組んでいる。

また、平成27年度からは全ての専門高校で「都立専門高校技能スタンダード」に基づく指導が実施される計画である。

西部Dチーム副校長会は、平成26年度の研究主題を「学力スタンダード等の実施上の課題と副校長の役割について」と設定し、各校の課題を把握するとともに、組織的に「都立高校学力スタンダード」・「都立専門高校技能スタンダード」を実施していく上での副校長の役割について提言すること目的として研究を進めた。

2 調査の方法

アンケート調査は、平成26年4月に作成した下記素案をチーム内副校長で調整して確定させた。調査時期は、平成26年4月26日（土）から5月23日（金）までとし、データは、全都立高校副校長個人端末宛て送付した。調査内容は、各校の学力スタンダードに係る取組状況等を把握するため、次のような調査項目を設定した。

- (1) 学校名・課程・学科
- (2) 開始年度
- (3) 学力スタンダード実施教科・科目
- (4) 技能スタンダード実施教科・科目

- (5) 校内の推進組織（推進委員）
- (6) 年間指導計画・週ごとの指導計画の主たる作成者
- (7) 学力調査について
- (8) 学力スタンダードの実施上の課題
- (9) 事業に対する副校長の関わり方

3 アンケート調査の結果

回答状況は、都立高校62校で、ほとんどが全日制課程普通科で44校であった。学力スタンダード開始年度は、平成25年度から11校、平成26年度から44校であった。平成26年度における学力スタンダード実施教科・科目は表1の通りであった。（太文字は最頻値）

表1 学力スタンダード実施教科・科目

	基礎	応用	発展	学び直し
国語総合	22	20	10	1
現代文B	3	5	3	0
世界史A	6	6	0	1
世界史B	2	7	5	0
日本史A	2	3	1	0
日本史B	0	4	3	1
地理A	10	12	2	1
地理B	1	1	7	0
現代社会	7	4	4	1
倫理	0	2	1	0
政治・経済	0	1	0	0
数学I	21	21	10	1
数学II	3	4	3	1
物理基礎	6	5	5	1
化学基礎	11	17	8	1
生物基礎	14	15	8	1
地学基礎	2	3	0	0
コミュニケーション英語I	22	20	11	1
コミュニケーション英語II	4	5	3	0
農業と環境	2	0	0	0
工業技術基礎	0	0	0	0
ビジネス基礎	5	0	0	0

備考：上記のほか、以下の科目について、全て学び直しで作成している都立高校が1校あった。（現代文、科学と人間生活、体育、保健、音楽I、音楽II、美術I、美術II、書道I、書道II、コミュニケーション英語基礎、家庭総合）

4 分析・考察

回答結果からの傾向について述べる。アンケート回収は62校であった。そのほとんどは全日制課程普通科であり、進学指導特別推進校、

進学指導推進校、中堅校や進路多様校等からバランスよく回答があった。

(1) 学力スタンダードの実施状況について

学力スタンダードの実施は、7割が平成26年度から、2割が平成25年度からであった。

平成26年度の学力スタンダード実施状況は、スタンダード「基礎」「応用」「発展」等、万遍なく、一様に参考としていた。

平成26年度からの実施校は1学年で開講している科目、平成25年度からの実施校は1・2学年の開講科目について実施していた。

同じ高校で、科目により異なる段階のスタンダードを参考にしている事例は5件だけであった。また、同じ高校で学科・コースにより異なる段階のスタンダードを参考にしている事例はなかった。

進学指導重点校は対象外のため、進学指導特別推進校等では、「発展」を参考にする以外ないと判断している高校が複数あった。

(2) 技能スタンダードの実施状況について

技能スタンダードⅠでは、「発展」を選択している高校が3校あり、学力調査も実施予定であるとする回答があった。技能スタンダードⅡでは、これまで取得させている資格を位置付けている学校が2校あった。

(3) 校内組織について

校内組織では、学力スタンダード事業を委員会として実施している高校が8割(45校)で大半であった。その名称は、「学力向上推進委員会」「学力スタンダード推進委員会」等が多くた。構成メンバーとしては、管理職+教務主任+5教科が多く、今後は学年進行で全教科等に拡大していく傾向にある。

年間授業計画や週ごとの指導計画の作成者は、各科目の主担当者が代表して作成しているケースが大半であった。

(4) 学力調査について

年度当初の時点では、目標に達しなかった生徒への指導について、検討中や未定の高校が大半であった。学習の評価・評定に学力調査結果をどのように関連付けていくかは重要な検討課題であるとの意見も多くあった。

2月は、入学者選抜の時期とも重なり、実施に当たって不安材料が多いことが分かった。

繰り返し指導について、平成25年度からの

実施校は、補習や課題、独自のテスト等で追認を行っているケースが多かった。

(5) 学力スタンダード実施上の課題について

主な意見として、①学力スタンダード全般的な課題、②学力調査実施上の課題、③提出・公表書類の事務手続き上の課題に大別できた。

学力スタンダード全般的な課題としては、学習指導要領に従い、万遍なく、画一的になってしまいうという意見、科目の特色や独自性を出しにくくなるという意見が多くた。学力調査実施上の課題としては、2月では全ての学習範囲が終了していないこと、不合格者への追認指導が十分にできないのでは等の回答が多かった。

(6) 学力スタンダード実施上の副校長の役割

進行管理を適時に行うこと、必要な指導・助言を適切に行い、新しい事業に対して説明責任を果たしていく必要があると考えている副校長が大半であることが分かった。

5 終わりに

平成26年度は西部Dチームが発表の担当であるため、研究幹事を平成26年2月に前常任幹事の小平西高校副校長羽生英雄先生から打診を受けて連絡会での了解のもと、拝命しました。平成26年3月の連絡会では、「学力スタンダード」か「人間としての在り方・生き方に関する新教科」を検討した結果、後者は平成26年度の全面実施が見送られたため、「学力スタンダード」としました。年度末初めの新様式の書類の対応方法について本校も悩みましたが、むしろ、解決のための課題を検討していく良い機会となりました。幸い、前研究幹事の東村山高校副校長中山善弘先生とも一緒に相談しながら進めることができたため、原稿執筆・発表までの進行管理が計画的にできました。この会報が発行される頃は学力調査の課題を新たに検討する時期だと思います。研究協議会に向けて、西部Dチーム常任幹事青梅総合高校副校長菅勇真先生、司会の東村山西高校副校長牧野明久先生、記録の羽村高校副校長上原悟先生、調査にご協力いただいた副校長先生方、当日協議に参加された副校長先生方に厚く御礼申し上げます。

委員長 加藤 竜吾（東村山）記

第2委員会（教育対策）

主題：「次世代リーダー育成道場の制度を活用した留学について」

I はじめに

現代社会のグローバル化が急速に進展し、世界では、国境を越えて情報や人の移動が活発化している。ところが日本では、若者を中心とした「安定志向」や「内向き志向」などがメディア等で報道され、平成16年度以降、海外への留学生数も減少傾向にある。

柔軟性を備えた高校生の早期段階から、国際化の意識を涵養し、グローバル化する社会に対応できる人材の育成を図っていくことは、高校教育における大きな課題である。このような中、現在東京都が行っている「次世代リーダー育成道場」(以降「次世代」と表記する)については、その推進基軸となる制度として有効な手立てと考えられる。

そこで、中部Bチームでは本主題を研究主題として調査を行い、「次世代」を中心とした留学に関する教育の充実を図るための方略を、各校に還元することを目的として研究を行った。

II アンケートの回答の集計方法

全都立高等学校の副校长を対象にアンケートを実施した。調査期間は平成26年6月まで、都立高校全課程のうち85課程から回答を得た。

III アンケート調査の結果と分析

1 次世代」に参加した（している）生徒の有無について

次世代有	全日制	44校
	定時制	2校
次世代無	全日制	19校
	定時・通信制	20校

別表の通り参加している校種としては、全日制課程95%、定時・通信制課程が5%である。校種的には、圧倒的に全日制課程の参加が多い。

2 参加した場合、留学または休学のどちらか

次世代有	留学	38校
	休学	3校
	留学、休学複数	5校

別表の通り、「留学」扱いが83%、「休学」扱いが7%となっている。圧倒的に「留学」扱いでの参加が多かった。「次世代」に参加した生徒の場合、留学時の学習を学外で単位認定でき

る制度を利用及び活用しているといえる。

3 2の理由について

「留学」扱いと回答した学校では、「学年進行での卒業を希望／海外での時間を有効に使いたい／留学を認める制度がある／留年したくないため」などの記述がある。一方「休学」扱いと回答した学校では、「進学対応／帰国後、大学受験に対応するため／勉強が遅れるから」などの記述がある。

4 留学期間中の単位認定の扱いについて

次世代有	単位認定有	43校
	認定無	3校

「次世代」に参加しているほぼ全ての学校が、留学中の現地校での学習を単位として認定している。

5 留学等について校内での規定の有無について

次世代有	規定有	41校
	規定無	5校
次世代無	規定有	16校
	規定無	19校

「次世代」に参加している学校では、90%の学校が留学に関する校内規定を整備している。

6 留学について検討・確認する組織の有無について

次世代有	組織有	37校
	組織無	9校
次世代無	組織有	16校
	組織無	19校

「次世代」に参加している学校では、80%の学校が校内組織を整備している。

7 検討組織が有の場合、組織構成について

組織構成としては、校長、副校长、教務主任、学年主任、担任はほぼ構成員の中に入っている。留学に関してそこから派生する問題、つまり学籍問題や留学による単位認定など、教務的な案件でもあるので、教務・学年主任、当該担任は組織として必須のメンバーになったと考える。

8 研修成果の報告について

次世代有	成果報告設定有	31校
	成果報告設定無	15校

回答としては「学校広報誌や同窓会誌に体験記をのせる／進級、卒業認定伝達のとき／探究活動の一環で成果の発表／学校としての取組みはないが、クラス単位、学年単位での取組みがある／3学期の始業式後、行った／朝礼において報告、その後学年集会で／3学期の修了式の

場で報告会を行った／復学後、学年集会等で報告・発表を行わせる予定／2学期課題研究発表会で発表、3学期始業式で全校生徒対象に報告会を行う予定／全校集会において報告／復学後の全校集会の際に、留学の成果報告として、英語でスピーチを行う／帰国後に体験レポートを提出させた／全校集会にて、体験報告会を実施した／校内で毎年実施しているスピーチコンテストのなかで報告会を行った／次世代リーダーを含む留学を希望する生徒へのガイダンスにおいて、第1期生の生徒によるプレゼンテーションを行った」などの記述があった。

その他に「現在留学中の生徒がいるが、留学先からの様子を伝える英文の手紙を送ってきた。同級生による英文の手紙は在校生に大きな好影響を与えていた」といった帰国後ではなく、留学中にも報告を意識させた取組みを行っている学校の例もあった。

9 留学の効果について

回答としては、以下のように留学の効果を記述したものが多かった。「国際交流事業への積極的参加、広い視野で進路を考える／広い視野をもつ／母国への理解が深まった／異文化、外国語の理解が深まる／学習への意欲が高まり、自信をもつようになる／進路について幅が広がる／語学力、コミュニケーション力、視野が広がる（3）」

一方、留学によるデメリットについては、「理数系の学習面での遅れが目立った／日本と留学先とのギャップに悩む／個人の能力向上には大きな効果を感じるが、卒業後の進路を考えたときには、その判断は慎重にならざるを得ない／学習の遅れや準備不足」という回答があった。

10 帰国後の学習面、進路での課題について

その回答としては、「帰国して進学面で不利になった／帰国時期によって、修学旅行への参加、推薦入試、進路への影響がある／学習理解、入試への影響がある／3学年で帰国したときの進学指導の困難さがある／日本の大学の受験では、予備校等で補完が必要となる／学習面の遅れを取り戻す必要がある」等留学中あるいはその後の学習の遅れや進路問題に関する課題がほとんどであった。

11 その他留学に関しての課題

その後の進学などのための学習準備などの課

題に対しては、留学による学習の遅れを補完する手立てについても、準備しておくべきであると思われる。費用の問題だけではなく、帰国後のサポート体制をも含めた留学に向けての様々な体制づくりは、重要な課題である。

IV 考察

本研究では、次世代リーダー育成道場の制度を活用した留学について、各校の状況及びその取組と課題について調査を行った。調査1から6では、「次世代」に参加する該当生徒の希望や学校の実態・事情によって差が生じていることが分かった。調査9から11にかけては、留学に伴う課題が挙げられ、留学中における学習面の対策及び留学終了後の学習に対するフォローアップが必要となっていることが分かった。

これから時代を考えた際、若者がグローバル化した国際社会で活躍していくために、あるいは日本社会を支えるために、幅の広い能力が要求されるのは論を待たない。そのためには条件などを最大限整備して、積極的に「次世代」などの留学制度を活用して、留学にチャレンジしようとする生徒を育成していくことが必要となる。国際感覚やコミュニケーション能力、チャレンジする精神などどれもが必要不可欠な力と言える。早期段階で異文化を経験させ、自国を見直すことにより、困難な課題にも挑戦しようとする人材を、次世代リーダー育成道場をはじめとする留学制度の中から、一人でも多く輩出せることができれば、これからの東京や日本は必ず大きく変化するであろう。

東京都が平成24年度から開始したこの制度は、現在3期生を迎えるまさにグローバル人材育成を推進する制度である。現在の制度を活用しながら、他の制度も併用して留学を進め、多くの若者が視野を広げ、様々なジャンルの世界に挑戦しようとする姿勢を養成できることを願ってやまない。世界を相手に活躍できる人材を育成するために、「次世代」を一層活用し、志のある若者の育成するためにも、現在置かれている高等学校が果たす役割は大きい。

委員長 今井 啓介（目黒）記

3. 生徒指導研究部会

第1委員会（生活指導・進路指導）

I はじめに

スマートフォンの普及によって、モバイル化が進みパソコンが単なるパーソナルな存在というだけでなく、どこでも使える存在になってしまった。まずは、現状を俯瞰し、各学校での取組状況を見てみることにした。現状については、毎年東京都教育庁が発行している「インターネット・携帯電話利用に関する実態調査報告書」から抜粋し、各学校での取組については中部Dチームの各学校からアンケート調査によってデータを集めた。

II 現状について

「インターネット・携帯電話利用に関する実態調査報告書」東京都教育庁のデータ（平成25年度概要版）から

- 1 高校生のスマートフォン所有率は83.3%。
- 2 利用する携帯サイトやアプリの種類は次のようにであった。動画・音楽71.5%、SNS無料電話アプリ64.3%、ゲーム・オンラインゲーム55.1%、SNSコミュニケーションサイト48.5%、地図・交通47.3%
- 3 パソコンや携帯電話、スマートフォンを使用してトラブルや嫌な思いをした経験割合は、小学校7%、中学校18%、高等学校22%。
- 4 東京都教育委員会が、学校非公式サイト等を監視していることの認知度（平成24年度）は、高等学校31.3%であった。

III 中部D地区での状況

1 調査方法

平成26年6月18日から6月27日にかけて、中部D地区の都立高等学校全日制の副校長に、T A I M Sを使用してアンケートの依頼及び回収を行った。回答率は82.4%であった。

2 調査結果及び分析

- (1) S N Sへの書き込みで生徒への指導を行った件数は平均4件
- (2) S N Sへの書き込みや携帯電話・スマートフォン等の使用で普段から指導している内容は次の通り。H Rで指導・注意。全校

集会、学年集会などで注意。注意喚起の掲示物を教室や廊下に掲示。警察等からのパンフレットを配布。

(3) 学校での携帯電話に関する規則は次の通り。授業中は使用禁止。授業中に出したら一時預かり、放課後返却。授業中は2回目の注意で一時預かり放課後返却。教室への持ち込み禁止。授業中は電源をO F Fにして鞄にしまう。

(4) 携帯電話やS N S、ネット利用に関するセーフティ教室について

- ①外部講師を呼んでいる（14校）
- ②外部講師の所属、肩書は、警察関係（7校）、NT T（2校）、グリー、S M B C、eネットキャラバン、情報処理推進機構など。社会貢献の一環として無料で講師を派遣してくれる民間企業が増えてきている。

(5) 情報科について

①情報科目の設置学年は、1年12校、2年1校、3年1校であった。インターネットを日常の中で利用する生徒が増加している状況を考えると、1年生で設置して早いうちに正しく理解させることが大切である。

②情報科で教える内容の情報モラル教育としての貢献度は、とても貢献している4校、まあまあ貢献している7校、どちらとも言えない2校、あまり貢献していない1校、ほとんど貢献していない0校であった。肯定的に捉えている学校が11校（79%）。

(6) 携帯電話・スマートフォンあるいはS N Sなどの書き込みに関して学校で指導上困っていることとして次のようなことがあげられていた。罪悪感のない生徒に対する指導内容。生徒のネット利用状況を把握仕切っていない。ネットの危険性についての意識が希薄な生徒や保護者に危険性を認識させること。指導しても浸透しない生徒や協力を十分に得られない保護者の生徒への指導。閉ざされた世界での出来事の発見が難しいこと。ネットで安易に書き込むことの危険性をどうやって理解させ抑制するかが直面している課題であることが分かる。

(7) 今後、必要な取組

ネット依存症への対応。ネットへ軽い気持ちで書き込む生徒への指導。入学直後か

らの繰り返しの指導。事あるごとに学年集会やHRで注意喚起を促し続けること。ネット利用のためにかなりの時間が割かれているという事実を理解させ、無駄な使用をやめさせる。相談窓口の提供。具体的なトラブル事例紹介による指導。家庭と連携した指導。情報モラルをはじめとした注意喚起や意識啓発を粘り強く継続的に指導していくことが必要である。また、ネットを利用しすぎることによる弊害についての対策も講じていかなければいけない。さらに、学校だけでなく家庭や関係機関との連携が必要である。

IV 考察

- (1) 教科「情報」では、「社会と情報」、「情報の科学」いずれの学習指導においても、情報モラルやネットワークを理解する内容が含まれている。また、アンケートからは、学校での情報モラル教育に教科「情報」の授業が貢献していることが分かる。これらの学校では1年の教育課程に設置している。さらに、「情報」で学習した内容を校内で共有し、HRや他教科で活用できるようにすることで、情報モラル教育の効果が高まることが考えられる。
- (2) 高校生のスマートフォンの所有率は管理職よりもはるかに高く、教員の所有率よりも高い可能性がある。また、管理職や教員の方が生徒よりSNSを使っていないと思われる。したがって、生徒がネット利用によるトラブルを起こしたり、トラブルに巻き込まれた時、学校での対応で苦慮することが考えられる。東京都において、教員、保護者向けのSNS理解のための研修会を学校単位で開催し、子供へのネット利用に関する指導の充実を図る必要がある。
- (3) SNS等での書き込みや画像のアップに関する生徒指導では、今までに無かった事例であり、各学校で指導方法や指導内容に苦慮している。指導事例の共有を生徒指導主任研修会等で行い、各学校に還元できるようにした方がよい。
- (4) 平成24年度のデータからは、学校非公式サイトの監視を東京都教育委員会が行っていることを知る高校生は約3割しかいない。

生徒たちにHR、学年集会、全校集会などで注意喚起を行う際は、監視結果の事例を活用し、見られているという意識をもたせることで不適切な書き込みや画像アップの抑止につながる。

- (5) 厚生労働省の調査によれば、ネット依存の疑いが強いとされた中高生が51万8千人にのぼり、今後、東京都全体でも、このネット依存対策を進めていく必要がある。

V 研究協議会での講師からの指導・講評

当日講師でいらした教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事、西牧豊実先生から指導助言をいただいた。

- (1) 東京都教育委員会による学校非公式サイト等の監視業務において、平成25年度は学校非公式サイト等が検出された学校数は減少したが、書き込み内容の緊急性・危険性のレベルが「中」については、平成24年度70件に対して、142件と倍増した。

(2) 教員の指導方法の研修について

平成17年度に東京都教職員研修センターは「メディアSOSガイドブック」を策定し、参考となる指導計画・指導事例集・指導案や情報モラルサイト、指導に協力してくれる団体などを紹介している。

(3) 保護者や地域・関係諸機関との連携

学校は、生徒を被害者にも加害者にもさせないという強い思いをもち、生徒と共に学ぶ仕組みを考え、あらゆる場面で生徒たちが社会の一員としてルールを守っていくことが実感できるようお取組みください。

(4) ネット依存対策

平成26年7月18日に総務省情報通信政策研究所から「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書」が公表されている。高校生のスマートフォンやソーシャルメディアの利用実態に加え、ソーシャルメディア毎の利用時間と依存傾向などが報告されている。この依存的傾向は、当然のことながら学力に影響している。「平成25年度インターネット等の適正な利用に関する指導事例集・活用の手引き」を活用して実態把握に努めてください。

委員長 山下 一郎（光丘）記

第2委員会（教科以外の教育指導）

研究テーマ

「特別指導の運用と副校長の役割について」

I 目的

生徒の問題行動の中には、喫煙やバイク登校など、生活指導部からの注意にもかかわらず、繰り返し発生する問題行動がある。一方、暴力行為や傷害などの重篤な問題行動は、日々繰り返されるわけではないが、学校の対応が求められる事例である。

各校で生徒の実態が異なる中で、各校の特別指導の状況の中から共通点を見出し、課題を共有する。また、日常的には発生するとは想定されない問題行動について学校がどのように対応すべきかを考え、特別指導の運用における中で副校長の受け持つ役割を検討する。

II アンケート項目について

- 1 特別指導期間の欠席の取扱いや、定期考查の得点等の扱いなど
- 2 交通安全に係る指導との関係（自転車の傘差し運転について）
- 3 ダブルペナルティを課さない場合の事例研究について

集計については特別指導の発生件数によって必要に応じて3グループに分類して集計し、共通点やグループごとの特徴を分析する。

III 特別指導の年間指導件数について

- | | |
|-----------|----------|
| 1 50件以上 | 0校 |
| 2 5件から49件 | 9校 (G1) |
| 3 4件以下 | 10校 (G2) |

今回の調査では、年間指導件数を5件から49件（以後G1と表記）と、4件以下（以後G2と表記）に二分された。

以後、年間指導件数の多い学校G1と少ない学校G2に分けて集計を行った。

IV 特別指導に関する集計結果

- (1) 特別指導期間の出席簿上の取扱いについて（複数選択可）

		G1	G2
1	欠席	3	0
2	欠席だが、学年末に進級や卒業に関わる場合は、別途検討する余地を残している。	6	5
3	学校で特別指導する場合は、出席扱い。	1	1
4	学校で特別指導する場合は、授業は欠課、出席簿上は出席で取り扱う。	2	4

(2) 特別指導を実施する場所について

		G1	G2
1	家庭	6	4
2	学校	3	5
3	併用	0	1

(2-1) 家庭の状況から自宅で課題を実施することが困難な場合の対応について

		G1	G2
1	登校させる	4	7
2	自宅で反省させる	0	0

(2-2) 対象の生徒が多い場合、同時に指導できる部屋数について

		G1	G2
1	3室まで	6	4
2	5室まで	1	2

ここまで、G1、G2の各校の傾向に大きな差ではなく、家庭の状況に応じた登校指導などの面で各校が工夫をしていることがうかがえた。

(3) 特別指導に関する生徒個々の対応を最初に検討する校務分掌について

		G1	G2
1	生活指導部、生徒指導部など、生活指導を担当する分掌	6	5
2	上記の分掌の特別指導担当と学年の生活指導担当を含む生活指導のための委員会	3	5

(4) 特別指導の期間の目途について（喫煙やバイク登校などの案件による）

		G1	G2
1	決まっている	9	9
2	期間に関する規定はなく、その都度検討する	0	0

「前歴はなく、生徒自身が喫煙し同席ではない」場合、最短の日数は7日が多数を占めた。

(5) 特別指導が2回目以降の場合の指導期間を長く設定する仕組の有無について

		G1	G2
1	ある	9	8
2	ない	0	1
3	その他	0	1

(6) 特別指導の期間が定期考查と重なった際の扱いについて

事例：特別指導は3日間、最終日が定期考查に重なった場合。

		G1	G2
1	定期考查1日目は欠席。特別指導終了後、定期考查の2日目から受験させる。	4	1
2	定期考查期間は普通に出席し、考查を受ける。考查の翌日を特別指導の3日目とする。	1	0
3	その他	3	7

その他では、別室で受験する取り扱いについて多数の事例があった。

(7) 定期考查で不正行為があった場合の得点の取扱について

		G1	G2
1	1科目でも不正行為があった場合は全科目0点とし、不正行為後の科目は受験できない。	5	5
2	不正行為のあった科目は0点、その直前の考查まで得点は有效、不正行為後の科目は受験できない。	0	0
3	不正行為のあった科目のみ0点、その他の考查はすべて受験するが得点の取り扱いは一定の規定がある。	3	2
4	その他	0	1

その他：別室受験の場合や得点が0点になる場合など、いくつかの事例があった。

(8) 自転車通学の生徒が雨天に傘差し運転で登校した場合の取扱について

		G1	G2
1	道路交通法違反なので特別指導している	0	0
2	その場で注意するに留めている。傘差し運転でも登校は可能。	7	5
3	特別指導はしないが、傘差し運転の自転車通学者は、敷地内には入れない。	0	0
4	その他	2	3

その他：道路交通法の改訂の後の対応については、日常的な指導の中で各校における工夫・努力の状況がうかがえた。

(9) 重篤な犯罪のため、警察や裁判所に関わる案件の規定の有無と取扱いについて

		G1	G2
1	ある。社会的に制裁を受けることが明らかな場合は、逮捕や、補導の日まで平常通り登校させる。	0	1
2	ある。社会的に制裁を受けることが明らかでも、校内で説論は実施する。	1	2
3	ある。社会的に制裁を受けることが明らかでも、校内で特別指導を実施する。	3	0
4	ない。ダブルペナルティに関する案件は状況を総合的に判断し、適切な指導を行う。	5	5

ダブルペナルティに関する案件は状況を総合的に判断して適切な指導法を決定する学校が多いことが分かった。副校长のリーダーシップが求められる場面といえる。

(8) までの対応は学校で規定が整備されている例が多いが、深刻な事故、犯罪に関わるケースは、生徒個々の環境に配慮しながら、管理職の判断の下、指導を実施する体制をとっていることが分かった。

V まとめ

各校の回答から、下記の2点が共通点であった。

- 繰り返し発生する問題行動に対する生活指導については、ほぼ決まった対応が定まっており、発生の都度対応策を検討することなく教員が対応できる体制が構築されている。
- 日常的には発生するとは想定されない事例では、対応を検討する際に方針を管理職から明示することで、学校の対応が定まる。

特別指導が頻繁に発生しているかどうかによらず、普段想定していなかった事例が発生した場合には、副校长による舵取りが、適切な特別指導を実施する上で重要であると考えられる。

VI 謝辞

生活指導を考える上で各校が生徒の状況を鑑み、真摯に対応していることがうかがえる結果となりました。今後の各校の発展を祈念いたします。

御協力いただいた方には、貴重な時間をこの事例研究のためにいただいたことを、書面を借りて感謝申し上げます。

委員長 室岡 誠一（府中東）記

7. 退任者の声

退職に思う

藤井 英一（両国）

60年前の昭和29年（1954）は、洞爺丸台風来襲、第五福竜丸ビキニ環礁で被爆、「ゴジラ」、「二十四の瞳」、「七人の侍」、「ローマの休日」等今となっては懐かしい映画が上映された年でもある。ようやく戦後が少し落ち着き、高度成長経済期へと世の中は向かおうとしていた頃だろう。

教員になったのは、昭和53年。当時の都立高校は当然ながら今とはだいぶ違っていた。教員の異動要綱はまだなく、その学校に20年以上という長老がいたり、入試は本務ではなく、その日は別に手当が出ていたのを思い出す。その頃、都立高校が学校説明会を実施したり、中学校訪問をしようとは、夢にも思っていなかった。週一日研修日があり、教材研究だけでなく、教科の専門性を高める上では本当にありがたい制度だった。今思えば、当時はのどかな時代だった。当時と比べて現在の都立高校は忙しく、大きく変わったという観がある。

私は、地学の教員として世田谷の中堅校で10年、北区の高校でサッカーの全国大会を目指して7年、まだ新しい総合学科で開設準備以来、新しい学校づくりに燃えて10年を過ごした。

副校長としては、開校2年目の千代田区立九段中等教育学校に5月から勤め、その後同じ中高一貫教育校の両国に転任し、現在を迎えた。

今、退職を迎え思うことが幾つかある。一つ目は、東京の地学教育についてである。現在全日制175校中、地学の専任がいるのは僅か32校。近県に比べても少ない数字である。世の中で首都直下地震の危険が叫ばれ、近年の巨大台風や集中豪雨等による気象災害はいつ起こってもおかしくない。大災害に結びつくような自然現象の性質や原理をよく知っている方が、災害にも備えやすく、いざという時に助かる確率が高いのは当然である。我々の高校時代は、物化生地全てが必修であった。ぜひ、東京の地学教育の復活を望んでやまない。

二つ目は、公立中高一貫教育校の副校長とし

て切実に感じること。入学者選抜に関わる問題づくりや入選に関わる仕事量を何とかできないかということである。現任校は、中学適性検査問題、高校入試問題をグループ作成になったとはいえ、ほぼ1年がかりで作成し、推薦入試の小論文問題作成にも有り3ヶ月を費やす。3学期に至っては、入選関係作業がない日は学校として一日もないというより、高校の推薦入試の発表・手続きをしながら、中学適性検査の前日準備や本番を行うというのが現状である。現実的ではないかもしれないが、中高一貫教育校のみならず、都立高校全体の入試問題や作業を取り扱う、大学入試センターならぬ、都立高校入試センターを考えることはできないだろうか。今や中高一貫教育校の入選関係業務は教員、企画室共に限界に来ていると感じる。

思えば新卒以来37年間はあっという間であった。その間、自分の学校でのポジションは変わっても、これまで勤めたどの学校でも、職場の仲間や先生方に恵まれ大変幸せだった。ここまで全く後悔がなかったわけではないが、長きにわたり職業として迷うことのない場を与えていただいた東京都にも感謝したい。

会員の皆様の健康とご活躍を祈念しています。

退職を迎えて

中村 彰（葛西工業）

9年間3校の副校長を勤めました。生徒として工業高校に入学してから、途中1年間民間を経験した以外は全て工業高校でお世話になりました。副校長としての9年間3校もすべて工業高校でした。

1校目の王子工業は3年後に閉校が決まっており、毎年生徒も教員も少くなり、業務も縮小して行く中で、閉校への様々な準備に追われた3年間でした。最後の卒業生を送り、閉校式典を終わらせ。王子工業最後の日は、広い職員室には何もなく、パイプ椅子と床に置かれた電話があるだけの職員室に一人だけで居たことを

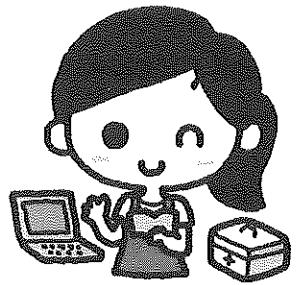
思い出します。

2校目は墨田工業の定時制課程でした。長い教職経験の中で、ここが初めての定時制の経験でした。長年、朝早く家を出る昼型の生活から、日付が変わる頃帰宅する夜型へ生活パターンが大きく変わり、定時制ならではの仕事もあり、仕事や体調が慣れるまで大変な思いをしました。しかも、墨田工業では異動した年に110周年という周年行事があり、何もわからないままに準備、全日制との調整に追われ、アットいう間の1年でした。そして、2年目の4月の終り頃朝方急に頭痛に見舞われ起きられなくなり、その後診断を受け入院が決まりました。入院も人生初めての経験でした。手術は免れましたが、3ヶ月ほどお休みを頂くことになり、校長先生を始め先生方にご迷惑をかけることになりました。このときは学校の組織力の大切さ、健康管理の大切さを痛感しました。復帰後もしばらく体調不良が続きました。そして、年度終りの3月11日に東日本大地震が起り、ここでも初めての経験の地震対応・帰宅困難者の受け入れなども経験しました。様々な後処理に追われ気づいてみれば1年が過ぎ次の異動となり、初めてづくし3年間でした。

3校目は葛西工業で全日制に戻りました。ここでも1年目に50周年の周年行事があり、周年行事の準備に追われながらのスタートとなりました。日々の職務に追われながら様々なことがありました。気づいてみれば3年がたってしまいました。葛西工業は私の母校であり、何か恩返しできればと思っていましたが、何も出来ないまま終わってしまいました。

今思えば、管理職へのスタートは工業高校の統廃合の話が出始めた頃、当時の校長先生から「工業科の教員の管理職の希望者がいない。こんなことで工業高校が残せるのか」の言葉で、自らの実力も考えないまま受験を始めました。その後も状況は厳しいものがあり工業高校は減っていました。1校でも多く残したいと色々な仕事もさせていただきました。しかし、結果的には何も出来なかった感じです。しかし、工業高校で学びたい生徒はいます。工業高校生を受け入れたい企業もあります。これからも工業高校が必要とされ、さらに発展していくことを願っています。

長い間お世話になりました。ありがとうございました。会員の皆様のご健康とご活躍をお祈りします。



8. 転任者の声

それぞれのミッションを果たすために

山田 溫（江北）

今年度、4年間在任した一橋高校（昼夜間三部定時制）から異動してまいりました。一橋高校は通信制課程も併置しており、施設的には都心の小規模な学校ながら、合計の生徒定数は約1400を超える「マンモス校」でもありました。定時制は、午前部（各学年3クラス）・昼間部（同3クラス）・夜間部（同2クラス）の三部から成り、単位制ながら進級規定のある学年制も取り込んだ、複雑な仕組みの学校で、着任当時は恥ずかしながらその仕組みの理解に苦しました。

入学選抜も分割前期で4割、後期で6割の生徒を募集し、「多様な生徒を受け入れる」ミッションを持つ新しいタイプの学校として約10年前にスタートしました。自分の所属する部以外の他部履修もできる、大学のような「単位制」ですが、入学してくる生徒の大半は、2年次・3年次になっても自分自身のカリキュラムを作ることができず、いわゆる「受講指導」に教員が苦心しています。入学当初から不登校気味の生徒、特別指導の対象となる生徒、外国籍の生徒、保護者ともなかなか連絡が取れない生徒なども少なくありませんが、教員は生徒一人ひとりに向き合い、学習指導・生活指導・進路指導に実に熱心に取り組んでいます。朝から勤務する教員と昼から勤務する教員が約半々で、一つの学校が実質的に三つの学校に分かれ、組織的な学校運営が難しい中、短時間でも毎日、各分掌・学年会の時間を確保し情報共有・意思疎通を図る体制を構築することが使命と考え、実現に向け尽力しました。入学して卒業に至る生徒は約半数で、退学率の高さが毎年の課題であり、解決に向けた地道な取組・手立ての成果を、異動した者として期待しています。

異動してきた江北高校は、足立区の中での伝統校として、進学校復活のミッション（「進学指導推進校・アドバンス高」として指定）達成のために多彩な取り組みをしています。朝学習・週末課題、現2年生からの特進クラス（8クラス中2クラス）の設置、土曜講習・長期休業中の講習の充実、進路講演会の実施等、上位層を伸ばしながら全体的な底上げを図り進学実績向上を目指した多様な指導を繰り広げています。

生徒は、駿台予備校と連携したサテネット（オンラインデマンド教室）の19時までの格安利用も可能です。生徒の家庭学習時間が絶対的に少ない課題解決に向け、教員一人ひとりは最大限に取り組んでいますが、取組の成果検証がなされず、いわゆるP D C Aが今一步機能していない状況打破に向け、各職層や分掌主任・教科主任等に働きかけ、組織的な対応を図る校内体制強化に向け、管理職としても知恵を絞り、日々取り組んでいます。校長の経営計画には、学力と共に「人間力」育成も掲げられ、知・徳・体のバランスの取れた将来の社会を担う人材育成を目指し、きめ細かい生活指導や計画的な部活動指導等を実践しています。

足立区は、学区制の撤廃後、高校受験生が都心の学校に流れる傾向が続いている、応募倍率が低迷し、募集対策にも苦心しております。本校は28年度途中から校舎の全面改築が予定され、完成までの数か年は、更なる対策が迫られます。踏ん張りどころと覚悟し、取り組んでいく所存です。皆様、どうぞ宜しくお願ひ致します。

大きく変わりました

平塚 浩司（広尾）

よろしくお願ひいたします。今年度3年半お世話になった足立高校定時制から異動してまいりました。

前任校は、1学年あたり普通科3、商業科1クラスで全校16クラスの大規模夜間定時制高校です。そこには、多種多様の生徒が在籍し、普通の日常生活では経験できないことを経験し勉強させていただきました。還暦を過ぎ豊富な人生経験をもつ方からは人生訓を、外国籍の生徒からは生活様式や文化を学ぶことができました。また、家庭環境に恵まれず懸命に自分を支えている生徒を支援する教職員の姿も見られま

した。一方で、基本的生活習慣が確立されておらず問題行動に走る生徒も少なからず居りました。このような状況で私は、教職員一人一人がその持てる力を存分に發揮できる環境づくりが大切と感じておりました。

さて、ここからは今後のことをお話ししなければならないのですが、余談を少々させていただきます。“足立高校における猫との戦い”です。足立高校には 20 匹近くの猫が住んでいます。“やつら”は、和歌山電鐵貴志駅の“たま駅長”（ちょっとマニアック）とは大違います。こちらに隙あらば何時でも校舎に侵入しようと虎視眈々と日夜様子を窺がっています。斥候を立てその 1 匹が侵入に成功すれば、それに続いて続々と侵入してきます。一度侵入を許してしまうとさあ大変、大捕り物の始まりです。手の空いている教員が、T 簿を持って廊下の隅に追い立てます。やつらは素早く隠れたり、逃げ回ります。中には 3 階の窓から飛び降りるものも出る始末。ようやく大捕り物が終わるころに教員は、汗だくでへとへとに疲れてしまいます。そして安心して帰宅すると、午前 2 時 3 時に警備会社からモーニングコール（早すぎ）です。校舎に侵入者です、警察にも通報しました。原因はどこかに隠れていた猫です・・・。こんなことが繰り返された結果？やつらは、私の姿を目につくとそそくさと立ち去るようになりました。

では、今のことをお話しします。広尾高校は、1 学年 5 クラス全校で 15 クラスの小規模校です。夜間定時制から異動して、学校規模が縮小するとは驚きです。当然予算も少なく（前任校の半分程度）やりくりが大変です。敷地も小さく駐輪場も狭いのですが、お陰様で人気校なので生徒が 23 区すべての区から集まっているので、自転車登校が極僅かで助かります。今本校は、進学校を目指しています。それも、推薦により進学した卒業生の状況を追跡調査した結果、ただ大学に進学すれば良いではなく、推薦ではなく一般入試による大学進学を目指しています。生徒が、確かな学力を身に着け、実力で希望する大学合格の栄誉を勝ち取る、これが目標です。

そのためにできることを、それを教職員一段となって日々取り組んでおります。今後も、ご

指導やご助言をお願いいたします。

なお、猫との戦いはもうありません。

中高一貫教育校繁忙記

清水智之（白鷗高校）

3 年間の定時制生活を終え、中高一貫教育校に戻りました。江北高校定時制時代には大変お世話になりました。ありがとうございました。

3 年ぶりの中高一貫校ですが、勿論別の学校ですので分からぬ事だらけの毎日です。（過去形にならないことが何かを物語っておりますが。）定時制勤務の 3 年間では全日制では経験できないような様々な体験をすることができ、色々な意味で勉強になったと感じています。今思い返すと、日々「又ですか。」と言うほど色々なことが勃発する時期があったように思います。

一方、本校に着任してみると、生徒や教員の数が多いことに驚き、その対応で天手古舞。附属中学・高等学校合わせて 30 クラス、教員数約 90 名、さらに、最もやっかいな「東」「西」の二つ校舎があること。勿論副校長は二人ですが、とにかく忙しいような気がしていました。（決して今楽なわけではありませんが、少しは慣れたかもしれません。）その一端を示します。

- 1 中高一貫教育校のパイロット校として他県からの問い合わせや先進校訪問対応。
- 2 浅草という土地柄からくる地域と連携しての祭りや行事（流鏑馬、鳥越祭、灯籠流、餅つき）などなど。
- 3 伝統校の常である、活発な P T A 活動とその O B 会や後援会活動との連携行事。
- 4 上野・浅草地区の観光協会との連携行事でモノマチ、東京時代祭、フロアバレーなど。
- 5 授業力向上のための外部コンサルティング事業参加や各種の研修会。

如何でしょうか、本校に転任してきて初めてやることの多いこと多いこと、涉外活動が多く本業が疎かに・・・。ならないよう努力していますが。勿論、一貫校として生徒の自己実現に努めるための様々な取り組みも行っていますが、結構暇なしです。

如何でしょうか、一貫校は大変だと宣伝するつもりはありません。その大変さを上回る楽しみがあるのも事実です。中学生が高校生になり変わっていく様子はまさしく我が子を見守るような錯覚に見舞われることもあります。高等学校の先生は中学生を教える事についてどうお考えでしょうか、「手が掛かる」「面倒そう」「理解できるだろうか」などなどでしょうか、実は一貫校でそのようなことは（ほとんど）ありません。しかし、生活指導をきちんと行うことが求められ、自分で判断しなさい、ということが当初できないことはあります。が、初めにきちんと指導してしまえば後6年間は緩めない限り大丈夫ですので安心してください。

ただし、中高一貫校に求められるものは多く、生徒本人やその保護者、また教育委員会からも多くのことを望まれながらの毎日ですので、非常にやり甲斐のある職場であると思います。皆さんも大変だと考えずに、楽しむつもりで中高一貫校を希望して下さい。新たな発見と生徒の吸収力に驚くことと思います。タイトルに“繁忙記”と書きましたが、本当に忙しいのは教員でなく生徒だと思います。多くの体験や学習を次々にこなしていく生徒の力に脱帽です。このまま自己実現に結びつけるために、校長初め職員一丸となって進んでいきたいと考えています。

こんな毎日を送っております。是非これからも様々なことについてご指導、ご助言を頂くことが多いと思いますが、懲りずに宜しくお願ひいたします。

高校に戻って

稻葉 久男（深川）

今年度、中央区立晴海中学校から異動してまいりました。晴海中学校では、3年間副校長の仕事をしてまいりました。中学校の前は、六郷工科高校で2年間副校長を務めました。2年間の高校での副校長の経験を活かして中学校で勤務しようと思いましたが、高校と中学校では、やはり勝手が違いました。生徒や保護者、地域の方々とも近い関係で接することが多く、地元の警察や消防の方とも顔なじみになりました。

区の教育委員会とも密に連絡をとり、小学校や幼稚園の先生方とも気軽に話せる関係となりました。中学校から見た高校は、今までわからなかつたことが見え、視野が広がりました。また、高校の情報も中学校に提供して役立ててもらいました。もっと早い時期に経験するとよかったです。3年間の中学校の副校長の経験をもとに高校に戻ってまいりました。

高校に戻ってみると、この3年間にいろいろな面で状況が変化していました。パソコンの利用からネットワークの利用について、セキュリティが強化され、安全性が高まった反面利用しづらい環境にもなりました。3年前の経験を思い出しながら務めていますが、仕事に追われる状況です。

今の職場では、教員に異動する前の16年の行政職の経験、特に勤務や服務、予算について、非常に役に立っています。また、私の出身高校の後輩が2名勤務していて、さらに以前務めた学校で一緒に仕事をした教員も多くおり、助かっています。地元の高校ということもあり、いろいろな面で勤務しやすい環境となっています。しかし、仕事量は多く、体力や知力、気力の衰えもあり、無理はしないように、休みを計画的にとるように心がけています。分からぬこと、記憶が曖昧なことは確認しながら行っています。そのため、時間もかかってしまいます。

定年まであとわずかとなりました。残された勤務もあと少し。少しでも生徒のために、よりよい環境で高校生活が送れ、大切なことを学んでもらえるように、微力ながらも努力していきたいと思います。これからもアドバイスをよろしくお願いします。

異校種経験

平田 誠一（富士附属中）

私は高校籍として入都しましたが、副校長に昇任してからは異校種勤務の連続です。

最初に配置されたのは、城北特別支援学校です。それまで車イスを押した経験がない私が、肢体不自由校で管理職を務めることになるとは、まさに青天の霹靂でした。小学部と中学部を任せられ、義務教育に携わるのも初めてなのに、

教育課程が「準ずる・知的代替・自立活動」と3種類もある上、聞いたこともない専門用語が飛び交い、出勤初日は本当に頭の中が真っ白になりました。しかし、一人一人の児童・生徒の障害について正しく理解し、寄り添った対応ができなければ保護者からの信頼は得られないで、少しでも肢体不自由教育の専門性を身に付けようと必死でした。そんな私が何とか3年間勤め上げることができたのは、「命を大切にし、輝いて生きる」児童・生徒達のおかげです。その純粋な姿に接していると、毎日が魂の洗濯をしてもらう思いでした。

二校目は江戸川区立鹿本中学校に配置されました。前述のとおり、区立中の勤務経験もありませんでしたので、この配置にも戸惑いはありました。何よりも驚かされたのは、同じ副校长職とは思えないほどの仕事の性質や中身の違いです。経営企画室は存在せず、事務室には嘱託と区職非常勤の2名しかいないため、お金の執行にかかる仕事以外（電話の応対、出勤簿・年休簿等の整理、施設の修繕や開放事業の対応…等）は、全て副校长に任せられています。また、教員定数が少ないためか分掌組織も未成熟で、隙間の仕事は殆ど副校长に降りかかってきます。事務や雑務に割かれる時間が膨大な上、休日・夜間を問わず地域との付き合いも頻繁にあり、プライベートもかなり制限をうけました。しかし、職員室は家族的で、チームワークは抜群によく、学校行事や部活指導で生徒と一緒に汗を流す中学校の教員の情熱的な姿には胸を打たれるものがありました。

そして現在、今年度から富士高等学校附属中学校で勤務しています。中高一貫教育校として都民の期待を一身に背負い、大変やりがいのある職場ですが、都立中学校の職務も未知な部分が多い上、副校长連絡会やTAIMSから3年間隔離された代償は大きく、未だに「浦島太郎状態」が続いている。

副校长として多様な校種を渡り歩いたことは、管理職としての引き出しや人脈を増やす上では貴重な経験でしたが、未だに高校の副校长経験がないことが大きな不安です。今後も皆様のご支援を頂きながら、自身の資質向上に努めていきたいと思いますので、よろしくお願ひ致します。

全日制課程へ転任して

佐々木 義文（大山）

平成26年4月に一橋高等学校通信制課程から大山高等学校全日制課程へ異動になりました。一橋高等学校で3年間副校長を務めましたが、通信制課程のことが分からず、悪戦苦闘の毎日でした。それでも、2年目からだんだん状況が分かるようになり、何とか副校长の業務もこなせるようになりました。通信制の都立高校は3校しかなく、他2校の副校长とはよく情報交換をしてきました。全通研という団体の全国大会にも毎年参加する機会に恵まれ、他府県の通信制の現状も知ることができました。学校数が少なかったこともあり、密度の濃い人間関係を築くことができたと思います。

このたび大山高校の全日制課程の副校长を経験して感じたことは、事務的な作業量が多いということでした。以前より教員の人数が多くいため、その分手間があり、すんなり仕事が進まないことが多いと感じています。ある程度、分かっていたことでしたが、あらためて大変だと感じています。

職場は、年齢の若い教員が多く、新規採用が4名、2年次が5名、3年次が2名で、30歳代以下の教員が職場の約半数を占めています。そのため、活気がありとても明るく雰囲気の良い職場だと思っています。若い教員どうしで助け合ったり、教え合ったり、余暇を過ごしたりしていますので、その後の教員人生を考えても、有意義で思い出に残る職場になるはずだと思います。自分も若手教員のはつらつとした姿勢を見習い、初心に帰って、もう一度自分を見直すことができました。

本校の生徒も明るく素直で、とても純朴だと感じています。頭髪・服装指導にも素直に従い、体育祭や文化祭等の学校行事も一生懸命取り組んでいます。ただ、部活動に参加する生徒が少し少ないように思います。しかし、掃除等もきちんと行うので、校舎は非常にきれいだと思います。生徒は自分自身のことを知っており、教員を冷静な目で見ているように感じます。

副校长になってから、生徒を指導する教育現場から離れ、事務的な仕事に携わることが多く、もう一度、教壇に立つことがあるのかなと

考えることが多くなりました。現在は、生徒に教えるのではなく、先生方に教えたり、訊いたり、対象が変わっただけだと、自分に言い聞かせて職務に励んでいます。とても忙しい日々が続いて余裕がないのですが、別な見方をすれば、充実した日々を送っていることになると思います。これからもどうかよろしくお願ひいたします。

全日制課程に転任して

宮澤 良光（富士森）

3年間の夜間定時制課程の勤務を経て、4月より本校に勤務することとなった。前任校は、4クラスで生徒数80名程、教員も9名と最小規模の学校であった。にもかかわらず問題行動は多く、生徒指導はいたちごっことなり、地域の方々には多大な御迷惑をかけてしまった。この様な生活を過ごした学校から、73年の伝統ある本校に着任した。

本校は、3年連続の学級増により24学級、生徒数950名を超える、教員も50名と大規模校であり、来年度は学級減になるが25学級となる。3月の引継ぎ時に前副校長から、「仕事量は多く、忙しい学校です。」と伺った。私は、生徒と教員が多いのだからと、今思えば安易な気持ちで、この言葉を受け止めて4月を迎えた。

現実は厳しく、絶えず対応が迫られ、思っていた以上に大変であった。まず朝が早く帰りも遅いので睡眠時間が短くなり、体調がさえず、睡魔が昼過ぎに毎日のように襲ってくる。そして仕事量も当然増え、服務処理も1日に2～3回の大きな波が来る。教員とのコミュニケーションを図ることや、生徒・保護者・PTA役員・同窓会、地域の方々、関係機関など多くの方々との対応が必要であった。それ以上に、富士森風土への認識を受け止めるのに時間がかかってしまった。そのため、疑問に感じるところを直接伝えたことで、人間関係を築くことに時間がかかる結果となってしまったこともあった。おかしい、何で？と幾度となく思ったことがあったが、教員をまとめ、生徒のために尽力し、保護者・同窓会の期待に応え、地域と連携・協力していくことが本校の使命であり、私の仕事で

もあると思い続けている。新年を迎えた今でも、考えさせられることが多い、1年を経験していく中で、来年度に向けて変えていく方策を考えている。

本校は土曜授業が年間18回、月平均で2回あり、学力の向上はもちろんのこと短期留学生の受け入れ等を通して国際理解教育を推進し、生徒のグローバルマインドを育成することに向けて取り組んでいる。その取り組みの一環として、1月にオーストラリアの某シニアハイスクールの生徒10名と交流を行い、7名の学生をホームステイとして受け入れ、およそ1週間の交流を行った。この期間は、本校の授業への参加と日本の異文化理解を深めるため、近隣の都立高校にも協力を得て、伝統・文化を体験する機会を設けた。別れの時は、生徒・保護者、そして交流生も涙、涙。。。でした。本校生徒だけでなく交流生にとっても意義のある交流となつたはずです。

今後は、本校の良きところを伸ばし、足りないところを補い、改善に取組むことで発展に尽力していきます。

全日制普通科高校に転任して

角本 芳樹（片倉）

3年間お世話になった世田谷泉高校（3部制・単位制・総合学科のチャレンジスクール）から転任してまいりました。

世田谷泉高校は、小中学校で長期間の不登校を経験してきた者を対象とした新しいタイプの高校です。生徒は朝から学ぶ一部、昼から学ぶ二部と夕方から学ぶ三部に分かれています。一方教員は、朝からのA勤務と午後からのB勤務の2グループに分かれています。朝から夜まで授業が続くので放課後がなく、職員会議や各種の会議は全員が揃う時間を確保することができません。先生方は、A勤務とB勤務の両方が揃う午後の時間帯に情報を共有し、指導に当たります。このように学校のシステムが複雑なうえに、小中学校での学習が不十分な生徒が多いため、多くの科目が習熟度別や少人数の授業で展開しています。そして体験的な学習を重視する観点から、多様な学校設定科目が設置されてお

り、それらを担当するために芸術・家庭・工業の3科に6人ずつ教員が配置されています。それでも教員が足りず、時間講師は20名以上、市民講師も10名以上在籍していました。そして何よりも入学してくる生徒の多くが、様々な背景のもとで深刻な課題を抱えています。引き継ぎの際に、「創立以来10年間で5人の生徒が自死しているので、覚悟しておいてください。」と言われ衝撃を受けたことを覚えています。そのため私の副校長としての最優先課題は、『生徒を自死させないこと』となりました。具体的に取り組んだことは、生徒の状況変化に関する情報をいち早く関係する教職員で共有し、家庭のみならず、病院（主に精神科）や児童相談所、子ども家庭支援センター等の外部機関とも緊密な連携を取りながら対応することでした。担任団や養護教諭、特別支援教育コーディネーターとは何度もケース会議を開きました。それぞれの先生方が、生徒本人や外部機関との連絡・調整に迅速に対応していただいたおかげで、幸いにも私が勤務した3年間では自死をした生徒は出ませんでした。異動した今でも、自死ゼロの期間が長く続くことを祈っています。

こうした独特な高校から全日制普通科の高校に異動して、現在もチャレンジスクールで奮闘されている先生方には申し訳ありませんが、まずはホッとしたというのが正直な感想です。休み時間や放課後に校内に響く生徒の元気な声を聞き、懐かしく感じました。

片倉高校は毎年のように全国コンクールに進出する吹奏楽部を筆頭に、部活動が非常に盛んな中堅校です。今年度は吹奏楽部が全国コンクールで金賞を獲得し、陸上部の女子走り高跳びがインターハイで全国6位となりました。陸上部の男子では関東大会へ進出した者も3名います。また卓球部の男子もシングルスでインターハイへ出場しました。その他でも都立高校では珍しいアメリカンフットボール部や女子ラクロス部、なぎなた部が活動し、硬式野球部とサッカー部は70名以上の部員を抱え、毎日厳しい練習に取り組んでいます。さらに本校には造形美術コースがありますが、コースの生徒達の多くが、放課後や土日に登校して各自の作品制作に取り組んでいます。とにかく休みの日でもたくさんの生徒が校内で活動している高校で

す。

このようにパワフルに活動する生徒達が、今後も生き生きとした高校生活が送れるよう、校長や企画室、先生方と協力して片倉高校を支えていきたいと考えています。引き続きご指導のほど、よろしくお願ひいたします。

農業高校へ赴任して

神谷 晶平（農業）

3年間お世話になった青梅総合高校の定時制から、農業高校全日制に着任しました。1学科から5学科となり、生徒数も約260人から約530人と2倍で、教員数も26人から講師、市民講師を入れて90人近くになり大所帯の学校です。当初は顔と名前がわからず名前を聞いて歩いていました。また、教育課程の様式2は30ページもあり、厚生労働省の調理師養成施設にともなう27年度からスタートする調理師免許の新カリキュラムを学んだりして仕事量が激変しました。ただ、生活指導や保護者対応、給食費・生徒積立金対応の仕事は減りました。

農業高校へ来て驚いたことは、底冷えがなくなったことです。冬はYシャツの下に何枚も着ても寒かったのですが、こちらはあまり気にしたことはありません。また、校舎から富士山とスカイツリーが見えることにも驚きました。残念なこともあります。定時制職員室脇の非常階段から見える新緑や紅葉の山々や夕日に染まる山々、月明りに照らされる美しい山がすぐそばで見られなくなったことです。仕事環境はどちらの学校も緑が多く、教員にも恵まれ心おだやかに過ごすことが出来ています。

さて、定時制、全日制で働きましたが、どちらで仕事をしても人ととのつながりが大事だと思っています。ルールやシステムを覚えておくことは大事ですが、大切なことは、人とのつながりや人づくりで学校が変わっていくを感じています。また、どちらの学校でも、教員や校長先生、企画室長、企画室職員、技能主事さんからいろいろなことを教えられ、助けていただきました。助けがあったからこそ、学校は少しずつ変わっていきました。このように、教えられたり、教えたりしていくつながりを大事にし

たいものだと思いました。

ある教員に〈知っている神谷さんはいつも笑っていたのに、笑わなくなってきたているよ。〉と言われ、はっとしました。

見ている教員が多いのだなと思い、その後は忙しくても笑うようにしています。

副校长は、教員と一番接触しているので、雰囲気作りも大切だと改めて思いました。

伝統は大事に受け継いでいくものですが、伝統だけでは時代にあった教育は出来ないと思います。

秋留台高校に赴任して

杉浦 昭彦（秋留台）

3年間お世話になりました農芸高校（定時制）から秋留台高校への異動が決まり、昨年3月末に初めて東秋留駅（JR五日市線）に降りました。駅周辺の長閑な風景に気持ちが和み、四月には桜並木を通って学校へ行く日々に心が洗われるようでした。定時制からの異動のため、4月当初は朝の早さに意識が朦朧としていた時もありましたが、毎朝駅前で登校指導を行うことで徐々に慣れていきました。

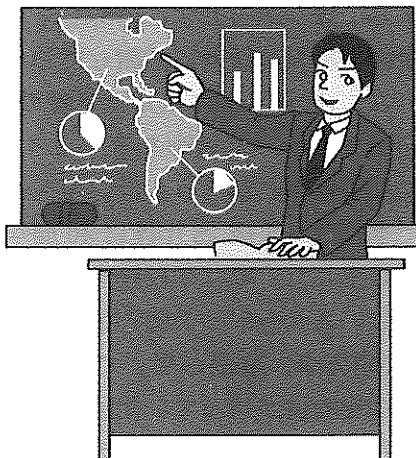
駅に立っていてまず感じたことは、大きな声で挨拶する生徒が非常に多いことです。立ち止まって丁寧に挨拶をする生徒、明るい笑顔で挨拶を交わしてくれる生徒がいます。その姿に朝から元気な挨拶の出来る生徒の、心身ともに健康な状態を感じることが出来ます。時には地域の方から苦情をいただくこともあります、その一つひとつが学校を良くする貴重なご意見として承っています。地元の小学生・中学生の皆さんから、あるいは一般の方々から挨拶をしていただく時もあり、有り難く思います。挨拶ひとつでこんなにも心の持ち様が変わるものかと、この歳になって初めて感じたことでした。秋留台高校は、学び直しを掲げる「エンカレッジ・スクール」ということで、二人担任制、基礎・基本を学ぶ教科「ベーシック」を全教員で担当する等、私自身、学校の組織・システムの違いに戸惑うばかりでした。しかし、教員の平均年齢が非常に若いため、校内はパワーや活気に満ち溢れ、その勢いに助けられながら教育活

動を行っています。教師は、ほぼ全員学年団に所属し、その中で分掌を受け持つ関係上、会議が授業時間内に設定できません。放課後は、学年会、分掌会、教科会、と毎日のように会議が続けます。その間には部活動や予定外の生徒指導も入るため、いかにして時間を有効に使うかが教師の課題の一つです。

「生徒全員が進路を決めて卒業できる学校」を目指して、教員は一丸となって「基礎学力の定着」「挨拶」「服装」「清掃」の指導を粘り強く行っています。

「社会生活で力を発揮できる規範意識と社会性を持った生徒を育成する」という目標実現のため、それぞれの教員は日々、全力で生徒指導に当たっています。秋留台高校の教師が安心して生徒を指導出来る職場づくりの整備を副校长として日々心がけ、教育環境の充実に少しでも貢献できればと思っています。

今後とも引き続きよろしくお願ひ致します。



9. 新任者の声

「できる、怖れず、前進、そして実現！」

玉川 弘文（足立西）

「光陰矢のごとし」月日のたつのは早い！4月1日辞令交付式、副校长の代表として辞令を受け、はや1年が経とうとしています。高校の卒業式以来だと思いながら、式では、緊張感が身を引き締め、これからヤルゾと決意させてくれました。午後は、勤務校で提出物の印刷と期限の確認、そして長期休業中における研修整理簿の処理と教職員名を確認して、副校长職がスタートしました。

4月11日（金）平成26年度入学者選抜学力検査採点の再点検の事務連絡を読み、「え！」と驚きと、期限は12日（火）、校長先生は出張で相談することができない。お昼どきに連絡をしようと躊躇していました。しかし校長先生から、すぐに再点検をしなさいとの指示の連絡、まずかった、判断力・自覚が足りない。会議中でもメールで連絡をすべきだと判断力の甘さを痛感しました。それからは、まさに、過去の学力検査の再点検、さまざまな事務処理の日々で1年が過ぎたようです。そのような中で、副校长会での先輩や同期と会うとほっとしたものでした。

ここまで、大過なく副校长の職務を続けられているのは、宮川隆史校長のご指導と笑顔での励ましがあってと感謝しております。明るく笑顔で相手を立てながら、押し付けず部下を育て学校経営を進める姿を貪欲に学ばせて頂いております。また、理解ある教員の支えや事務手続き等で嫌な顔をせずに対応してくださった経営企画室職員の援助に感謝しております。

さて、昨年3月に決めた目標の達成度は？「生徒によりそった教師を育てよう」「仕事に夢中になる職場を創ろう」は、現在進行中！

本校は、平成25年度に40周年記念式典を挙行しました。私は学校経営計画を達成しながら新しいステージへの礎を創っています。しかし、「人間万事、塞翁が馬」です。楽しいことの後には茨の道が待っていた感がします。また、悲しみのどん底の後にはバラ色の明日が待ってい

る感もします。ですから、副校长の職責を楽しめます。「できる、怖れず、前進、そして実現！」と強い気持ちで邁進します。

まだまだ不慣れな副校长です。副校长協会の先生方には、今後も引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

「充実した日々」

奥澤 稔（工芸）

東京都立工芸高等学校全日制課程副校长の奥澤稔です。

今日は11月29日（土）でPTA常任委員会の打合せがあり、学校に出勤しています。来週から期末考査が始まりますので、クラブや部活動はなく、先生方も少なく教務室の副校长席に座り、書類の整理をしながらこの原稿を作成しています。

4月1日に昇任し、この学校で「自分のできる事は何か」を考えながら、校長室に入り、校長先生に挨拶しました。その後、経営企画室の職員に挨拶してから、エレベータで5階に上がり、職員室に入った途端、外線電話が鳴りました。受話器を取ると「〇〇科の〇〇です。本日1日年休を取らせていただきます。よろしくお願いします。」との連絡が入り、ノートにメモを取り、休暇簿を探し記入すると、今度は内線で、経営企画室長から「副校长先生ですか？朝会を行いますから8時45分になりましたら、経営企画室へおいでください。」との連絡でした。

経営企画室との打ち合わせ後、経営企画室長から「本校は講師の先生が多く、まだ全ての講師が決まっていません。早く探してください。」と話があり、講師を探すため東部学校支援センターの担当者に連絡し、パスシステムの使い方を教わり、一週間かけて講師を探しました。

また年度当初の提出物の多さに戸惑い、全てが初めての経験で、副校长の仕事がこんなに大変だと改めて実感しました。今冷静に考えてみると、この8ヶ月間は、先生方の力を借りな

がら、無我夢中で仕事に集中してきたように思います。本校が期待する生徒像があるように、東京都が期待する副校長像を築きあげていきたいと思います。

副校长という職種は、一人では成り立ちません。校長先生をはじめ、経営企画室、定時制の副校长先生、非常勤教員の先生及び支援センターの方々の援助があり、今まで続けられないと痛感しております。

本校でも保護者対応や生徒相談等いろいろな教育課題が山積していますが、誰かがやらねば課題は解決しません。これからも学校現場の窓口として頑張って行きたいと考えております。

今後ともよろしくお願ひします。

を深め、より良い判断や結論を導いていきたいと考えています。教員の考え方、保護者、地域の方々の意見を良く聞くということは、とても重要なことです。校務の進行管理をなにげないコミュニケーションを図りながらチェックすることで丁寧に進めていきたいと思います。

もうひとつは、教員への指示やアドバイスをする時には、根拠や理由をはっきりさせておくことを心がけていきたいと思います。各教員の能力と適性を見極め的確に把握し、根拠のある適切な指導助言を行うことで、人材育成を図りたいと思います。

最後になりますが、私自身、まだまだ、副校长として未熟なところがありますので、東京都公立高等学校副校长協会からのご支援を賜りたく思いますので、よろしくお願ひいたします。

「傾聴」

山崎 秀樹（忍岡）

平成26年4月1日付、忍岡高校に着任いたしました。本校は、普通科と生活科学科を設置している全日制単位制高等学校です。落ち着いた雰囲気の中で特色ある教育活動が行われています。初めて副校长職として本校に配属され、日々、緊張して校務を行っています。

私は、平成21年4月から5年間、学校経営支援センターに勤務していました。その間、副校长先生方と連絡を取ることも多くありました。多くの校務の進行管理をしていることは分かっていましたが、現実に副校长職に就いてみると、それは想像以上でした。そのような中、毎日、忙しいからこそ、副校长は「やりがいのある職」ということを自分自身に言い聞かせながら、登校しています。「攻撃は最大の防御なり」という言葉がありますが、校務を進めるときに、攻めの姿勢でないと、私自身が押し潰されてしまわなかいかと心配になることがあります。前向きに考えて行動することで、何とか多々ある校務を進めることができます。

副校长として、次の二点を心がけたいと思っています。ひとつは、「傾聴」という姿勢を心がけていきたいと思います。相手が話したいこと、伝えたいことを、受容的・共感的な態度で真摯に受け止める姿勢でいることで、相手への理解を深めるとともに、相手も私に対する理解

「仲間に支えられて」

嶋村 晃（荒川工業）

校長から「事故報告書を支援センターに提出してください」。これが私にとって副校长としての最初の大きな仕事でした。着任して2日目、桜が満開で春の晴天の日のことです。校長室で朝の打ち合わせをしている最中に電話が鳴り、部活動中に事故発生し、救急車を呼ぶことになったのです。幸い生徒には怪我もなく大きな事故にならなかったことは良かったと感じました。私は主幹の時に事故報告書の存在は知っていましたが、書いたことは一度もありませんでした。どのように書いたら良いのか、さっぱりわからなかったのです。結果的には学校支援センター経営支援室との電話を繰り返し作成することができたのですが、今度の仕事に対して「やっていいけるのだろうか」と不安が身体中のしかかってくるように感じたことを覚えていました。

毎日が初めての仕事であり、校長から直接指導を頂きながら仕事を進めていく日々が続きました。多くの仕事が重なり、何を優先しなければいけないのかを判断し期限までに提出する。自分でも何をしてきたのか記憶がないくらいに仕事に追われる毎日を過ごしていたと思います。このように気持ちに余裕がなくなってきた

たときに助けてくれたのは、定時制の副校長と今年一緒に昇任した他校の副校長の仲間たちです。

定時制の副校長は、今年で4年目のベテラン副校長で、全ての業務内容を理解し無駄のない動きをしています。毎日出勤されることが待ち遠しく、校長との打ち合わせよりも時間を多く取るくらい定時制の職員室に出向き指導を仰ぎました。このことは大変ありがたく思っています。

副校長ベーシックプログラムは、私にとってとても貴重な時間でした。研修を受けながら他校の状況や副校長としての仕事での悩み、直面している困難な業務について聞き相談することで、悩みが一緒であることを知り気持ちに余裕を持てるようになったからです。学校は違いますが同じ釜の飯を食べている大切な仲間であると感じられ、さらにメンタル面にとってもよい研修であるため、ぜひ来年も実施してほしいと思います。

早いもので副校長として仕事を始めて10ヶ月になりますが、まだまだ未熟者であり校長に迷惑をかけていると思います。これからは校長の学校経営を実現していくため、スムーズに業務が遂行できるように一層の努力をして参ります。東部学校経営支援センター支援室の皆様、同期の副校長、定時制の福田副校長、企画室の方々といった多くの仲間に支えられ今日があると言っても過言ではありません。心より感謝申し上げるとともに、今後もご指導をよろしくお願ひいたします。

「この1年間の感想」

堀江 敏彦（小石川中等）

中等教育学校副校長の職に就き10か月が過ぎようとしている。毎日職務に追われながらも、生徒や教職員の一生懸命な姿を目にしながら、学校現場を精一杯楽しんでいる。本校は副校長が二人配置されているため、先輩副校長先生の仕事の仕方を見て、まさに体で仕事を覚えながら、日々、職務に当たることができる。さらに、校長先生と先輩副校長先生、それぞれからの指導・助言により、様々な職務上の疑問を早期に

解決する糸口を見つけやすくなっている。加えて、管理職に必要な教職員や保護者との人間関係の構築、学校経営における心構えやエッセンス、自分自身がつまずいた時の対処法など、ありとあらゆることについて学ぶことができる非常に恵まれた環境であると感じている。

本校で私に割り当てられている職務は、前期課程の教員の服務、教務部・国際部・広報部の担当、時間講師に関する業務などである。

4月に着任して席に向かうと、机の上の未決箱に黒いファイルが山積みとなっていた。年休申請等のファイルである。その後、現在に至るまで毎日毎日、年休申請等は朝から晩まで一日中五月雨式に続いている。印を押しては経営企画室の服務担当者へと運び、処理が終わったものを持ち帰ってくる。

教務に関する書類は、前期課程と後期課程に分かれているものが多く、非常に煩雑であり、教務主任とともに処理に当たっている。

本校の教育活動を支えている大きな柱の一つに国際理解教育がある。国際部は、大きな行事である海外語学研修や海外修学旅行、さらには東京都の事業である次世代リーダー育成道場などの事務を担当している。旅行業者や海外の高等学校との打ち合わせでは、様々な問題が浮上することが多く、解決を図るために遅くまで国際部の教員と協議する。

年間、述べ9,000名近くの参加者を対象に行われる学校説明会等では、本校への入学を希望する児童や保護者に対して、親切で分かりやすい説明を心掛け、広報部の教員と効果的なプレゼンテーション資料の作成や、生徒アンケートの分析結果の公表方法の工夫などに力を注いでいる。

講師に関する事務作業では、電話をかけまくりながら、マニュアル片手にシステムへの入力をひたすら続け、最後は経営企画室長の力を借りながら何とか進めることができている。

さて、毎日絶え間なく仕事は続くが、2年目を迎えるにあたり、今から準備を進める必要がある。グローバル・リーダーを目指す本校生徒が、それぞれの進路希望を実現できるように、教育活動においてより効果的な工夫を実践したいと考える。6年間という時間を活用して、上級生が下級生を育みながら、リーダーシップを

身に付けることができるようなシステムを構築し、学校の特色の一つに加えたいと考える。

副校长になって

福島 泰直（日本橋）

都立日本橋高等学校に副校长として赴任して1年が経とうとしています。この1年、思い起こすいろいろなことがありました。小さなミスはもちろん、教員や経営企画室の方々に迷惑を掛けながらやってきた日々でした。今、副校长の私を受け入れてくれている校長先生をはじめとする教職員の皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、改めてチーム日本橋の一員として強い連帯感を感じています。

私が管理職を目指すきっかけとなったのは、定時制勤務の時の校長先生、副校长先生の存在でした。教務主任の私に対し、事あるごとに管理職の厳しさややりがいを教えていたたきました。次に勤めた三部制の学校でも、校長先生と副校长先生方に常に言葉をかけていただき、副校长はこうあるべきだという話から、実際の事務作業でのノウハウまで細かく教えていただきました。常に管理職が後ろ盾となり、安心して校務に邁進できる環境がありました。この三部制の学校では、私と同様に管理職に進んだ教員が5年間で6名も誕生しました。こうした人材を育てようとする意識を持った管理職の方々と仕事をすることができたことが私にとっての幸運だったと強く思います。同じ学校から管理職となった方々とは、同じ目標に向かって取り組んだ仲間として、今も私にとって頼りになる存在です。こうした仲間が近くにいることが心の支えになっています。そして、これから管理職として私が何をすべきかと考えるとき、いかに人材育成を進めるかということが大きなテーマになっています。

今年一年間で、校長先生の理想とする日本橋高等学校にどれほど近づけられたかと考えると、自分の至らなさを反省するばかりです。まだまだ副校长として、私がやらなければならぬことがあります。毎日、成果ができるか、出ないかと、不安になることもありますが、校長先生と多くの話をできることが、不安を解

消し、仕事へのやる気を引き出してくれています。また、いつの間にか職員室での副校长席に違和感がなくなってきたと同時に、副校长のためにと動いてくれる教員も現れるようになりました。校長先生の思いをくみ取り、理想とする学校づくりを推進し、教職員全体のレベルアップを図れるよう人を育てていくことができるのか、これからが正念場です。今後、さらに成果が上げられるよう頑張っていきたいです。

「日々思うこと」

瀬木 信子（東）

4月1日に東高校に初出勤して、「異動者への打ち合わせ」と当日の予定表にあったので、異動して来られた方と、新規採用者で会議室に行きました。ところが、誰もいなくて何の説明もなく、「この時間はいったいなんだったんだろう」と皆で言いながら雑談をして終わりました。この「?」という感じが東高校に来て8ヶ月程たちましたが今も続いています。私は都立高校では専門学科にしか勤務したことがなく、普通科は初めてで、生徒指導や慣行等、私が、「当たり前」と思うことが東では「?」、東の「当たり前」が私には「?」なのです。結構驚きの連続で、同じ都立高校とはいえ本当に色々な学校があるものです。

また、1年間開設準備室にいた経験があるので、授業がなく座って仕事をすることにはそれほど違和感はないと思っていたのですが、歳のせいいか、ストレスかはわかりませんがひどい腰痛（椅子のせいいか？）と、苦手なパソコンに悪戦苦闘している毎日です。4月まで調査統計システムを見たことも使ったこともなかったため、4月当初からまず調査統計システムの扱い方を、電話片手に他校の管理職に聞いたり、他にもわからないことがあれば、前任校の教職員の方々、さらに指導部、研修センター、東部学校経営支援センター支所の皆様に「ああ〇〇さん・・」と名前を覚えられるほど、色々お尋ねをして、また、4月1日に会議室で雑談をした同期の助けもあり、今まで業務をこなしてきました。助けていただいた皆様に感謝しております。本当にありがとうございました。そして

これからもお世話になることだと思いますが（ご迷惑ですよね、ごめんなさい）、よろしくお願ひいたします。

このような数ヶ月の日々を振り返ってみると、生きると言うことは、多くの方々に支えられていることを改めて認識しています。人生も終わり近くになり、あと何年私の人生があるのかは、神の手に委ねられているのですが、残りの人生を皆様に感謝しつつ、仕事を含め、自分には何ができるのか、いかに生きていくかを問うているこの頃です。

五つのAを忘れずに

池田 美穂（紅葉川）

Active	→活動的な
Ambitious	→野心的な
Agreeable	→感じのよい
Aggressive	→積極的な
Able	→能力がある

この五つの英単語は、着任早々の教職員歓送迎会の挨拶文で、私が現任校の印象を表現したものでした。4月1日に着任してまず感じたのが、生徒も先生も全てがなんと若くて元気な学校なのだろう、ということでした。まず、アクティブ、という言葉が思い浮かび、それにひっかけて英語専門ではない私が何とかひねり出して並べたのがこの「五つのA」なのです。

着任から秋の文化祭終了あたりまでは、諸先輩方からうかがっていた通り、何が何だか考える余裕もないまま走り抜ける、といった日々でした。今年度、校長・副校長・経営企画室長が「3点セット」で異動になりましたので、そのあたりはご推察ください。未熟な副校長に対し、校長先生はこちらが恐縮するほどご配慮くださり、おかげで自分の未熟さや無知を構えずにさらけ出し、率直にご指導を仰ぐことができたのは幸いでした。校長自ら大変フットワークが軽く、私は息も絶え絶えになりながら、その後を追いかけていたような毎日でした。

さて、走りながらもトップギアを少し緩めることができるようにになった頃から、様々な課題が見えるようになりました。すぐに解決策が見

いだせるもの、人材育成も含めじっくり解決していくかなければならないもの、一挙には片付かないであろう潜在的なもの等々、自分なりに判断分類することができるようになってきました。結局、それらはその学校現場独自の課題ばかりではなく、普遍的な都立高校の課題、または日本の教育の課題、であることが多いようにも感じています。これからどう解決していくか、悩みながらもやる気を感じています。

また、若くて元気な現場だからこそ、いわゆる報連相だけでなく、先生方から様々な相談事も舞い込みます。管理職である前に、教職の先輩として、時には子育て経験者として、フランクに話を聞かなければならぬこともあります。かつて、勤務校のある校長先生が、自分は職員室の担任の先生になろうと思ったのだと、とお話ししさったことがありました。その時はよくイメージできなかったのですが、今は少し実感としてそれが理解できるようになりました。ただ、こちらの構えに関係なく、私と話をする相手は、「副校長」としての私の言葉を聞いていますから、その責任の重さを常に忘れないように心がけています。その時に応じ、的確な判断を迅速に下し指示するためには、目先の忙しさに負げず学び続けなければ、と反省もしています。

とにかくこの1年は、出会いとつながりの大切さをひしひしと実感する日々でした。毎日一緒に働く職場の教職員はもちろん、毎月の副校長連絡会も、また様々な研修や出張先などで過去に会った多くの方々も含め、皆様の存在にすい分支えられました。もうすぐ次年度を迎えるとする今は、始めに並べた五つのAで始まる言葉は、私自身の仕事に向かう在り方の表現となっています。初心忘るべからず、でこれからも進んでいこうと思います。

芦花高校に着任して

林 達也（芦花）

平成26年4月に新任副校長として、芦花高校に着任しました。本校は全日制普通科の単位制高校です。着任以前は単位制といつても全日制普通科であり、あまり変わらないだろうと、

タカをくくっていました。本校に着任し、日が経つにつれて、単位制のあり方に戸惑うことが増え、普通科と同じ発想ではいけないことに気づきました。

本校は都立高校第一次改革推進計画により、多様な学び、多様進路のために千歳高校と明正高校を発展的に統合し、千歳高校跡地に0から作り上げた学校で、開校12年目を迎える学校です。本校の多様な学びとは、普通科にはない豊富な学校設定科目を設けることです。受験科目以外に、第二外国語、「立体造形」、「色彩」、「ソルフェージュ」、「アンサンブル」、「上級体育」等々、110科目以上が用意されています。これだけの科目の履修管理、履修指導には相当な手間がかかります。

課題は単位制高校の今後のあり方であり、存在意義です。設立当初は多様な選択科目が魅力となり、生徒をひきつけていました。現在は、50%を超える高校生が四年制大学に進学します。本校の基本計画検討が始まった平成9年の段階では35%でしたので、前提条件がかなり違っています。入学する生徒のほとんどが四年制大学への進学を希望していますので、受験科目を履修希望する生徒が増え、履修希望者数が少ないため、閉講となる科目も増えてきました。今後の単位制高校の立ち位置を模索しなければなりません。

4月に着任して、とまどったことは、やることなすことが初めてのことが多いことです。聞いていたことからある程度は想像できていたのですが、実際に処理することは大変でした。休暇制度も増え根拠を調べるのにも時間がかかりました。産育休代替を年度途中で探すのも大変でしたし、PASSシステムの操作もさわりながら覚えりといった有様でした。

私が恵まれていたのは、3月末の引継ぎで前任の副校长である西田先生から、きめ細かな引継ぎをしてくださったことでした。引継ぎ後も何度も電話で貴重なアドバイスをいただきました。また、校長も細かいことには目をつぶっていただき、粘り強く育成してくださっているので大いに助かりました。経営企画室もわからぬことだらけの新米副校长をいつも支えてくれます。教員も主幹を先頭に積極的に動いてくれます。

恵まれた職場環境にありますが、課題意識を持ち、常に職員に要求していく姿勢を忘れずにいることが学校をよりよくしていく信じています。

「もうすぐ1年」

片山 敏郎（神代）

先日、支援センターの担当課長と学校経営訪問での2回目の副校长面談があり、今年度は訪問もこれで終わりですというお話と入選の真只中にいることからも時間が経っている実感があります。4月からを振り返っても色々あったことが思い出されます。

夏の「副校长ベーシックプログラム」の研修でハワイアンズに向かうバスの中で、自己紹介となり私は「今年昇任した副校长は、あたり年と言われています。本日も採点ミスの書類の件で連絡をしなければならない状況を抱えながら、向こうに向かいます。研修もですが、あたり年の皆さんと一緒に乗り越えていなければと思います。」と話をしました。異動して他の学校の方の採点ミスの件で、何度も連絡を取り、それも片付かない中で向かうことも正直落ち着かないという思いでした。ハワイアンズに到着後の昼休みに、届いていない書類が発送されたかどうかの確認を、福島にわざわざ来て東京に連絡しているこの状況は何だろうという気持ちで一杯でした。タクシーを使い、研修センターに答案を運び込むことも経験し、きっとこのような経験も貴重な経験として「あたり年」だった先生達と将来も共有出来るのだろうと思いま

業務・職務についての忙しさは、想像の範囲内でしたが、その質や中身が違い、想像していたものとはかなり異なっていました。自分にとっての異質感は、副校长になったからという事柄でもなく、次々様々なこういうことが起こるのかという事柄ばかりでした。学校が異なるとこれだけ違うのかと一言で片付くことかもしれませんのが、日々その対応に追われているようなもので、それによる気持ちの置き方が大変難しいと感じることが多かったです。様々なことがうまくない1例として、バイ菌による腸炎に

もあり、暑い夏に激痛でうなっていったこともあります。真夜中にどうにも我慢出来なくなり、緊急で見てもらえる病院に行き、痛み止めを含んだ点滴もしてもらい、自宅に戻ったあと、念のためバイ菌が全部消滅するようにと医者の指示で3日間ほとんど食事をとらず、ポカリや麦茶で過ごしました。きちんと普通に行うべきうがい・手洗いが本当に必要なだと痛感した事柄でした。通常行うべきことも注意深くできなかつた事柄の表れだと思い、反省させられる体験でした。

様々な出来事のあと、落ち着き過ごせる時間が後半少しあは出来てきたことは、成長の1つだと思います。「これだけ様々経験することもきっとないだろう。貴重な経験として、この状況を楽しむべきで、次は何が来るか?楽しんでいこう。」と自然と気持ちを変えることが出来たことは、大きな変化で転機だったと思います。管理職として副校長であるなら、このように進めていきたい、このような気持ちで業務をこなしたいなど様々あり、いつかは達成したいですが、本当に時間に追われ後追いしているような気分です。こういう配慮や気配りや仕事の進行をしたいと思っていても、本当に正直出来ていません。「現場主義」である私としては、それもまた一つと思いますが、早く様々なことを、自分のスタイルで出来るような日が来て欲しいと思います。2年目からは、少し余裕を持ち、様々行っていけるように早くなりたいと思います。

八丈高等学校に赴任して

牛込 俊裕（八丈）

八丈高等学校に赴任してはじめに気付いたことは、生徒が気持ちよく挨拶できることです。また、その挨拶から優しい心をもった生徒であると思いました。教職員は生徒に対して熱心に取り組み、生徒も教職員を信頼しています。この印象は日を追うにつれて確信が持て、このように育ててこられた保護者や地域の方の力に感謝し、八丈高校のために役に立ちたい一心で、今日に至っています。また、地域の方も学校に対してとても協力をしてくれます。そのために、できる限り休まずに学校にいること、何でも厭

わず引き受けることを心掛けています。

島しょ地区である八丈島には、検定試験の準会場があまりありません。受験の機会を確保するために、経営企画室、支援センターをはじめ、地域にも相談をして、この課題を解決することができました。また、本校では、多くの生徒が卒業すると島外に出ます。したがって、在校中に八丈島のことを学ばせようと、学校設定教科「郷土文化」を設定しています。ここでは、市民講師を探すのに苦労しましたが、あきらめずに頑張っていると、最終的には協力の連絡をいただきました。さらに、推薦で上位校に合格しましたが、学校での指導だけでなく、地域の協力によるサイエンス研究の成果もあります。八丈島での生活は、気温だけでなく、とても温かい心で接していただける半面、その期待に応えるために毎日が勉強です。こんなことがあるのか、これはすぐに改善しなくては、どうすれば先生方は納得してくれるか、普通であればこのような悩みを越えている時期でしょうが、経営企画室へ何度も行って手順を習い、校長先生に相談し、中部学校経営支援センターに教えていただきながら執務を進めています。

生徒をより良く育てるには、副校長として、教職員の力を信じて、束ねていくことが不可欠です。さらに学校だけでは不十分であり、保護者や地域の協力も必要です。このことを八丈島に来て、より強く思うようになりました。少しづつ現れている成果も、校長先生に心配をお掛けしながら、経営企画室の協力により実現しています。教職員が安心して指導できる環境を作り、信頼を損なわない学校づくりのために、不斷の決意で取り組んでいきます。

「小笠原高等学校の日々」

富田 真理子（小笠原）

小笠原に赴任し、早や10か月が経ちました。校長先生をはじめとする教職員の皆さん、経営企画室の方々、中部学校経営支援センターの皆様には不慣れな私に親切に接していただき深く感謝しております。特に、寮の舎監長や村の連合運動会実行委員の仕事等、小笠原高等学校の副校長特有の業務については、前任の清水副校

長先生が資料を整えて下さりいつでもご質問させていただけたこと、村の事情等については小笠原の勤務が長い先生方や村教委の方々、村立小中学校の副校長先生方から貴重な情報や助言をいただいたことには、感謝しても足りません。

赴任時には、校長先生から前年度に決定した事業をつつがなく行うよう御指示をいただき「24時間、昼も夜も休日もないものと思って下さい。」とお話しでしたが、実際に仕事がスタートすると、それは決して誇張ではなかったことを実感しました。副校長の1日は、毎朝7時に寮へ行き寮生の健康状態と前日からの舎監業務の確認をすることからスタートします。島の気候に対応してこちらの職場は官公庁も昼休みが1時間半という長さであり、本校も1時間15分の昼休みに生徒も教職員も一旦帰宅しますが、管理職は電話対応のため学校にいます。1日の仕事を終え、学校日誌と校長先生に提出する日報を書き終わると、夜間の警備員の方が仮眠をとる時間の1時間前までに学校を出ることにしている時刻に近づきます。

このような毎日ですが、こちらでは救急の場合、昼間は飛行艇で内地へ搬送、夜間はヘリコプターで硫黄島まで運ばれた後に飛行機で内地に搬送するため病院到着まで長時間を有し、天候が悪い場合は搬送も不可能となることから、心身共に健康を保つことは最優先課題です。

今年度は、4月中旬のインフルエンザによる学校閉鎖に始まり、本校初の次世代リーダー研修生の応募・選考から国内研修への参加を経て1月に留学に出発するまでの対応、数年ぶりに実施した兄島への宿泊奉仕体験活動等、前年度にはなかった対応が数多く生じました。こうした状況で、今年度赴任した方が半数という教職員の皆さんには助け合い本当によく仕事をしてくれました。

来年度は、1年間を通しての業務を俯瞰し、より効果的な指示をすることで、組織の全員が心身共により健康な状態で仕事する環境を整えます。また、在任中に「小笠原高等学校版副校長必携」を作成し、今後赴任される副校長先生に加筆修正していただきながら、引き継いでいけたら…と考えています。

「気がつけば、長距離走」

相田 誠一（第一商業）

4月1日（火）、朝の新鮮な空気と青空のもと、朝日を浴びながら、第一商業の正門を潜り、いよいよ副校長としての1日が始まりました。校長先生に御挨拶をした後、職員室に入ると、先生のお一人が出勤されており、ぎこちない挨拶をして、副校長席に着きました。この時の副校長席の座り心地の悪さは、今でも思い出されます。T A I M S パソコンに電源を入れ、仕事を始めようとしたが、何から始めてよいかが分からずいると、校長先生がお越しになり、仕事の手順を教えて下さいました。気が付くと午前8時30分になり、職員室で打ち合わせが始まりました。副校長としての最初の挨拶は、緊張の中で何を話しているか分からずになりました。挨拶後、辞令交付式に上野の東京文化会館に向かい、終了後すぐに学校に戻り、企画調整会議、着任者打ち合わせを行い、その後、服務処理や報告文書作成など1日の仕事が終わったのが、午後8時半過ぎであったことを記憶しております。この日から、副校長としての長距離走が始まりました。

副校長としての8か月間が過ぎ、現在では仕事のリズムが出来きました。振り返ると、1学期は、仕事が分からず1日1日があつという間に過ぎていきました。朝の服務処理で始まり、調査・報告文書作成と起案に追われ、気が付くと放課後になり、さらに仕事に集中すると、退勤するのが午後9時を過ぎていることが多く、土日にも出勤しなくては仕事が終わらない状況でした。4月・5月は本当にふらふらになりながら勤務しておりました。5月中旬の土曜日、部活動で勤務されている先生から「副校長先生、先生に倒れられてしまうと、私達が大変困りますので、お休みを取ってください。」と、言葉を掛けられました。この時、初めて自分自身が副校長になったことを自覚し、健康管理をしっかりといかなくてはならないことを考えさせられました。この日を境にして、休息をしっかり取ることを心掛け、体調管理に気を配って勤務するようになりました。今まで、体調を崩さず勤務できていることは、この日の出来事の御陰であると感謝して

おります。

「健康第一」という言葉がありますが、この8か月間、本当にこの言葉が身に沁みております。副校长職は、長距離走に例えることが出来ると思います。先々の仕事に対してスケジューリングし、一日の仕事のペース配分を考え、自らの体調の管理を行っていく大切さを経験から学びました。

副校长として、先生方が健康で教育活動に専念できる環境を整えていくことが、私の使命であると思っております。先生方の健康が、よい教育実践に繋がり、生徒に還元されていきます。副校长としての長距離走は始まったばかりですが、先生も生徒も健康で笑顔が溢れる学校づくりに精進していきます。

「副校长の職」

人見 正嗣（総合工科）

東京都立総合工科高等学校副校长の人見正嗣です。3月に前任の守屋副校长から様々な引継を頂戴しながら、今ひとつピンとこないものばかりで、不安を覚えながら4月を迎えたのが昨日のようです。当時は、副校长と呼ばれることにも慣れず、気持ちの切り替えもうまくいっていなかつたように思い出されます。職員から質問を受け、ああ守屋先生が言っていたのは、のことだったのかと、ようやく思い出し、慌ただしく処理に追われる毎日でした。

また、例年になく、入選の事故や緊急対応に追われることが続き、心身ともに疲れ切ってしまうことも、しばしばありました。そのような中で、心の支えになったのは、共に昇任した同期の副校长先生たちとの会話です。どこの学校も同じなんだと再認識できました。

そうは言っても、追われる日々は続きます。ある提出書類に目を通したはずですが、単純な誤字に気づかず、そのまま校長先生に出したことがありました。校長先生は直ぐに気づき教えてくれましたが、「絶対自分のところでミスをみつけてやるくらいの気持ちで目を通しなさい。」と御教示いただきました。提出書類一つにも気持ちを込める大切さを学ばせていただきました。また、経営指針等の数値一つとっても、

根拠の大切さやそれを達成する為の見通しやスケジューリング等、どれをとっても今の自分に欠けているものばかりで、果たしてやっていけるのだろうかと自信喪失の日々が続いていたように思い出します。

そのような中で、校長先生より心に残る言葉を頂戴しました。「副校长にしかできないことを心を込めてやるんだ。」副校长にしかできないこと、学校マネジメント能力、そのように受け止めましたが、もっと他の意味があるようと思えてなりません。「副校长にしかできないこと。」この職についたのだから、今までの教員人生で経験したことのないことを経験できる、そんな気持ちになれました。

現在も、どうにか追われる毎日ですが、御支援いただいている支援センターの皆様や先輩副校长、同期の副校长、校長先生に深く感謝するとともに今後も御指導御鞭撻をよろしくお願ひいたします。

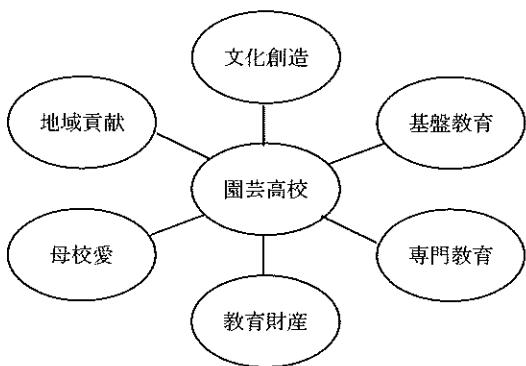
「学校経営計画の実現に向けて」

小堀 卓二（園芸）

東京都立園芸高等学校の小堀卓二です。4月に副校长として着任して以来、9ヶ月が経ちました。12月26日現在、本校の起案は1215件。これは1ヶ月に135件の起案がされている計算になります。起案の分類は「調査報告」、「計画」、「契約」など様々で、起案者も職員室と経営企画室にいる様々な職員です。恐らく他校でも同程度、或いはさらに多くの起案と決定がなされているかと思います。どの学校においても、その学校の「学校経営計画」の実現のために教職員が協働して取り組んでいることを想像すると、自分も頑張らなければいけないという思いが湧いてきます。

さて、本校の学校経営計画における「目指す学校」は右の様に図で表現されています。

緑と食と命の学園



校は「勤勉 勤労」

- 1 風の通る学校：○○○○……。
- 2 わかる学校：○○○○……。
- 3 きれいな学校○○○○……。

私は今までに、都内すべての農業高校を経験してきましたが、「目指す学校」をこの様に表現した学校は1校もなく、着任時この図が意味するところを十分に理解できませんでした。学校要覧を持参し、校長に「この図はどんなことを意味しているのでしょうか？」と伺うと、校長は、「園芸高校には素晴らしい教育財産がある。その教育財産を利用して、基盤教育である普通教育と専門教育を行い、さらに地域貢献を推進し、生徒に母校愛を育み、文化創造する学校をイメージしている。文字で書くより図で示す方が覚えやすいと思ってこの様にしている。」とのお答えでした。続けて「私は校内の仕事の他に全国の農業高校生のための日本学校農業クラブ連盟(FFJ)代表や、本校のステータスを上げるために校外の仕事もあるから、小堀さんは校内のことしつかり頼みますね。学校の中が落ち着いていないと、安心して出られないから。」と言われました。

校長は全定課程の校長として夜は10時過ぎまでの勤務に加え、FFJ代表としての仕事、アメリカ大使館公邸への野菜の植え付け、皇太子殿下の本校への行啓など、本校のステータスを上げる仕事にも苦心され、現在は今年4月に予定されている「ハナミズキ100年祭」(日本から米国に贈った桜の答礼としてハナミズキ40本が東京市へ贈られ、その内の2本が本校に植栽されました(1915年)。日本に現存するハナミズキは今や本校の1本のみとなり、今年4月にその記念行事を実施します。)に向けての準備も進んでいます。そして私は、校長が安心し

て学校の外の仕事にも集中できるよう、定時制課程副校長をはじめ、本校全職員の協力を得て、副校長として職務を遂行してきました。先日校長から「最近は安心して出かけられるようになった」と嬉しいお言葉を頂きましたが、「油断禁物」と気を引き締め、学校経営計画の実現に向けて校務に当たる毎日を送っています。

離島の副校長として

河合 洋(新島)

はじめての副校長、はじめての普通科勤務(私の教科は「商業」)、はじめての離島勤務、はじめての単身赴任として、たくさんの『はじめて』を抱えて平成26年度から新島高校へ赴任いたしました。

副校長の仕事内容についての心配ごとや不安、期待などは他の先生方が感じられていることと大きく異なると思います。これまで10か月間を過ごしてみて、ほとんどが想定の範囲内であり、赴任前に予見したとおりでした。それより、私の場合は①入都以来四半世紀にわたって体の芯までたっぷりと染み込んだ「専門高校モード」を「普通高校モード」に切り替えること、②離島に立地する学校独自の地域性や環境を理解すること、③若手教員が大半を占めている職場で若手を鍛えること、さらには④官舎で生活をともにする彼等との公私にわたる良好な人間関係を構築すること、以上4点が最大の課題でした。いずれの課題も現在進行中であり、月日が経つほどに内容が濃くなり、日々新たな発見をし、それを受容し、勉強に勤しむ毎日です。

新島高校は進学者が大半を占め、学校として組織的に受験指導に重点を置いています。これまで専門高校で高度な職業資格取得に向けた指導を担当していましたが、そのノウハウを受験指導最前線の若手教員の指導に活かすためにはどうすればよいか。多くの専門高校で取り組んでいる細かな生活指導の必要性や指導の技術を普通高校での指導として先生方に理解を得るために何から手をつければよいかなど、前向きな取組は容易な方です。

島内に1校しかない高校の教育の在り方、村内他校や村教委、多くの島民との関わりや良好

な関係の維持はもちろん、狭い社会でのそれぞれの立場や考え方の違いの理解、場合によっては島の文化・歴史・風俗といった領域まで踏み込まなければならない難題が山積しています。知れば知るほどに驚愕することも少なくありません。それらの内容は想像におまかせして紙面の都合で割愛しますが、他の離島も同様だと思います。

都内に勤務していたのであれば、まったく考えなくてよい難題の数々を、若手教員と一緒に試行錯誤しながら解決に向けて取り組んでいます。若い感性や行動力を伸ばしながら、「学び多き新島高校勤務」となるようバックアップしています。若手教員とのやりとりは、自分自身の教員生活の回顧の機会であり、猛省をすることばかりです。副校长になって立場が変わったことで見えなかつたことが見え、多くを気づき、これまでご一緒に御指導してくださった副校长先生方に向ける顔がありません。若手教員を前にして、自分のことは棚にあげた状態になって心が痛むことがあります、私ができなかつたことに取り組んでもらうことや、私が経験した失敗を繰り返さない願いを込めて誠心誠意若手教員を支えています。

先生方との人間関係は、「管理職と職員」という関係を自覚しながらではありますが、「寝食をともにする仲間」でもあるため、お互いに絶妙な距離感を保つことも、難しいところです。閉塞感のある狭い社会におけるメンタル面については、細心の注意が必要です。

はじめての副校长として、たいへん密度が高く、私自身の教員生活で最も学びの多い勤務経験をさせていただいており、誠にありがとうございます。

間もなく1年目が終わると副校长の仕事も一巡し、ようやく全体が見えるころです。この原稿を作成しながら、10か月を振り返り、自分の置かれている状況や役割を考え、離島ならではの仕事に難しさを感じますが、解決に向けて若手教員と一体感をもって頑張れる面白さもあります。最近は、『離島副校长』にあらためてやりがいを実感しています。

管理職として甘いところも多々自覚していますが、副校长としての仕事が一人前にできるよう邁進していく所存です。多くの先生方からの

御助言御指導を賜りますようよろしくお願ひいたします。

「副校长の職に就いてみて」

古藤 一弘（北豊島工業）

副校长という職に就いて10か月が過ぎました。感想を申し上げようにも、あまりにも目まぐるしく多くのことが起こりすぎて、ほとんど記憶にすら残っていないと言ったほうが正直な感想です。ただ、忘れられない出来事がいくつありました。その一つが芸術の工芸の講師任用の件です。前任の副校长さんとの引継ぎ時に、1学年の芸術で工芸の講師がまだ決まっていないと伝えられました。でもその時は、年度内には決めてもらえるだろうと、半ば安心して聞いていました。しかし、着任してまず目にしたのが、「講師が決まっていないのですぐに対応するように」というメモでした。芸術の授業開始まで3週間しかなく、何をどうすればよいのかわからないまま、右往左往するばかりでした。初めて使うPASシステムに戸惑いながら、講師名簿に載っている方々へ、土日返上で連絡しましたが、思うようにはいきません。もちろん、東京学芸大学に連絡を取ったり、先輩副校长さんにも相談しました。なかなか留守電ばかりで直に連絡できず、胃の痛い思いをする中、なんとか講師を見つけることが出来たのは、授業開始1週間前でした。

ホッとしたのもつかの間、5月26日（月）に、鎌田薰座長をはじめとする教育再生会議の方々と下村博文文部科学大臣が、職業教育の充実や高校卒業後の高等教育機関との接続についてなど話し合うため、本校の施設見学後に意見交換会を行うという連絡が、学校長のもとにありました。それがどういうことで、どうなるのか、私自身、十分に理解できないまま、ただ、大変なことになったという実感だけがありました。その後、臼井万寿雄都立学校教育部高等学校教育課ものづくり教育推進担当課長さんをはじめ、中部学校経営支援センター支所の方々とほぼ毎日のように連絡を取り、資料の準備、当日の対応や会場の準備等で追われるような日々が続きました。まさに、周年行事を短期間で行つ

たような慌ただしさと緊張で、終わった後は安堵感と脱力感、そして疲労感がいっぺんに襲ってきたようで、茫然自失といったような状態でした。

また、2学期には産休代替教員が、勤務して1週間後、体調を崩され退職されてしまいました。新たな産休代替教員の任用に、また頭を悩まし、胃が痛くなる日々が続き、時間講師の方や産休代替の任用がいかに難しいかを知ることができました。

事故の処理と報告、苦情の対応、職員の慶弔、PTA・同窓会の対応、生徒指導、教員指導、生徒相談や教員の相談、ALTやJETの対応などなど、先輩副校長さんには、当たり前の日常かも知れませんが、こんなにも副校長という職は大変なんだなあと思い感じ知らされた1年目でした。

そして、あたふたしながら日々過ごしている副校長を、忍耐強く見守ってくださる高橋康宏校長先生をはじめ、常に明るく生徒に接してくださる教職員の皆さん、経営企画室の皆さん、先輩、同期の副校長の皆さん、日頃より御支援くださっている中部学校経営支援センター支所の皆様方に、感謝するばかりです。まだまだ、一人前にはなれません。皆様方に支えられながら早く一人前になれるよう頑張っていきたいと思います。

井草高等学校に着任して

加藤 泰弘（井草）

分掌主任の経験なし、学年主任の経験なし、教科主任の経験なし、文化祭担当、入学者選抜担当など、セクションリーダーの経験もなし、当然企画調整会議に参加したことなし。こんなないない尽くしの教員が副校長になってしまいました。もちろん、主幹教諭はおろか、主任教諭として学校に勤務した経験もありません。教諭から管候補となり、6年間指導主事等として行政経験を積んで学校現場に戻ったと言えば聞こえはいいですが、学校管理職の仕事を「その気」になって見たことのない者が昇任したわけです。私の知り合いにそんな人はいません。副校長として赴任するときの不安感は、現場の主

幹教諭から昇任する方には想像できないのではないかと思います。

それでもやるしかない。赴任初日は校長や室長、それに私を心配して？話しかけてくれる先生方にいろいろと尋ね、ついでに前任の副校长に電話したりもして、処理しなければならないと思われる仕事をこなしていました。「思われる」、そう、今、そして次に何をやらなければならないのか、誰も教えてくれません。指導主事時代は先輩や統括が細かく仕事を指示してくれたので、何をどういう順番でやればいいのか分からぬということはありませんでした。しかしここでは仕事の手順を誰も教えてくれません。

4月上旬は生まれて初めての企画調整会議、始業式、座る位置のために眺めががらりと変わった職員会議、そして入学式。緊張していたせいもあるのでしょうか、あつという間に、そして何とか無事に過ぎていきました。授業が始まっています少し仕事も落ち着き、生徒がいる学校はやっぱりいいなあなんて思い始めた矢先にあの事故が起きました。入選の採点ミスです。本校でもミスがあり、大変な思いで対応しましたが、学校は学校で日常が確実に進んでいます。健康診断、体育祭、中間考査、遠足…。めまぐるしい毎日という記憶しかなく、どんな日々だったんだか、今は日記や業務ノートを見ないとい出せません。

初夏の頃、学力向上と進路実績の向上を目的とした支援事業の対象校に本校が支援センターから指定されました。期間は2年間。私にとって大きな目標となる事業だと思いました。早速「井草高校学力向上プロジェクト」なる構想を練り上げ、提案しました。それに基づき予算執行計画を立て、ソフト面、ハード面ともに少しずつ環境を整えているところです。これは今後先生方の協力を得て、一層の充実を図っていきます。

先生方は大方が協力的で、比較的良好な関係を保っていると私は思っています。一方でそれぞれに信念があり、強く主張もします。やりにくいだろうと心配してくれる他校の副校长も少なくありませんが、私としては望むところで、できるだけ耳を傾け、情報を整理し、校長の判断材料にすべくまとめています。辛いのは、教

員同士で正論と正論がぶつかって、管理職がどちらかに判断しなければならない時です。いや、むしろそういうシチュエーションの方が多いかもしれません。双方の話を聞けば聞くほどどちらにも理があります。一方が明らかに間違っているということはそうはありません。そのような時に、より的確な判断を下せるかどうかが管理職としての重要な資質ではないかと思うのです。

教育管理職としてもうすぐ1年。ないない尽くしの言い訳は通用しません。2年目はどのような事態にも備てず対応できる、信頼される管理職にならなければならないと考えています。「あいつは嫌いだ。でも信頼はしている。」最高の褒め言葉ですよね。

副校长業務と教育行政業務との融合を目指して

竹内 藤夫（練馬工業）

都立練馬工業高校に平成26年4月1日付で副校长として着任しました竹内藤夫と申します。前任は、東京都教育委員会（東部地区の学校経営支援センター）に学校経営支援主事として5年間勤務してきました。久しぶりに学校に戻ったこともあり、毎日が新鮮な気持ちと緊張感と喜びが入り混じりながら業務に励んでおります。

午前7時30分出勤、T A I M S の起動とともに電気ポットのスイッチを入れ、メモ用の付箋を机上に揃えた後3本の鉛筆を削りながら前日までに確認した職員の動静と本日の予定を自作のホワイトボードに記入します。さあ、戦闘態勢は整いました。電話が鳴り、教職員からの朝の年休申請、生徒の欠席連絡の受け付け、各種処理簿への記入・押印及び担任等への伝達等を数分間で漏れなく行います。

午前8時20分、経営企画室職員に教員の年休等の報告した後、校門に出て朝のあいさつ指導がはじまります。通勤途中の地域の方からあいさつをしてもらうことも増え、時にはその場に立ち止まって、マナーが向上してきたことやあいさつする生徒が増えてきたことなど、学校にとって嬉しいご意見もいただけます。

午前8時30分、校長室での経営企画室長を交えた朝の管理職打合せがはじまります。平均2時間、長い時は午前中いっぱいに至るなど、校長先生から副校长研修を兼ねた打合せが毎日行われています。副校长が校長室に滞在する時間がこれほど長いこと、第二副校长からの報告は根拠に基づき数十秒で簡潔にしなければならないことを4月1日以降、身を持って知ることができました。以上が日常業務の流れです。

26年度も二人副校长配置の本校において、私が担当する業務は以下の通りです。①服務担当として教員に服務規律の周知・徹底を図ること②12名の年次研修者の管理・育成すること③主幹会議担当として年間10回以上開催し主幹教諭の経営参画力を向上させること④各種調査・報告担当として業務を割振り適切に運営していくこと⑤文書による意思決定による指導、正しい起案が立てられるよう人材育成を図ること⑥習熟度・少人数加配申請や交渉など9名の時間講師9名の市民講師に関する事務⑦生活指導・進路指導・工業に関する事務⑧教育課程の届出に関する事務⑨教職員の健康に関する事務⑩地域や上級学校との連携事業、等があります。

さあ、これからが先生たちとの対応や各種会議の準備・運営、T A I M S 端末等の対応となります。教育行政では、10以上の業務を受け持ち、優先順位を付けて進行管理しながら期限内に処理するよう教わってきました。もちろん副校长業務も同様です。諸先輩方からよく聞いたことのある「誰の担当か分からない業務は副校长」という声は、本校には存在していません。

工業科エンカレッジスクールである本校の教職員においては、平均年齢30歳後半で構成され、誠実で生徒理解に努める指導を実践するなど、学校経営に協力的な先生ばかりである。優秀な先生方が良い仕事をして、期日までに報告を受ける場面では、何よりも管理職としての喜びを実感できる時です。日頃の業務を通してのO J Tの大切さも再認識できます。

副校长として、間もなく1年間が過ぎようとしております。この職に着くまでにご支援いただいた上司の皆さま、共に働く教職員の皆さまに感謝するとともに、今後も感謝の気持ち忘れずに副校长業務と教育行政業務との融合を目指して自己研鑽してまいります。

「学校に副校长として着任して」

福原 利信（日野）

私は、管理職候補者として高等学校ではなく、教育庁指導部高等学校教育指導課に配属され2年間を過ごしました。学校で副校长の元、学校運営の様々なノウハウを学ぶ2年間、全く別な体験をすることとなりました。東京都全体、さらには、国のこれから動向を見据えて様々な施策が進められていることを学ぶことができました。

そして、この4月から副校长として学校に配属され元気いっぱいの生徒の声を聞きながら仕事をさせていただいている。着任してすぐに、個別職務命令書の発出や、休暇などの申請処理、さらには昨年度から引き続きの講師任用など様々な業務が始まりました。ああ、管理職候補者の2年間を学校で過ごせていればこういった業務も少しあは学べただろうと思うこともありました。分からることは、資料を探して調べましたが解決できないところは、前任の副校长先生や教育研究員の時に御一緒させていただいた事のある先輩の副校长先生にお聞きしたりしました。諸先輩方の御指導もあり、何とか4月を乗り切り、日常の業務は一通り行えるようになりました。

5月の連休が終わる頃には、日々のルーチンワークは軌道に乗りました。朝7時過ぎには出勤し、休暇簿、出張命令、メールの確認は始業時刻までには終わらせて、その日の業務を整理します。様々な、調査の多さにはびっくりしました。指導部の課長から、「学校にむやみに調査を出してはいけない。指導主事が持っている資料を調べれば答えられることは、学校に聞くべきではない！」と指導された言葉を思い出しました。教育課程や行事予定などは教育委員会に届け出ていますから、同じような調査はいらないはずです。でも、学校からの届け出が紙ですから、200校以上のデータを指導主事がまとめるのは大変なのです。指導主事の大変さも経験したからこそ、調査の回答には遅れないように、そして正確に回答しようと今も、頑張っています。

管理職として色々な事が分かってきたのは夏休みに入る前頃からかと思います。学校を運営

するには、校長、副校长がどんなに頑張っても実際に生徒を指導している教員が動いてくれなければどうにもなりません。また、50名近い教員にはそれぞれ、得意、不得意があることも分かってきました。一人一人の個性を生かして、力を発揮してもらえる場面を意図的に作ることが必要だと感じています。

本校は平成27年度に50期生の入学を迎えます。50周年という節目にこの学校に勤めている事を誇りに思い、更なる学校の発展のために自分は何をすれば良いのか、また、学校の力（教職員の力）をまとめていくにはどうしたら良いのかをこれからも考えていくつもりです。

副校长職は色々と大変な事もありますが、副校长協会の事務局の方、先輩副校长の方々に色々とお聞きしながら日々精進していきたいと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。

副校长としての7つの習慣

古溝 紀也（八王子桑志）

「立場や環境が変われば人は変わる」というが、管理職になると物の見え方や意識などが明らかに変わってくる。今まで何気なく過ごしてきた学校とは全く異なる環境である。ましてやタイプの異なる学校となるとなおさらである。副校长昇任の内示を受けたときに『八王子桑志』と告げられ、正直頭の中は「・・・？」、という状態。しばらく沈黙が続き、『どういう学校ですか？』と質問したのを覚えている。着任後も「日本初の産業科」、「デザイン分野・クラフト分野・システム情報分野・ビジネス情報分野」、「産業界で活躍する人材の育成」など未知ワードのオンパレード。救いだったのは2人副校长制の学校のため、隣の経験豊富な副校长に一から教えていただくことができたことだ。これは本当にありがたかった。ちなみに現在も継続中である。この生活の中で気付いたことがいくつもある。基本中の基本だが、「電話の受け答え」、「受話器の置き方」、「文字は丁寧に書く」、「ビジネス文書の基本」、「手帳の活用方法」等が全くできていなかったことだ。そして、「管理職の姿勢次第で学校は変わる。」ということ。校

長先生、先輩副校長先生の模範的な言動を間近で見て実感した。残念ながら私はまだその域には達していない。立場が変われば自然に変われると思っていたが、そんなに甘くはなかった。何とかしなければいけないという焦燥感との闘いの日々である。最近話題になった『7つの習慣』という本のなかで「人生の最後を思い描き、一日一日を行動する」ということが書かれている。人生をどう生きたいのか、自分なりのルールを決め文章化し実践することで豊かな人生を実現する。このことは学校運営にも言える。理想の学校を実現するための学校経営計画をふまえ、取り組みが瞬間ではなく習慣になったときに理想の学校が実現するのではないだろうか。そのためにはまず、私自身の7つの習慣というルールを作り、習慣化させたい。①主体性を發揮する。②目的をもって始める。③重要事項を優先する。④Win-Winを考える。⑤理解してから理解される。⑥相乗効果を發揮する。⑦刃を研ぐ。この7つのルールを実践できるよう努力したい。実際には日々の雑務をこなすだけで精一杯になりそうだが、この本の「成功の反対は失敗ではなく何もやらないこと」という言葉を励みに取り組んでいきたい。

「副校長に昇任して」

鍛持 利治（府中工業）

22Bとして管理職候補者となり、約1年少々の候補者研修と1年間の準備期間があり、今年度4月に昇任しました。研修では、副校長として必要な知識と心構えについて多くの事を学ぶことができました。昇任に向け準備万端という気持ちで約2年間を過ごしてきたつもりでした。しかし正直なところ心の中では期待よりも不安な気持ちが大きく、3月末頃は現実逃避していた記憶があります。

副校長への昇任で一番不安だった事は、職務が多くて休職される方や降格される方が多くいると聞かされていたことです。自分自身も本当に潰れてしまわないかとても心配でした。着任して早々、TAIMSの設定から始まり、休暇・職免処理簿、旅費システム、長期休業中の研修処理簿、入学式の対応、教科や病気休職等によ

り必要となった講師の手配とPASシステム。いきなりパニックに陥りました。何から手を付けたらよいか分からず、時間ばかり過ぎていきました。頭の中には「潰れるかも?」という言葉がよぎっていました。幸い、1学期中に提出しなければいけない書類等については、教務主任として培ってきた経験から、いくらかスムーズにこなすことができたのはせめてもの救いだつたと思います。

その後も、授業観察、自己申告書に基づく面接等、時間に振り回され1学期中は昼食を食べる時間も惜しいくらい目の回る状態が続きました。校長からは「昼食は絶対食べなきゃダメだよ」「早く帰りな」と気遣って頂くとともに、丁寧に分からることを指導・助言して頂けたのがとてもありがたかったです。

夏期休業に入り、ようやく日々やらなければいけない業務の見通しが持てるようになってきました。また職員の顔と名前が完璧に覚えられ、先生方とのコミュニケーションも増え、いわゆる「クラス（職員室）の担任」に近づいたと感じられるようになりました。精神的にも「潰れるかも」から「何とか職務をこなせる」という気持ちに変化してきました。

夏に実施されたベーシックプログラムでは、同期の仲間と職場での悩み相談や、お互い励まし合うなど、夜遅くまでゆっくり話したことで強い絆が生まれ、精神的にも楽になった気がしました。たった1泊の研修でしたがとてもすばらしい1日だったと感じています。それ以来、分からなことがありますればお互い連絡を取り合いながら、協力し問題を解決できるようになったと感じています。

現在、職場においては職員それぞれの性格や考え方も分かってきて、校長の学校経営計画の具現化に向け、少しずつですが取り組めるようになってきたと感じています。まだまだ道のりは長いと思いますが、より良い学校づくりに向け副校長の職務を遂行出来るよう努めたいと考えています。

今後とも、同期の副校長方との絆を深めるとともに、先輩の副校長先生方にご指導頂きながら頑張っていきたいと考えています。どうぞ宜しくお願ひ致します。

「第三の母校」

尾崎 肇（武蔵附属中）

私は、本校を「第三の母校」と考えています。第一の母校は自分の出身校（ちなみに多摩地区の都立高校）、第二の母校は教員としての初任教校（今はなき小松川高校の定時制）。そして第三の母校が管理職スタートの本校です。母校に誇りをもって、日々職務に邁進いたします。

と、この会報に書こう、と心に決めたのは2年前のことです。私は、学校から行政に出て指導主事・学校経営支援主事を経験しました。2年前の、任用審査に通った管理職候補者5年目。どこに配置されるかと期待し、久々に戻る学校に思いを馳せながら、管理職としての初任教校は私の第三の母校だ、そしてその思いをこの会報に書こう、と夢見ていました。

ところが、まさかの指導主事6年生を経験し、そしてやっと学校に戻ってまいりました。念願かなって学校に副校长として着任したのですが、喜びや楽しさを感じる余裕もなく、日々の業務に追われています。学校を離れた6年間のブランクは大きく、初めての副校长業務は分からぬことだけです。しかも、自分は高校籍でありながら、高校兼務とはいえ附属中学校の副校长として着任しました。高校とは違う中学校の文化、中学生の発達特性を日々勉強しているところです。さらに、募集対策では小学生とその保護者を相手にしています。「学校に戻った」というより、「転職した」といった方がよいのではないか、とさえ思ってしまいます。

そんな中、校長先生の御指導を受け、職員室の私の向かいの席にいる高校の副校长先生に教えてもらしながら、経験豊富な主幹教諭・指導教諭の先生や非常勤教員をはじめベテランの先生（自分の高校時代の恩師もいらっしゃいます。）に助けられ、若手の先生方に元気をもらつて職務に当たっています。私の机のデスクマットの下に、養護教諭の先生が描いてくれた、ドラえもんとアンパンマンの絵があります。その絵には「おざきせんせい がんばりすぎないでね」と添えられています。これまでの仕事の中で、苦しい時は家族を思い、「まだ幼い子もいる家族のためにも頑張らなくては」と奮起したものですが、ここで初めて「職員のためにも頑

張ろう」と思えるようになりました。ドラえもんとアンパンマンの絵を見ながら、職員のために今こそ頑張ろう、職員あっての副校长だ、と考えています。

副校长の仕事がこんなにも忙しく、学校には多岐にわたる業務が時には突発的に発生するとは、思ってもみませんでした。恥ずかしながら、ルーチンワークに忙殺されてしまい、学校経営や人材育成について熟考するような時間的・心理的余裕がないのが現状です。パソコンに向かい事務処理は増えましたが、その分活字が目に入らなくなり、自分の思いを語る言葉がやせ細ってきたような気さえします。（それはこの拙い文章をお読みただければお分かりでしょう。）それでも、子供たちのために、職員のために、家族のために、未来のために、まずは副校长1年目を健康に乗り切りたいと思います。そして第三の母校を無事卒業（？）できる日を目指して頑張ります。この場をお借りして、このような私ですが、今後とも副校长先生方の御指導、御鞭撻のほどお願ひいたします。

「延味 world」

延味 道都（多摩）

東京都立多摩高等学校副校长の延味道都でございます。4月1日に副校长として着任し、既に9か月が過ぎました。服務関係や調査物、そして各種申請と膨大な事務処理の中、9か月が過ぎた副校长として思ったのは、副校长には考える時間が必要であるということでした。

服務関係や調査物、そして各種申請は、仕事そのものとしては重要なものののですが、実は次のステップへの契機であることが少なくありません。次のステップはどのようなステップなのか、そして次のステップへと歩みを進めるための次の一手は何か、副校长として考える時間を日々の中で探し出す必要があるようです。現在の学校というシステムの中では、校長は理念を掲げ、副校长は校長の掲げた理念を具現化するために行動することとなります。そうは言つても、校長と副校长もそれぞれ別な人間、別な人格ですから、日々打ち合わせの時間を共有しても必ずしも同じように行動できるとは限りま

せん。校長の理念を展開するためには副校长の理念も重要であるようです。校長の理念を副校长としての理念の上で展開していくことが求められるように思います。ここでも副校长としての理念を考える時間が必要であると言えるでしょう。

さて、平成 26 年の秋に TAIMS が新しくなりました。私にとっては、新 TAIMS は旧 TAIMS に比較して非常に使い勝手も良く、本校校長である常國校長の言葉を借りると「延味 world」を展開する tool となっています。毎朝、教職員宛のメール便を出してその日の課題の共有を図り、必要な情報を転送することが「延味 world」の一日の始まりとなっているからです。「延味 world」の中では、「公教育は社会防衛の一端」です。生徒の進学への道を開き、生徒の経験値を上げてやがては社会のリーダーとなるように人材育成を行うことは、社会という集団を維持し持続可能な発展を生み出すという意味で公教育の持つ社会防衛に含まれます。一方で、高校をドロップアウトさせないように生徒を導き、卒業させて社会の一員となるように人材育成を行うことも重要な社会防衛です。「失う物は何もない、怖い物は何もない」人間を生み出さないことが社会防衛に繋がると考えているからです。「延味 world」の中では、経営企画室の職員も含めた教職員全員が、社会防衛の最前線で戦っていることになります。別の側面（例えば、「延味 world」では JET 教員はどんな在り方をしているのか、とか）は、別の機会にご報告したいと思います。校長との正直な意見交換を行いながら「延味 world」は進化中です。皆様には、是非、「延味 world」の進化にお力添えいただきたいところでございます。まとまりのない文章ですが、着任 9 か月目の報告とさせてください。

日頃から御支援をいただいている西武学校経営支援センター支所の皆様、西部Dチームの副校长の皆様に深く感謝するとともに、これからも御指導御鞭撻よろしくお願ひいたします。

「管理職としての仕事幅」

佐藤 信孝（小平南）

平成 26 年 4 月に小平南高等学校に新任副校长として着任いたしました。

まさに転職と言うに相応しい新しい職を得たと実感しています。着任以来 9 か月が経ちました。

昨年までの英語や第二外国語、異文化理解の授業や部活動を通じて生徒と共に歩んできたスタンスが懐かしく、着任からしばらくの間は、ふと複雑な想いに駆られる時もありました。

副校长として一学期、二学期の間、何とか日常業務をこなし、いくつかの危機的対応を乗り越えてきました。校長先生からはあるべき管理職としての姿を、折に触れ丁寧にご教示いただくと共に、経営企画室の方々からも様々なサポートをいただいています。その中で徐々に管理職としての新たな職に馴染んできた自分を感じます。まだまだ不十分な業務処理に加え、先を見通した業務進行管理も十分とは言えません。多忙で仕事がこなしきれず悄然とすることもあります。

それぞれの校務分掌を所掌してきたこれまでの自分の仕事のふり幅を、学校全体のそれへと意識的に大きなものにすることで新たな視点と職への覚悟をより確かなものにしつつあるところです。

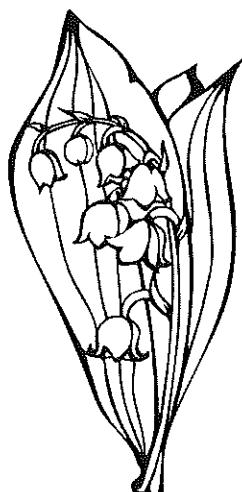
仕事の幅が広がることの中でやはり最も大切なことの一つは学校の危機管理とその対応だと感じています。誰かがやってくれるのではなく、自分がやるのだと。それが副校长としての大きな職責の一つだと実感しています。様々な災害・防災訓練、さらには日々の事故や苦情を的確に処理することから始まり、未然防止の研修まで、学校が十全な教育活動を遂行していくためには日々が平穏に過ぎていくことが最も大切なことです。当たり前のことはありますが、これを確実に守り通すことを、自分の仕事幅の中で常に高く意識しておこうと思っています。

本校は現在、学力スタンダード推進校としての先行的取り組みに加え、27 年度には最終年度となる重点支援校としての指定を受けております。また、この 3 月よりいよいよ校舎大規模改修が実働いたします。プレハブ建設から始ま

り、最終的なグランド改修整備までを含め、完了までほぼ4年を要する大規模なものです。

日々の業務を的確に処理することは言うに及ばず、学校の現状を正確に把握しながら将来を見通すことが常に求められる現場に関わっていると考えています。

自分一人の力では何もできないことを肝に銘じ、謙虚な気持ちで副校長として人を束ね、人を生かし、自身の更なる人としての成長を目指し、前向きに進んでいきたいと思っています。このような所信表明の機会を与えてくださり有り難うございます。改めて自分の仕事を見直す良い機会となりました。今後とも皆様方の御指導御鞭撻の程どうぞよろしくお願い申し上げます。



東京都教育庁指導部

主任指導主事 佐藤 聖一 先生

東京都公立高等学校副校長協会平成 26 年度の総会開催にあたり、東京都教育委員会を代表して一言御挨拶申し上げます。

はじめに、これまで東京都公立高等学校副校長協会が東京都の高等学校の教育の振興・発展に多大な貢献をしてこられましたことに対し、深く敬意を表するとともに東京都教育委員会の施策について日頃より御理解と御協力をいただいておりますことに厚く御礼申し上げます。各学校の副校長先生におかれましては、校長先生を補佐し、各学校で生徒を指導し、保護者・地域の要望等を把握されるとともに様々な課題解決に向け、組織のマネージャーとしての力を発揮していただいている他、学校経営計画に示された目標の実現、外部の方と学校を結ぶ窓口という役割、そして先生方の相談を受けたりするなど々々に御対応いただいているところでございます。

さて、経済・社会のグローバル化、情報技術革命、地球環境問題、少子高齢化など社会環境の変化が激しいこの現代において、これらの課題に主体的に対応し我が国の未来を担う人間を育成する教育が何より重要でございます。平成 24 年 2 月に都立高校改革推進計画第一次実施計画が示され、平成 25 年度はその計画に示された事業のそれぞれが本格的に動き始めた年であります。また、今年度から英語教育の改善や JET、JICA 等新たに国際教育の推進に関する事業が動き始めております。この事業は国際社会の一員としての自覚を持ち、世界を舞台に活躍し日本の将来を担う人材を育成するため、多様な文化の理解、英語力や広い視野、社会貢献意識の育成に取り組み国際貢献意識を高めるほか、将来的な海外へのチャレンジに結びつける教育を推進していくものでございます。様々な

状況の中御協力をいただいております。本当にありがとうございます。各学校におかれましても、副校長先生の御尽力と教職員の総力を持ち、事業の推進にまい進していただきたいと考えております。

さて、今年度は平成 26 年度全国高等学校総合体育大会、インターハイが 39 年ぶりに東京で開催されます。本大会は「君の汗、輝く一滴勝利の零」をスローガンに 8 月 1 日から 20 日までの開催期間に南関東 4 都県が連携して様々な競技を行ってまいります。東京都では 7 競技が実施される予定でございます。都立高校におかれましても競技への参加やボランティア活動を通して生徒の育成、部活動の活性化に繋がればありがたいと思っております。御協力をお願いするとともに、東京インターハイを盛り上げていただければと思います。

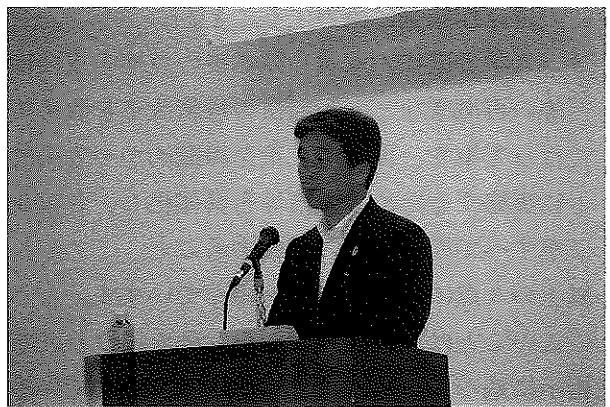
東京都公立高等学校副校長協会におかれましては平成 23 年度に東京都立高等学校の全日制副校長会と定時制・通信制副校長会が統合し東京都公立高等学校副校長協会としての組織づくりを行いました。各学校の充実した学校経営を推進するため総会をはじめとして研究協議会を開催し、生徒・保護者の期待に応える学校づくりを行うために学校が解決しなければならない喫緊の課題に対する調査・研究を行い、その成果の共有化を図ってまいりました。多忙な職務の中で御尽力をいただいている副校長先生方、そして事務局の方々に厚く感謝を申し上げます。

結びに今後も副校長先生方が益々活力あふれる姿で活躍されるとともに、校長先生とともに生徒・保護者の期待に応え、魅力ある学校づくりを推進いただきますようお願いを申し上げます。東京都公立高等学校副校長協会の益々の発

展を祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

(文責：事務局)

これは、平成 26 年 6 月 14 日（土）に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での東京都教育委員会挨拶の内容です。



10(2) 挨拶

東京都公立高等学校副校長協会

会長 都立墨田川高等学校長 柴田 哲 先生

ただ今、ご紹介された、東京都公立高等学校長協会会長の柴田です。

副校長協会の総会に際し、挨拶をさせていただきます。

今、都立高校は、先日の3日（火）のプレス発表で「都立高校の入学者選抜における採点ミス」について報道されました。

東京都教育委員会の一次調査では、

平成26年度入選において

誤りのあった学校数 146校 / 175校中

誤りの件数 1,139件

追加合格校数（人数）10校（12名）

平成25年度入選において

誤りのあった学校数 109校 / 127校中

誤りの件数 1,072件

追加合格校数（人数）6校（6名）

という状況でした。

翌4日（水）には、臨時校長連絡会が開催され、比留間教育長から「高等学校と教育委員会が双方向で信頼回復に努める」「高等学校は何をすべきか。何ができるか」「制度を変えても最終的には学校現場の人が変わらなければ実効性が伴わない」とのお話があり、校長の責任の大きさを再確認いたしました。

また、校長協会としても、

- 1 都立高校入試改善特別委員会を設置し、今回の課題への対応策を策定するとともに、採点上の誤りについて、採点実施の視点から調査・分析を行い、実効ある再発防止策を構築して都教育委員会に提言すること。
- 2 採点上の誤りの全容を一日も早く明らかにするとともに、合格となるべき受検者がいた場合に速やかに追加入学が可能となるよう、校長をはじめとする各学校の教職員が率先して現在東京都教育委員会が実施している答案

の確認作業等に協力すること。

3 入学者選抜の意義や採点後の点検の重要性等の再徹底などの教職員の意識改革を改めて行う方策や、再発防止策を組織的かつ効果的に実施するための方策等を具体化し、各校長がすべての教職員に徹底すること。

以上の3点に主体的に取り組んでいます。

このことは、校長先生からお聴きになり、ご指示に基づき、様々なご対応に取り組んでいることだと思います。

実は、本校では、昨年の平成25年度入学者選抜の学力検査で大きなミスを起こしました。正解を誤答と採点し、合格者を不合格者として発表してしまったことがありました。

忘れたくても、忘れることができません。

ミスが分かり、受検生と保護者の方にお会いしたときに、保護者から言われた言葉です。

子供に向かって「おまえは、こんな小学生でも間違えないようなことを間違えている先生のいる墨田川高校に行きたいのか？」子供は「お父さん、私は墨田川高校に行きたいです」お父さんから「子供が行きたいといっているので、入学をよろしくお願ひします。民間なら当たり前のようにすぐ対応するが、公立学校の先生はなかなか対応してくれない。校長先生は民間のようにすぐに対応したので、言い過ぎたがこのようなことを言った」と言われました。

忘れたくても、忘れることができません。

入学者選抜における副校長先生の役割は、進行管理です。副校長先生が元気で、てきぱきと職責を果たすことで、採点ミスを防ぐことができます。

ですから、先日の「地区対策会」で校長先生にお願いしてありますが、改善案の提言を是非ともお願いいいたしまして、校長協会の会長の挨

拶とさせていただきます。

(文責 事務局)

これは、平成 26 年 6 月 14 日（土）に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での東京都公立高等学校長協会挨拶の内容です。



10(3) 講 演

「副校長に期待すること」

講師 前都立葛飾総合高等学校兼本所工業高等学校長 三田 清一 先生

本日は、「副校長に期待すること」ということでお話ししたいと思います。時間が短いので簡潔になると思います。とにかく私が校長をやっていて副校長先生にすごくお世話になったと思っています。色々なことをお願いした時に時間を守ってすぐ対応していただいたりしたこと、それはとても重要なことだと思っています。対応を忘れないこと、そして期限を守ること、あるいは先生方からの相談とか私も含めてですけど、相談を受けた時にいくら忙しくても対応していただいていること、それら3つですかね。すぐ対応すること、期限を守ること、忙しい中でも先生方の相談に対応していること。そして、フットワークではないんですけども、一番大切なのは朝の挨拶だなと思っています。やっぱり朝会ってすぐ、もじょもじょもじょって挨拶するよりも「おはようございます。」ときちんと言って元気を伝えていく。これは後で言いますけども、色んな所で色んな格言を自分の経営理念、あるいは自分の生き方の1つとして実践しているんですけれども、こういうのがあるんです。社長の、これは校長と読み替えてください。社長の元気以上に職員は元気にならない。職員の元気以上に会社は元気にならないって言っています。だから、校長が副校長が朝からもじょもじょもじょと言うぐらいだと教員はもっとトーンダウンしますよね。それ以上にもっと学校は元気にならないんで、もうやけくそでもいいので私はできるだけおはようございますって大きい声で御挨拶しています。

受け身か挑戦的かということについてですけれども、私自身学校に行ったら自分の細かな仕事は出来ないだろうなと思っています。例えば出勤して校長室に入った途端、副校長先生もそ

うだと思います。座った途端に今日はこれとこれとこれをやろうと思っていた、書類を作るとか色々考察をするとかという時間はすぐなくなってしまうんです、先生方がどんどん校長室に来て。ですから受け身か挑戦的かというのは副校長先生方もされていると思いますけれども、頭の中で今日学校に行ったらこれとこれとこれをやって、これをこの人にお願いして、これをこの人に分担しようというような作戦を練って行くと、学校に行った時に先生方や副校長が校長室に来る前に、私としては呼んで、あるいはそこに行って、これこれやってというふうに段取りが進むんです。ですからやっぱり副校長先生方はもっとそうだと思いますので、ぜひ受け身というよりは挑戦的に先を見て依頼していく、分担していく、割り当てていく、そんなことが必要なのかなと思っています。私は行政にもいましたが、行政の先輩を見てて、私が1年目くらいの時ですね。出勤して私が仕事をしていたら、出勤した先輩の指導主事が何してるかなと思ったらもう帰る準備をしてるんですよ。来てすぐ帰る準備。何でかというと、午後出張があるのでいきなり学校や都民や区民から苦情があるといけないから対応できるようにいきなり帰る準備をしている。そういう状態の中で日々の仕事をやっていた訳です。みなさんは既に挑戦的にやっていると思いながら言うんですけども、学校に行って一つ一つのことをじっくりというのは出来ないと思いますので、今日行ったらこの仕事をこの人に任せて、この人からこの意見を聞いて、この書類を集めてとかそういうふうに戦略的に進めたらいいのかなと思っています。

あと、ピンチはチャンスということで私はそ

う思っているんですけれども、この通りですね。1校目に校長として着任した学校で、行った時に土曜授業をやってなかつたんです。けれども、やるって言った時に猛反対が来るんですよ。教員からだけじゃなくて、校庭歩いていると部活動のジョギングをしながら「土曜授業反対！」って言う生徒がいたりして、それは結局先生が言っているわけですよね、きっと。それとか、職員会議で今度來た校長は鈍感だからと言われちゃったり、先生がいきなり机を叩いて出でていっちゃったり、あと頑張っている主幹もいたんですけども。そういう人がいる中で実際困りましたよね。さっき長江先生が言っていたように私自身が支援センターで校長先生、副校长先生にこうやってこうやってこうやんないといけないよと指導・助言していたのに、反対する人ばかりで。でも、ピンチはチャンスだというのは何かというと、その中でも副校长とか管候補の主幹の先生がやっぱり味方になるんですね。先生、こういうふうに学校を変えていくよということで、職員会議の後、企画調整会議の後、企画調整会議も順風満帆じゃないので、校長室に残って作戦会議することによって、校長・副校长・管候補がお互いに意思疎通が図れて結果的に1年で土曜授業を実施できるようになったし、また、ピンチはチャンスだというのはその年の昇任選考は全員受かっちゃったんですよ。要するに苦労するとその苦労が文書に表れたり、行動に現れたり、学校の変化に現れる。ですから、ピンチはチャンスで色々な課題がある方が逆に言うと色んなことに取り組みやすいなどプラスに思った方がいいと思います。

葛飾総合は二人副校长がいたんですけども、二人副校长から一人になった時に残った方が、「校長先生やっていけません。講師と市民講師合わせて30人くらい、教員も50～60人いて出来ません。」と言った時にその副校长に言ったのは、「いや先生、これはピンチはチャンスなんだよ。二人いれば色々な情報が二人に来たり、なかなか調整が難しいことがあるけれども、一人になったら全部先生のところに仕事

行くよ。でも、それだけ先生の力が發揮できるんだよ。」ということでお話ししました。見事、5月6月になつたら「先生、何とか頑張れそうです。この方がやり易いです。」と。要は、全部情報が自分のところに来るんですよ。だから判断もしやすいし、先生方とのコミュニケーションも取りやすいということで、そのまま選考を合格していきました。だから苦しい時はあるんですよね。私も教員時代、前にどつかで言っているんですけども、ある学校の駅を降りて、すぐ向こう側のホームに行って乗ればすぐ帰れるなと思いながら通つたこともありますし、校長になってからもあります。どうしようかなと考えて眠れない時。あるいは教育庁にいた時にも、当時の教育庁次長（教育長の次に次長がいるんですけども）が、当時私は主任指導主事で部活動の検討委員会を色々な区市の教育長に参加してもらいやっていた訳で、区の教育長とか部長とか定期的に集まって半年以上やっているのに、報告書のたたき台を持っていったら首を傾げてるんです。それで一言「これはお蔵入りだよ」と言われて。お蔵入りということはこんなのが出せないよということで、悩みましたね。どうしようかなって。職は辞せないし、温泉入りながら空見ながらどうしようかなって。それでも温泉は入っていたんですけども。そんなことがありました。ピンチはチャンスで忙しければ忙しいなりのやり方とか方法とか、周りで見る人は必ず見るのでそれを手を抜いてはいけないなと思っています。

次に管理職、自分でやって・・・ですが、これも色々な所で言っているんですが、管理職自分でやって半人前、人にやらせて一人前ということです。管理職はもし全部自分でやってたら絶対に上手くいかないので他の人にやってもらつて一人前です。要するに組織が大きくなればなるほど人にいかにやってもらうか、それが問題だと思っています。

そこに方策が4つ。一つ目が解決への道筋をなんとか示してあげるということです。それで今日配つてもらった一つの枠の大きな資料（平成25年度学校経営計画構想図）を見てください

い。右に平成 25 年 4 月と書いてあるものです。1 校目の時にもこういう形で示したんですが、これは 1 年前のなんでちょっと古いですけれども、要はそこに解決への方策等、具体的にやりたいことが書いてあって、それをどういうふうにやっていくのか。一番上からミッション、ブランド、目指す学校像、そして下に学力・キャリア教育・人間性・学校経営、一番下に生活指導が書いてありますけれども、こんなことをやっていくんだぞとそれを示していく。先生方は副校長ですけれども、副“校長”ということですから、やはりこういうような視点をぜひ持って学校経営に取り組んだ方がいいのかなと思っています。

2 番目です。目指す生徒像・学校像等目標となる夢を示す。これも同じです。そこに書いてあるようなことです。先生方に職員会議でいうのは、こういう学校を作りたいからこういうことがしたい、だからこういうこと必要でしょと繰り返し言っています。そんなこと言ったって先生方変わんないよと言うかもしれないけれども、子供のために、あるいは学校のためにということをある時に職員会議でみんなもう分かっているからこういうふうにやってくださいと言ったらすぐに反発が来ちゃったんです。やっぱり毎回毎回子どもの学力を伸ばすために、子供の人間性を伸ばすためにぜひこうすることをやっていきましょうって毎回付け加えることで先生方もそうだよなど。だからそこを目指す学校像とか生徒像を必ず示さないといけないし、逆に言うと校長の作る学校経営を受けながら、副校長先生も当然目指す学校像・生徒像あるわけですから、常に言いながら、だから必要なんですよ。私が良く使ったのは、学力を高めることについては子供たち一人ひとりの可能性を伸ばす必要があるでしょ、あるいはより質の高い大学に行けばそれだけその将来の選択の幅が広がるでしょ、それが学力。生活指導については、生活指導がきちんと出来ないところで学力が伸びる学校はないというふうに言い切っています。要するにそれが出来なきやダメだよというふうに言っています。もう一つは忙しい

忙しいと言う先生方いるんですけども、それについて私は忙しくない学校はないと、忙しくない学校はかなりひどい学校でどの学校も学力差があってもやっぱり忙しいんですよと言しながら、目指す学校像を、ここはいかに先生方を動かすかというところですからそういうふうに言っています。

それと 3 番目は教員を育てるということで、これは先生方に選考を受けてもらうとか外部の研修に行ってもらうとか、論文を見てあげるとか、育てるということがとても仲間を増やすことだなと思っています。1 校目の学校にしろ、葛飾総合にしろ、やっぱり育てた先生が非常に頑張ってくれたなというふうに思っているところです。次に、先生方どうですかね。困った時に本当に助けてくれる先生って何人ぐらいいますでしょうかね（副校長先生方にその場で挙手してもらう）。3, 4 人がやっぱり多かったです。5, 6 人は数名、2, 3 人も数名ですね。私の経験の中でも、学校を変えていくっていう時には、やはりそういう人数だったと思います。それはやっぱり管候補であったり、あるいはなんとしても学校を変えていきたい人であったり、そういう人たちが中心になっていると。ぜひ教員を育てる中で伸ばしていくということですね。

そして、4 番目の多くの教員の話を聞き活かすというのは、先生方に何か関わらせなきゃいけないということです。1 校目の学校で、当時新しい取組をやろうと言っても受けてもらえないで、学力をどう高めるんだと言った時、先生方の反応はうちは学力だけじゃないんだ、豊かな人間性、大らかな中で人を育てるんだというんですけれども、どうしても受け入れられないんですよ。それで下の真ん中のやうなもの（将来構想図など）を出して、じゃあ意見交換会を 10 月にやろうということで、意見交換会は自由参加、みんなが出れるように。そしたら、42, 3 人のうちの 14, 5 名出てみんなに言ってもらったんです。そしたら、なかなかみんなお互いいん制して言わないんですよ。そしたらあるすごく生真面目な先生がぼそぼそと言った

のは、「校長先生、入学してくる生徒は学校行事や部活動を楽しみに入ります。ですから、募集の段階でもつとうちは学力を高める学校だって言ってくださいよ。言った方がいいんじゃないですか。」って言ったところから変わりましたね。私自身が変わったし。個人的にそういうことを言う人は結構いるんだけども、大勢のいるオープンな会議の中でそれを言ってくれたのはとても大きかったです。ですから、それから私も学校説明会など、色々な所で、本校は学力を高める学校なんですよ。それだけじゃなくて他のことも言いますけれども。そういうような先生方の意見を聞いて活かす。ですから、困った時には結構意見交換会というものが役に立つかなと思います。学運協なんかも役に立ちます。学運協であるPTAの方が会議の中で言ってくれたのは、「生活指導と言っていますけれども、やはりまだ弱いところがあると思います。」と。それを聞いて職員会議やいろんな所で言いました。副校长や校長の意見と同じような外部の意見やそういうような先生方の中の意見はすごく活かしていったような気がしています。それが多くの話を聞き活かすということです。

教育委員会との関係では、私自信が学校経営支援センターや教育庁などにいたことから、学校経営支援センターをあるいは教育委員会を味方にしていくことが必要だと思っています。私は、副校长を結構叱ってきたんですけども、1校目の時にすぐに叱ったのは、着任した時には、すごく学校のあらが目立つんすけれども、正面に支援センターの方が座って、副校长に聞くんですよ。どうですか、学校は上手くいってますかって。「上手くいってます。学力向上も頑張ってまして・・・。」等と言うから、その場ですぐに叱ったんですよ、センターの人がいる前で。そんなことないじやん、いつも打合せの時にダメだダメだって言ってるのに何言ってるんだって言ったら、支援センターの人は笑ってましたけども。だから、嘘ついちゃダメなんですよ。悪いものは悪い、良いものは良い。もうみなさん、今の学校に行って何年か経っていると思うんで、着任した人はこれから

まだ言えると思います。今、学校の課題は着任したばかりの人は自分の責任じゃないわけですよ。それを一たび、言うのを待っちゃったらもう先生方の責任になっちゃう。だから、着任すると色々良い場面とか悪い場面とかちょっと気になる場面あるんですけれども、それは着任したばかりではみなさんの責任ではない。ところがそのまま踏襲していくと皆さんの責任になつてだんだんやらなくなっちゃう。だから、教育委員会の支援を得るためににはやっぱり事実を見てもらって事実を伝える、事実を言ってもらう、助言をもらう。ただ、助言を全部そのままやらなきゃいけないということではない訳ですから。また、センターの人にもこういうことがこうなんですよねっていう話は分かってくれます。教育庁はなかなか遠いから見えにくいですけれども、自分もいたことがあって、支援センターの人に相談すれば必ず本当に支援してもらえると思っています。それが教育委員会とのかかわり。

マネジメントとリーダーシップということでそこに書いてあるように、マネジメントというのは簡単に言えば上手くやっていくこと。その下のHow toなんですよね。リーダーシップというのはWhat toといつて何をやるか考えることです。副校长としてやるべきことは、How toは主幹、先生方に任せても助言すればできると思うんですけども、副校长にはWhat toを言ってもらわなければなと思っています。要するに何をやるのか。さっきの表じゃないですけれども、目標を作つてあげて何をやるかというのが管理職、副校长・校長の仕事だと思っています。ぜひ、そこを重点的にお願いできればなと思っております。あと、こんなことがあったんです。実は葛飾総合の方で重点支援校を希望したんですけども、ダメだった時があったんです。重点支援校を希望してダメで、一生懸命中心になって努力していた人に残念だったよねつて言った時に何を言ったかというと、「校長先生、これから何を目標に頑張つたらいいんでしょう。」と、当然すごく落ち込んでいるんですよ。要は一生懸命やる先生というのは目標を

示してあげることで頑張れる、変わつていけるんだなって思つて、すぐに次の職員会議で重点支援校でやろうとした同じようなことを独自に学校でお金掛かんないことをやっていくんだということを示しました。そこがマネジメントとリーダーシップでやっぱり目標を示すことはとてもいいリーダーシップになると思っています。

次に解決策の引出しを増やすということです。解決策の引出しを増やすということについては、先ほどの先生方との意見交換会とか副校長会、あるいはSWOT分析等をするんですけども、一番結構具体的にできるのは、「見える化」なのかなと思っています。葛飾総合にいた先生もいるんで分かると思うんですけれども、資料のキャリアアッププログラムってありますよね。これ何がいいかというと、私が行った時に色んなことを学校で頑張つてやつてるんですよ。だけども、それぞれの分掌や教科がバラバラにやってて長くいる人には分かるんだけども、行つたばかりの校長には全然分からなう。それで誰か作ってくれるって言つても、副校長も忙しいんで、自分で作り出したんです。横が時系列、これは総合なんで縦は系列ですけども、普通科であれば教科でもいいと思ひますし、分掌でもいいと思ひます。まずは全然内容が分からうんで、各系列・教科に何やってるんですかって聞いてそれを一つずつ入れたんです。それを企画で出してみるんですよ。そうすると、先生方は基本的に真面目なのでやつてゐるのにそれに載つてないと、「先生、これやつてます。これやつてます」ってだんだん増えていくんです。やっていくと何か、見える化を進めることで実はやつてゐるところも、やつてないところもばれちゃうよね。最初からそういう狙いもないわけじやなかつたんですけれども。先生方の学校で、もし、学力を高める方策、あるいは各教科の力を高める方策、何でもいいので焦点を当てて時系列と教科、このような見える化を進めることで、課題を先生たちが主体的に考えようになつてくると思います。必ずやつても載つていない場合は先生方が言つてきま

すので、そこは見える化を進めることのすごくいいことだなと思っております。私が見える化を進めたのはこのキャリアアッププログラムだけじゃなくて、生徒の学力とか土曜講習の参加者の数とか学校説明会の参加者数とか、あと夏の講習会の数です。一回こうやってフォーマットしますと、例えば土曜講習の参加者なんか一回自分で出したんですよ。すると主幹が「校長先生、このフォーマットをもらえますか」と言って今でもおそらくそれを続けて出していると思います。だから見える化をすることで少しづつ形になっていくのかなというふうに思つています。あと、通知文を活かすというのも、通知文が私たち管理職のやることを進めてくれると思っています。

管理職の姿勢が問われるということで、人にやらせてなんぼなのに率先垂範って言うんですけれども、やっぱり率先垂範は必要だと思っています。先生方もやってるんですけども、特に私がやっていたのは校長の時だったら、ゴミが落ちていたら拾う、どんな小っちゃいゴミでも拾うと。今でも学校で見つけたら拾つてゐるんですけども、拾うことでその大切さを示したり、全校集会のときには1校目も葛飾総合もどっちかというとちょっとうるさかつたんです。だから静かになるまで喋らない。校長が全校集会で話している時に生徒が喋つてゐるのを見過ごしたら、授業規律きちんとやつてくれと言つても絶対聞かないでそういうことをやつたり、あと授業観察もチャイムが鳴る前に必ず行くように走りました。あとは会議の時間等も絶対守る。そういうのが率先垂範ですかね。あと、こだましようかというのは、これは金子みすゞの詩ですけれども、(小さく)おはようございますと言えば相手も(小さく)おはようございますと返してきます。(大きく)おはようございますと言えば相手もそれに応じて返つてきます。こちらがエネルギーを持ってお願いすれば、相手もエネルギーを持って返つてきます。そういうような形のこだましようかです。あと、肝に銘じてるということは、職層が上になればなるほど、忙しいということです。です

から校長が仕事が終わらない時でも、副校長が先に仕事が終わったら先に帰つてもらっていました。やっぱり職層が上になればなるほど忙しいということは先生方も分かっていることだと思います。

あと、全国高校総体なんですが、全国高体連の会長を4年間やっていた中で、生徒一人一役運動というのがあり、これまでの高校総体で全国の高校生が一生懸命に立派に取り組んでいたことを感じており、今度8月1日に東京都で開催する高校総体においても、ぜひ東京都の子供たちの一人一役運動を支援してもらいたいと思います。現在でも会長は辞したんですけども名譽顧問になっておりますので、PRとなります。子供たちにぜひ活躍の場を与えて、高校総体を支援してもらいたい。そうすれば運動部活動は活発になりますし、文化部の活躍の場ともなると考えています。また、高校総体という目標があるから生徒一人一人が、また、一つ一つの学校が部活動を頑張れるというふうに思ってもらえばなと思っています。

舞台裏ということでいうと、会長をやっていて大変だったのは、開会式の日にすごい大変なんですよ。朝起きると開会式の会場に行く。それでやることは文部大臣やスポーツ青少年局長、県知事、市長等の対応、そして皇太子殿下への対応ですから、名譽なことですがやっぱりストレスのかかる仕事ですよね。朝起きて陸上競技場に行くと部屋に行って、皇太子殿下が例えば9時58分にお見えになる。その時間通りに動かないとあとで当然問題になっちゃうんです。だから、陸上競技場の入り口に立って皇太子殿下が警察に守られながらお見えになるのを待ってるんです。主催者なんで先頭なんです。初めての時はすごく緊張しましたよね。来ちゃった来ちゃったと思いながら、私に向かって来るんです。自分自身は「全国高体連の会長の三田清一です。よろしくお願ひします。」って言って、その後、後ろに文部大臣とか並んでいるんですけど、「歓迎の皆様です」と言って案内して、もう所作は決まっているんです。そこから今度は陸上競技場の控室までずっと行く

んですけど、それも100m、200mあると皇太子殿下の右斜め2、3m前で少し楽しい会話をお話ししながら、こっちは緊張してるから楽しい会話なんかそんな出来ないです。一昨年、総体が新潟であったんですけども、長いんですよ。100m以上、あちらの信濃川の向こうに見えるのがなんとかなんとかでとか、そんなの覚えてられないのに喋りながら。そして今度はエレベーターがあるとご案内する。さらに途中に階段があるんですよ。そうすると慣れないんですけども、「お足下に段差があります」って言うんだけど、そんなこと言いながら自分が躊躇したり、そんなことしながらご案内して、今度は開会式ですね。開会式ではご挨拶してという状況です。とにかくストレスがかかる仕事でした。でも、それをやることで学校の職務に迷惑を掛けちゃいけないということで必死でしたよね。もう一つは舞台裏ということであれば、非常にためになったのは、NHKもそうですけれども時間に厳しいんですね。だから私自身もそういうふうに慣らされたと思っています。

あと、体罰防止についてですけれども、そこに書いた「巨人の星」は過去のこと。巨人の星を知っている方多いですよね。巨人の星では父の星一徹がバンバンバンバン殴ってましたけれども、あれはもう過去のことで、ただ30年前、40年前は法律では決まってたけれども、時に社会的な容認する風土もなくはなかった。でも今はもう絶対できない。

しかし、文部科学省の会議を行った時に高校、中学校では体罰は絶対だめだけれども、例えば「柔道の時に激励するような、ほっぺを叩くような、それはやっぱりあってもいいんじゃないかな」等という意見もありましたが、結局やらないようになりました。もしトップレベルのスポーツにおいて身体を叩くようなことがあつたら、私は高校生に柔道とかそういうものの全国ネットでやるテレビは見ないように言いますよ。だってトップアスリートがそんなことやつたら、中学、高校で叩いて悪いなんて言えないですよね。

セルフコントロールってあるんですけど

も、ダメだって分かつてもやっちゃん人がいるってことは私自身も経験しましたけれども、ホントに自分自身が肝に銘じましたよね。叩いちゃいけないのは分かつてるじゃないですか。でも叩いちゃいました、ここまでいいじやないかという人がいたんですけども、それはダメなんですね。それを私はどういうふうにしなきゃいけなかったかというと、生徒の個別指導をやるところを限らせたり、管理職の個別対応に加えて学年や分掌等でも対応したり、そういうことを考えたところです。

まとめとしてはそこに書いてある、「努力する人は夢を語り、怠ける人は不満を語る」ということです。やっぱり努力しようとする人は集まって夢を語るけれども、怠けようとする人は不満ばかり語ってる。それからもう一つ、これは私自身ですけれども、「昨日より今日、今日より明日」ということです。高校時代にバスケットやってたんですけども、一生懸命やっていたら顧問が「三田はキャバはあるけど覚えるの遅いんだから、早めに取りかかれ。」と言われたのがずっと40年以上残っています。ですから、昨日より今日、今日より明日。あと言われたのは「準備の三田」って言われました。準備は必至にするんです。今日ここに来るのも、この会場についたのも20分前ですけれども、水道橋に12時に着いてたんです。12時に着いて、長江先生から厳しく指導を頂いていたので遅れちゃいけないと思いながら来て、お話しさせていただきました。

もう一つお渡しした資料の中で2年分の将来構想を示した資料がありますよね。これは2年間の計画なんですけれども、退職まで2年しかなかったので24、25と2年間だったんですけども、着任した時にすぐ3年間のを作っています。とにかくこれも1校目に着任したところで言われたんですけども、色々言ったら「校長は将来のことを考えてるのか」って言うんですよ。それで1週間で3年構想版を作ったんです。ちょっとずつ変えればなんとかなったんですけども、厳しい先生方に鍛えられながら頑張れたのかなと思っています。

いくつか私の役に立った格言みたいなものを伝えますと、こういうことがあります。短いものでは、風が無くとも前に進めば向かい風。仕事苦しいなと思ってるけれども、前に進めば向かい風ということです。前に進まなきや風も来ないということです。あともう一つ、何か改革しようとするうちの学校の伝統はこうなんだという先生に対してはこういうふうに言うようにしています。村田吉弘という京料理の重鎮がいるんですけども、この村田さんは「伝統を守るということは同じことをしていたらダメだ。だから日々革新だ」と。よくうちの学校の伝統はこうだからこれでいいんだ、じゃないんですね。京料理がもし同じ味で、同じものだけを作ってたら滅びてるでしょうと村田さんは言っています。やっぱり日々色んな材料を使ったり、見栄えよく考えている。それが伝統を守っていくということです。

私が推進してきた経営の考え方の中に、C・A・ガーフィールドっていう人の経営論があります。ガーフィールドは、優秀な能力を発揮した人たちのアンケート結果をまとめ、示したわけですが、特に紹介したいことは2つあります。一つが一生懸命私も必死に仕事してたんですけども、ワークホリックになるなということです。仕事ばかりじゃないよ。土日は遊べ。どんなに忙しくやっていても土日は出来るだけ死守してジョギングしたり水泳したりそういうことをしています。ただあんまりそれを言っちゃうと、さっき言った率先垂範しなきゃいけないし、校長は言うだけ言って、あるいは副校长は言うだけ言って自分だけあんなに休んでと思われちゃいけないんで、それはうまくバランスを取って。もう一つは、もし心あたる人がいたら申し訳ないんですけども、人があまりにもくつろいで心地よさを感じる場や状況を無くすように。要するに心地よくいるような場を無くすようにということは、日々何かストレス（仕事の指示や進行管理など）を与えるということだと思います。

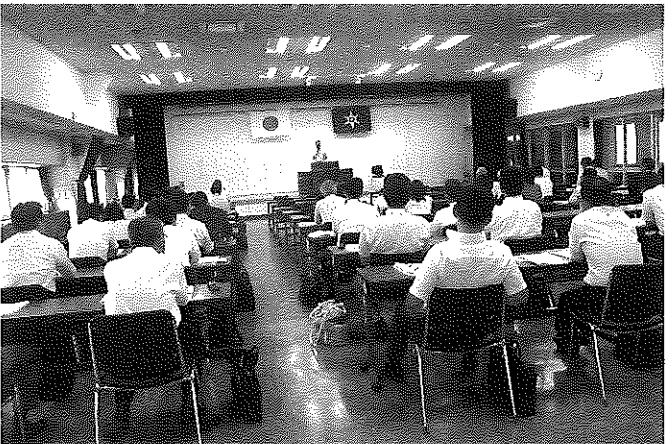
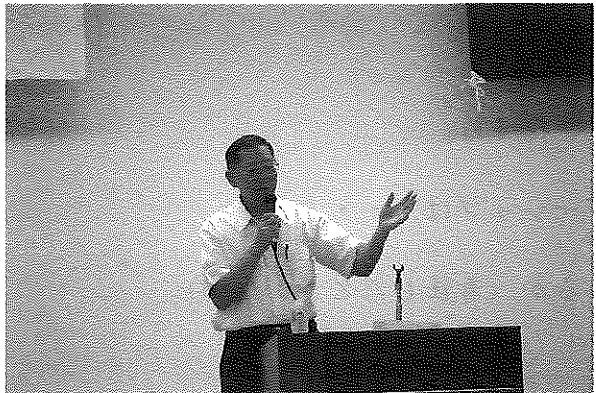
最初にお話ししたように副校长先生方に何か少しでもお役に立てばと思いながらお話しした

ところです。もう一つは退職をしたということで、長江先生からお声を掛けていただいて、皆さんの中の前でこうやってお話しできることをとても感謝しています。先生方が今後活躍されて東京都の教育がますます良くなるようになると嬉しいなと思っています。私も校長6年間のうち1回、ちょっと倒れて入院したんですけれども、でもなんとかこう復帰してきました。体調を崩さないでお仕事をしていただければと思い

ます。つたないお話をしたけれども、本当に今日は良い機会を与えていただけたと思います。先生方の活躍を祈願してこれでお話を終わります。ありがとうございました。

(文責 事務局)

これは、平成26年6月14日（土）に文京区民センターにて行われた、東京都公立高等学校副校長協会総会での講演の内容です。



副校長に期待すること

1 フットワークのよさ（そのように思われること）が大切

(1) 受け身か挑戦的か。

ピンチはチャンス

(2) 管理職、自分でやって……。

①解決への道筋を示す。

②（目指す生徒像・学校像等）目標となる夢を示す。

③教員を育てる。

④多くの教員の話を聞き活かす。

(3) 教育委員会との関係は……。

2 マネジメントとリーダーシップ

副“校長”として、リーダーシップを發揮する。

・副校長は、校長は、

マネジメントは……、リーダーシップは……。

・How toか、What toか。

・現状からどのような課題が見えてくるか（着任したときが大切）。

3 課題解決の引出しを増やす。

・先生方の意見や副校長会等での情報収集

・SWOT分析をしてみる。

・見える化を進める。

・通知文を活かす。→ 進めたい方向への後押し。

4 管理職としての姿勢が問われる。

・率先垂範

・こだまでしょうか。

・肝に銘じる。

5 体罰防止について

・巨人の星は過去のこと

・経験的視点から科学的視点への変換

・セルフコントロール

・新しい全国高体連の対応

6 高校総体について

・一人一役運動 → 何かをしたいと考えている若者

・総体の必要性 → 学校における部活動の活性化

・裏舞台

7 まとめ

・「努力する人は……、怠ける人は……。」

・「昨日より……、……。」

葛飾総合高校のミッション(社会に果たすべき使命)

- ・国公立・難関私大を含め希望する大学・短大に進学にできるとともに、普通科高校にはできない生徒一人ひとりの才能に応じた多様な専門性を伸長できる教育活動を提供する。
- ・★地域に支えられ愛されるとともに、地域を愛し貢献しようとする生徒を育む学校を提供する。

葛飾総合高校の特色(ブランド)



生徒一人ひとりの希望進路を実現する「進路名門校」を目指します。

希望進路実現への「学力向上・専門性の伸長」「キャリア教育の充実」

★ : 新たな取組
アドバイス : 重点事項

平成24年度学校経営計画構想

学力・授業力の向上

- 目標:
 ①国公立・難関私立大学4名以上
 センター試験の全国平均点以上: 2科目以上
- 学力向上(学力向上推進計画の推進)
 - ①★総合的な学力の成果分析・検証
 - ②定期観測の実施と分析
 - ・メディアポート、ファインシステム等の活用
 - 講習・補習の充実
 - ①土曜講習: 17日(各400名以上)
 - ②長期休業中講習充実(90講座以上)
 - ③★朝学習、「ベンキョウ俱楽部・特訓講座」の充実、夜学習の定着
 - ④習熟度に応じた講習の実施
 - ★貫性ある発展的学習環境整備等
 - 自宅学習時間の増加(1時間以上)
 - 授業力の向上(教科チーム力の推進)
 - ①校内研修や相互授業参観の充実
 - ②葛総若手授業塾の充実
 - ③指名制授業研究への参加・校内報告
 - ④生徒による授業評価の活用
 - ★希望進路の実現ニッチ戦略(生徒の専門性等)を生かした進路指導の充実

キャリア教育の充実

- ★夢・あこがれ、チャレンジ精神、永遠の可能性を育むキャリア教育の充実
- ★キャリアアップアワードの充実・更新
 - (例) 海外高校生訪問への対応
 - ・大学等課題論文への応募等
- ★「産社」のテキスト作成
- ★キャリアCC1・2・3の一貫性と葛総の総合的キャリア教育の充実
 - ・★キャリアCC1・2・3と各科目相互作用(学力向上スパイラル)による希望進路実現
- 課題研究・学習発表会(各200名)の充実
- ・★小・中・大との連携事業の推進

豊かな人間性の醸成

- 学校行事の充実
 - ・★地域と一緒に生徒が運営・企画する葛希祭(★K'S LAND構想等)・体育祭の充実
 - ・合唱コンクールの充実(外部等)
 - ・★生徒会を活用した学校行事等の一層の充実
- ★広報紙「行け」等の生徒を活用した学校見学会の実施・充実
- 朝学習の習慣化・基本的生活習慣定着、モーニングキャバレの充実
- ★部活動の活性化
 - ・HPや文化祭、学校説明会、★学校便り等による部活動紹介の充実
 - ★地域連携活動の充実
 - ・文・スポーツ推薦の実施
 - ・文化・運動各1~2
 - ・女子バレーボール部、吹奏楽部等

学校経営の充実

- ★学校経営診断フロー アップ実施(都教委と連携)
- ・★葛飾総合高校の教育活動成果・分析・改善→外部評価の向上
- 開かれた学校づくりの推進
 - ・★授業公開の一層の推進(各回100名以上)
 - ・★保護者会参加者の増加(各回100名以上)
- PR活動の充実
 - ・HP・学校便りの充実
 - ・生徒表彰等の積極的紹介
- 学校の組織的運営
 - ・主幹・企画調整会議の充実
 - ・分掌・教科組織目標の設定
- 生徒エンターンスの一層の整備・充実
- 葛飾総合、本所工業併置を生かした学校づくりの推進
- 宿泊防災訓練の実施等、震災等対応への避難・職員体制の整備
- ★経営参画型経営企画室実行プラン(確実な予算執行・入選、学校PR事務)の推進

※ 平成24年度途中から実施する事業にも★が付いています。

平成25年度学校経営計画構想

学力・授業力の向上

- 目標:
 ①国公立・難関私立大学6名以上
 センター試験の全国平均点以上: 2科目以上
- 学力向上
 - ①学力向上推進計画の★検証(外部機関等)
 - 講習・補習の充実
 - ①土曜講習・長期休業中講習充実(90講座以上)
 - ③朝学習、★「ベンキョウ俱楽部」の部活動化の推進、夜学習の定着
 - ④★DVDを活用したサテライトゼミの充実
 - 自宅学習時間の増加(1時間以上)
 - 授業力の向上(教科チーム力の推進)
 - ①相互授業参観・葛総若手授業塾の充実
 - ③指名制授業研究への参加・校内報告
 - 希望進路の実現ニッチ戦略(生徒の専門性等)を生かした進路指導の充実

キャリア教育の充実

- ★キャリアアップアワードの充実・更新
 - (例) 次世代リーダーや言語の祭典、科学の祭典等への応募の充実等
- 総合的な学力の成果分析・検証
 - ★「産社」のテキスト活用
 - ・学力向上スパイラルによる希望進路実現
 - ・★課題研究・学習発表会(各250名)の充実、★葛総成果研究発表の実施
 - ・★小・中・理大の連携事業の推進
 - ・★インストラクター制度、ユーチューブ・イターネット計画の実施
 - ・★未読率の向上
 - ・★葛総スタンダードの確立

豊かな人間性の醸成

- 学校行事の充実
 - ・地域と一緒に生徒が運営・企画する葛希祭(★K'S LAND構想等8000名)・体育祭の充実
 - ・★地域連携団体数の増加(55事業所)
- 広報紙「行け」等の生徒を活用した学校見学会の実施・充実
- 朝学習やモーニングキャバレの充実
- 部活動の活性化
 - ・HPや文化祭、学校説明会、学校便り等による部活動紹介の充実
 - ・文・スポーツ推薦の実施
 - ・文化・運動各2

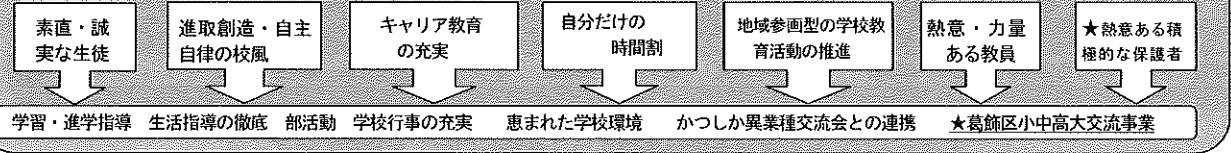
学校経営の充実

- 開かれた学校づくりの推進
 - ・授業公開の参加者・保護者会参加者の増加(各回100名以上)
- PR活動の充実
 - ・HP・学校便りの充実
- 学校の組織的運営
 - ・主幹・企画調整会議の充実
 - ・分掌・教科組織目標の設定
- 宿泊防災訓練の実施等、震災等対応への避難・職員体制の整備→★地域貢献型への発展
- ★葛総の教育活動の特色を伸長した中での校務の効率化の推進
- ★経営参画型経営企画室実行プラン(確実な予算執行・入選、学校PR事務)の推進

葛飾総合高校のミッション（社会に果たすべき使命）

- ・国公立・難関私立を含め希望する大学・短大に進学にできるとともに、普通科高校にはできない生徒一人ひとりの才能に応じた多様な専門性を伸長できる教育活動を提供する。
- ・★地域に支えられ愛されるとともに、地域を愛し貢献しようとする生徒を育む学校を提供する。

葛飾総合高校の特色（プラン）



生徒一人ひとりの希望進路を実現する「進路名門校」を目指します。

— 可能性にチャレンジする教育活動を通して、★タフな心を育む。 —

★：新たな取り組み
△：アングラライ：H25 重点事項

希望進路実現への「学力向上・専門性の伸長」「キャリア教育の充実」

平成25年度 学校経営計画構想

★「豊かな人間性」を基盤とした「希望進路の実現」

学力・授業力の向上

目標

- ①国公立、難関私立大学4名以上 ②★進路指導満足度85%
センター試験の全国平均点以上：2科目以上

- 学力向上
 - 国際コミュニケーション
 - 学力向上推進委員会の取組の充実
 - ★学力アップ・推進指定校の取組の充実
 - ①学力向上推進計画の実施・評価
 - ②必修・選択科目の効果検証・検討
 - ③総合的な学力の成果分析・検証 → 社会人基礎力に
 - ④定期観測の実施と分析
 - ・3行→1行→研究とフィンシステム等の活用
 - ★系列の特色（生徒に魅力ある授業や、発展的目標としての魅力あるメルクマール（中間目標）等の創設と一層の充実（例）
 - ①国際コミュニケーション
 - 言語の祭典への応募（国語）、ベンキョウ俱楽部（英語）の語学集中宿泊行事等の実施。
 - ②スポーツ福祉
 - 体・祭り、いハカラ制度の一層の推進（体育）「つながりの会」等福祉関係での交流（家庭）
 - ③生活・アート
 - 高文連美術工芸中央大会等への積極的応募（芸術）
 - ④環境サイエンス
 - 理数ITリサーチ事業の実施・定着（理科・数学・情報）
 - ⑤情報メディア
 - 地域メディア機能を生かした地域連携教育活動の基盤・継続性の整備（情報）
 - ⑥メカトロニクス
 - 魅力ある作品づくりへの挑戦等

- 讀書・補習の充実
 - ①土曜講習：17日（各350名以上）
 - ②長期休業中讀書充実（90講習以上）
 - ③朝学習、★「ベンキョウ俱楽部」の発足と同様講習の推進・定着、夜学習の定着
 - ④★DVDを活用したサブノットセミの充実
 - ⑤音楽面に応じた講習の実施
- 希望進路実現に向けた一貫性ある発展的学習環境整備等
- 自宅学習時間の増加（1時間以上）
- 授業力の向上（★教科主任を中心としたOJT等の実施と教科チーム力の推進）
 - ①校内研修、相互授業参観、葛総若干授業塾の充実
 - ②指導者別授業研究への参加・校内報告
 - ③生徒による授業評価の活用
- 土曜授業の継続検討
- ★希望進路の実現ニッチ戦略（生徒の専門性等）を生かした進路指導の充実（各系列・教科での情報収集、実績の向上）

○ 基本的な生活習慣の確立

★「規律正しい高校生活」の特色化の推進

（★「紳士・淑女の品格をもつ」生徒の育成）

★葛総キャンペーンの定期的な実施と組織的対応。

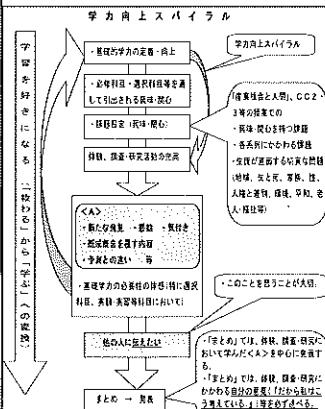
○★「和をなす」生活指導の徹底・定着

・「時を守る」「場を清める」「礼を正す」生活指導 → 挨拶、授業規律、始業時着席、遅刻指導徹底

○★あいさつ運動の定例化等

キャリア教育の充実

- ★葛総スタンダードの確立
- 一貫性のあるキャリア教育(CC123等)の実現
- ・キャリアアドバイスの充実・更新
 - ・例：次世代リーダー・や言語の祭典、科学の祭典等への応募の充実等
- ・★「産社」のテキスト活用
- ・総合的な学力の成果分析・検証
- ・学力向上スピタル（各科目相互作用）による希望進路実現
- ・★葛総成果研究発表（教員）の実施
- ・★土曜実習等による課題研究・学習成果発表会（各250名）の充実
- ・★東京都総合学科高校教育活動成果発表会（12月）への積極的参画・参加
- ・★葛飾区立小・中学校との交流事業の充実、理大等との連携事業の開発・推進
- ・★インストラクター制度、チューター制度、イターネット計画の実施
- ・★就職面接大会（3年）の実施
- ★未読率の減少



豊かな人間性の醸成

- 学校行事の充実
 - ・地域と一緒に生徒が運営・企画する葛希祭（来校者7500名）・体育祭の充実
 - ・地域連携団体数の増加（55事業所）
 - ・保護者・地域に開かれた学校行事の充実
 - ・合唱コンクール等の充実（外部等）等
- 生徒会活動の活性化
 - ・生徒会を活用した学校行事等の一層の充実
 - ★生徒会が中心となった「規律正しい高校生活」の特色化の推進
- 広報・ラジオ等の生徒を活用した学校見学会・説明会の実施・充実

○朝学習の習慣化

- 基本的生活習慣定着
モーニングキャンペーンの充実

○部活動の活性化

- ・HPや文化祭、学校説明会、学校便り等による部活動紹介の充実
- ・地域連携活動の充実
- ・文・スポーツ推薦の実施
 - ・文化・運動各1～2（★運動部活動の活性化）
 - ・女子バレーボール部
 - ・吹奏楽部 等

○健康・安全教育の充実

- ・★スクールカウンセラーを活用した生徒支援連絡会や教育相談活動等の充実と必要情報の共有化の推進

- ・健康アンケート等による主体的健康づくりの推進

- 震災等対応の大・地域貢献型宿泊防災訓練等の実施

○学習環境の整備

- ・生徒による清掃充実活動の活性化

- ・潤いのある学校環境整備の推進（絵画掲示や★生徒による緑化活動の推進等）

学校経営の充実

- ★「都立高校学力スタンダード」推進校指定を受けた学力向上への組織的取り組みの充実
- 理数教育フロンティアチャレンジ団体としての教科横断的組織的取り組みの充実
- 葛飾区との「相互連携協定」締結を生かした小中高大交流事業の推進
- 開かれた学校づくり推進
 - ・授業公開の一層の推進（各回100名以上）
 - ・保護者会参加者の増加（各回100名以上）
- PR活動の充実
 - ・学校HP・掲示板の積極的活用
 - ・学校便りの発行
 - ・生徒表彰・活動の積極的紹介
- 学校の組織的運営
 - ・主幹・企画調整会議の充実
 - ・具体的な分掌・教科組織目標の設定
 - ・葛飾総合高校の教育活動成果・分析・改善→外部評価の向上
- 葛総の教育活動の特色を伸長した中での校務の効率化の推進
 - ・OJT推進研修の実施とOJT機能の充実
 - ・葛飾総合・本所工業併置を生かした学校経営の推進
- 生徒エンタランスの一層の整備・充実
- 宿泊防災訓練の実施等、震災等対応への避難・職員体制の整備→★地域貢献型への発展
- 経営参画型経営企画室実行プラン（確実な予算執行・入選、学校PR事務）の推進

3年間を通した多様な取組み(キャリアアップ・プログラム)

★:主な体験学習 ●:主なプレゼンテーション形式の学習 :特徴的な取組み

10(4) 講演

「都立高校と私立高校の違い」

講師 元都立墨田川高等学校長

前千代田女学園中学校・高等学校長 大澤 紘一 先生

よろしくお願ひします。ここにいる長江先生とは昔S高校で同僚でした。体育祭の騎馬戦で、相手の暴力により生徒が怪我をし、その後体育祭を続行するかということで彼と言ひ合いました。私は応援団に恩を売って体育祭を継続させようと思ったのですが、「ダメなことはダメだ」とはっきり言われ、自分の信念をしっかりと持った教員だと感じた思い出があります。

私は教頭時代に2度低い成績をもらったことがあります。1度は「新宿事件」、もう1度は生徒同士の暴力事件です。そんな成績を3年間に2度もらった訳ですから、もう上に行くことは絶望的でした。しかし翌年に赴任した校長に国旗・国歌をやろうと言われました。その頃は檀上の国旗掲揚、式次第に国歌斉唱を入れる学校はほとんど在りませんでしたので、それが実現できたことは大改革だと思います。翌年の試験でそれが評価され合格することが出来ました。

私が公立で管理職をやっている頃は、上記の様に学校経営に反発する教員は沢山いました。今も一部の教員には苦労していると思いますが、私学の教員は全然違います。

まず、校長の意見、判断は絶対ですので、すべての教員は学校経営に協力をします。その理由は明らかで、生徒を1人でも多く増やすという目標が一致していること。私学は奉職したら一生他校に異動する制度が無いということだと思います。また学校の組織は公立の教育委員会に匹敵する「理事会」というものが在り、すべての学校経営の実権を握っています。ですから、教員は校長の言ふことを、校長は理事会の言ふことをしっかりと聞くことによって、学校が成り

立っています。

私は最後に墨田川高校の校長をやらせてもらい、学力の高い生徒も見てきましたが、公立では生活規律をしっかり教えることが今一つ不十分だったと思っています（スカート丈の服装など）。その点私学は生活指導を含め、いくつかの制約を覚悟して入学して來るので、公立では見ることの無い程の学生らしい学生が沢山います。特に私が勤務した女子高は126年の歴史を持つ学校なので、代々受け継がれた校門での学校に対する一礼や、清掃の為の服装に着替えるなど、素晴らしい慣習や伝統を沢山見ることが出来、これが私学の私学たるものだと実感しました。

公立時代は国旗・国歌をどうするかという生徒不在の卒業式でしたが、私学の卒業式は、3年間の集約として、予行演習から本番まで相当な時間を割いて行います。生徒一人一人がこの学校を卒業するのだという思いを大きく感じているので、大部分の生徒は感涙します。皆さんも機会が有ったら、私学の卒業式を見たら良いと思います。

先程「理事会」の権限が非常に大きいと言いましたが、学校経営と資産との問題が非常に密接な関係にあるので事務室が非常に大きな役割を占めます。過去には校長以上に力を持った事務局長が居たという話も聞きます。ですから、予算編成においては、広報費だけでも千万単位で計上されるので、経営感覚に秀れた人間の存在が不可欠になってきます。

私は私学の校長をやり、非常に遣り甲斐を感じています。毎朝校門に立って生徒との挨拶。授業中に校内を巡り、少し騒がしい教室に入る

と嘘の様に静かになること。修学旅行・外国研修への同行など公立時代に比べ、生徒との距離がとても近いということを実感しました。

最後に公立の副校長としての心構えを話したいと思います。学校運営をスムーズにする為には校長を補佐することは当たり前のことですが、倒れる程働かない方が良いと思います。校長は副校長がいなくなったら「お手上げ」です。もちろん校長の思いを果たす為の働きは並大抵のことではありませんが、常に自分が校長なら、この状況をどうするかと言う観点で頑張ったら良いと思います。

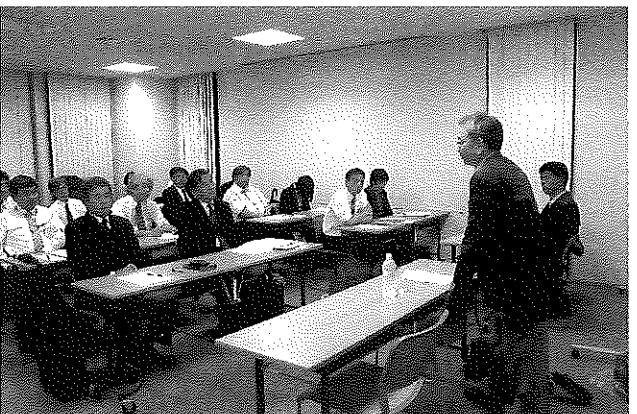
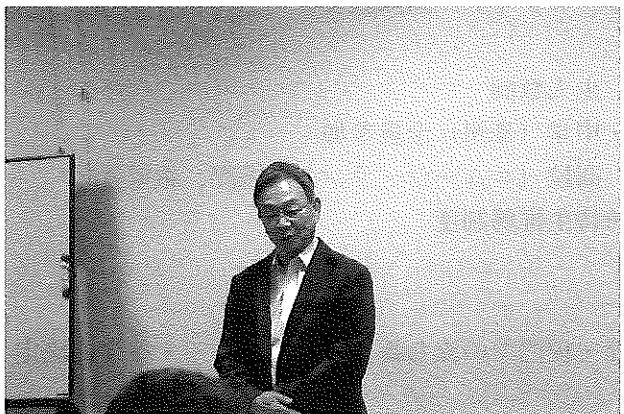
あと、教員に迎合しないことです。喧嘩する位の勢いを持つことは悪いことではありません。よく「力強い論文」と言われますが、「膝

を交えて」、「とことん話し合う」などの言葉は具体性が無いので、決して力強い言葉とは言えません。また、「〇〇委員会を月に一回実施し」などの言葉に、誰か中心になって、自校の課題をどう解決するためのものだという具体的な言葉を添えることにより、問題点がはっきり浮きぼりになり、それが校長としての力強さにつながってきます。頑張って下さい。

以上で私の話は終わります。ありがとうございました。

(文責：事務局)

これは平成 26 年 11 月 6 日（木）に行われた第 7 回総務部会での講演の内容です。



演題「都立高校と私立高校の違い」

○ 最高決定機関・・理事評議会

メンバー 千代田女学園に関連した人間で構成

審議内容・・予算、決算、教育課程、人事、入試内容等

○ 募集対策

外部説明会

校内説明会

一般塾説明会

大手塾名刺交換会

中学校・塾訪問

○ 入試

中学校 高校

推薦制度・特待生制度・奨学金制度

○ 募集のアピールポイント

建学の精神・・1886年（明治21年）

淨土真宗本願寺派僧侶、島地黙雷 女子教育（英語、数学）、
躰、礼儀、ボランティア、国際教育

特質を前面に

・国際クラス、少人数制

・海外研修・・中学（豪州）全員参加

高校（ニュージーランド）国際、希望者

・部活動・・特待生推薦制度

○ 学校経営

予算・人事

校長の立場 朝の打ち合わせ・校門での立ち番、運営に関するすべての決定
権

○ 3年間千代田女学園の校長をして感じたこと

平成26年11月6日 大澤 紘一

10(5) 講 演

「夢を持てば子供は変わる」

講師 株式会社 P & H 代表取締役 高岸 実 氏

みなさん、こんばんは。子供たちの夢の種を見つけ、様々なワークショップを通して夢実現に必要となる力を育てる。そんな取組みをやっています、株式会社P & H代表の高岸と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。

具体的には、どんなワークショップかと言いますと、チームで創造力、集中力、将来のイメージ力、プレゼンテーション力を育てるものです。例えば、憧れの職業の人と会わせて名刺交換や、インタビューをする。あるいは、子供達が将来やってみたいことを見つける、2泊3日の夢合宿などです。

1980年弊社の学習塾ペガサスは福岡市の東区で産声を上げました。ちょうど30年経った2011年の3月、東京で30周年記念式典を予定していました。ところが、この式典まであと2週間と迫った3月11日、あの東日本大震災が起こったのです。一旦は中止にしたのですが、こういう年だからこそ、子供達を元気づけるようなイベントをやろうよ！ということでお2011年の9月、東京目白にあります椿山荘で、30周年記念式典を行いました。そこには、関西や関東の教室の子供達と、彼らが憧れる職業の人たちも集まってくれました。作家、映画監督、俳優、歌手、アスリート、先生、会社経営者、出版社の方、世界で活躍されるチームトレーナーなど、錚錚たるメンバーです。同じテーブルを囲んでその方々と名刺交換したり、インタビューするという内容です。ステージ上では、子供達が1分間で自分の夢を発表する。そのイベントにゲストとしてお越し頂いたのが、教頭・副校長会の針馬さんでした。それが今日こうしてお話をさせて頂くことを、お繋ぎ頂いた針馬さんとの御縁です。私は学校の先生でもないですし、塾で教えているわけでもありません。それがあることをきっかけに、このペガサスという学習塾のチェーン本部と出会い、それ以来24

年間、教室開校や、運営のお手伝いをしています。御縁は、不思議なものですね。体育会系だった私が教育の仕事で、お手伝いしているのですから。

では、早速始めさせて頂きたいと思います。今日は、大阪市住吉区にあります教室で起こった、エピソードなどをお話させて頂きます。

2007年、この教室の塾長でもある先生からこんな相談があったのです。

『なあなあ、高岸ちゃん』

『うちに来ている生徒達、授業中いつも寝とんねんけど、どないしよう？』

『どうやったら子供たちって、やる気になるんやろ？』

『俺分からんわ。。。』

『ちょっと話きいたってや！』

こういう電話が、私の携帯にかかってきたのです。元々は自営をされていた先生です。ご自身の子供さんの塾を探していて、行かせたい塾がない。ならば、自分ではじめよう！そんなきっかけで、新規事業としてうちの教室を始めた方です。開校当初は、

『いや～、子供達と関わる仕事、もうこれは俺の天職やわ』

『たとえ生徒が一人しか居なくても、俺辞めへんで！』

それくらいやりがいを持ってスタートされた方です。ただ、いざ子供たちを預かってみると、来る生徒来る生徒、授業中ずっと寝ているんです。2時間ずっとです。それで、塾に何しにきたるんや！怒り倒したら一瞬は起き上がるんです。けれども、目を離したらまた寝てしまう。そんな生徒がいる教室でした。

ある先生からは、『子供は怒ったらダメだよ。褒めて伸ばすんだよ！』って言われたそうです。なるほど。じゃあ試しに一生懸命褒めてみようということで、実際にやってみたそうです。で

もこの子たちは見破ります。誉めても、返ってくる言葉は、

『は？ 何？ もういい、ムリムリ』

なぜなら、本気で誉めてないんですもん。当然ですよね。

ここからは、この夢の取り組みをやるきっかけになった二人のこととご紹介します。この写真の子が、授業中ずっと寝ていたひろゆき君(仮名)という子です。隣に写っているのが、その相談をされた先生です。まさにこの夢の取り組みをやる一番のきっかけとなった、先生と生徒の物語です。大阪のペガサスよさみ教室という、長居陸上競技場の近くにある教室です。今はこうやってニコニコと写真に写っているんですが、中学2年当時、彼はもしかしたら、自分で命を絶っているかもしれないような子だったのです。ある面談の時、その子は

『なあ、俺なんかこの世の中におらん方がえんちやう？』

『うちには、かしこい妹おるし、俺は要らんやろ』

当時の彼は、大人に異様なくらい不信感を抱いてたのです。2人兄妹で妹のひろみさん(仮名)は学年トップ。実は兄のひろゆき君も小学生くらいまでは、成績も凄く良かったのです。勉強づくりの毎日です。ところがあるきっかけで、もうやる気も何もなくなっちゃったんですね。ある日彼はテレビを見てたら、地球温暖化を防止する京都議定書会議の番組をやっていたそうです。

『大人はきたねーよな。』

『将来俺らがいる地球は、温暖化になって砂漠化するかもしれないのに。』

『先進国は二酸化炭素排出料制限の権利をお金で買ったりとか』

『全然、本気じゃないじやん』

『しかも学校でも、大人は上っ面だけのことばっかりしか言わないし』

『親だって、先生だってみんなそうだよ！』色んな思いが重なって、この子は全然勉強しなくなつたんですね。それが2007年だったと思います。やる気のない息子に、ご両親も手をやいて、いつも怒ってばかり。何に対しても、無気力無関心。当時、中学2年生、成績は52点！5科目500点満点中の合計点数が52点ですよ。

びっくりするでしょう？三者面談の時、先生と母親からも『あんた、どうすんの？』としか言わわれないです。やる目的分からぬ勉強は、全然身に入らない。確かにそうですよね。それがなんと、今では大学生！今は、福祉の道を目指して頑張っています。そして芦屋市の警察一日署長をつとめるような、ボランティア活動もしているのです。実はお恥ずかしい話、私も同じような経験をしていました。それこそ高校の授業中、起きる間を惜しんで睡眠学習していましたから。そういう笑い話を、先生にした時、

『いやいや、そんなレベルちゃうで。』

『ひろゆきはちょっと異常やで』

そこでよし、彼を何とかしよう！ということで取り組んだのがこれです。先ほど、針馬さんからもご紹介がありました2泊2日の夢合宿です。あえて夢だけにフォーカスし、学校での勉強は一切やらない合宿です。毎年、淡路島にある施設を貸し切ってやります。目的は、将来に希望を持てずやる気がない子供達、この子達を、あえて勉強とは違う世界を見せてあげる。そして、将来やってみたい事に気づいてもらおうというものです。

当時、子供たちに、『夢は何？』って質問しても、ほとんどの子が『夢？ ない。ウザッ』とかしか言わなかつたのです。なるほど。よし、じゃあいっそのこと憧れの職業の人に子供達を会わせようよ。そんな人にインタビューをしたり、名刺交換したりしたら、きっと子供達も変わるんじゃない？ただ、そもそも憧れの職業の人っているのかな？そんな事を先生達と話しながら、この企画がスタートしました。この一番左側に写っているのは、ゲストとして来て頂いた、当時、JALの国際線パイロットの加藤さんという方です。ペガサスの社長の紹介で知り合つた方ですが、趣旨を説明したところ

『そういうことでお役に立てるのであれば、私も手伝いに行きますよ！』

会社に無理言って頂き、なんとこの合宿の日、フライトをわざわざ伊丹から千歳便に変えてもらいました。朝一に伊丹から千歳まで飛んで、千歳から伊丹に戻つてくる。伊丹に到着されたところを、先生が車で迎えに行く。そして、会場についたらすぐに講演。こんな強行スケジュールでした。ご覧のように、フライトして

いる時の色々な、手帳とか携帯品もテーブルに広げてくれて、お話を聞いて頂きました。そしてこの隣は北京オリンピックの時にシンクロナイズドスイミングで出場した石黒さんです。小学校の時に大きな交通事故に遭って、顔はぐしやぐしや！もう、再起不能とまで言わされたそうです。ところがこの彼女、数年後にはなんとオリンピック選手になったのです。入院しているベッドに横たわりながら、テレビでオリンピックの中継を見ていた時、いてもたっても居られないくらい興奮し、感動したそうです。

『お母さん、私オリンピック出るわ』

そう言って夢に向かってチャレンジされたそうです。もう、人の可能性はどこまであるのというくらい素晴らしいエピソードですよね。そして一番右はハリウッドの日本人映画監督です。本当にハリウッドで映画を撮っている方です。その映画監督と、東京でお会いしてお話をさせて頂いたところ

『高岸さん、この夢合宿の企画は素晴らしい！』

『そういうことだったら僕、話に行くよ』

ということで、ゲストとしてお越し頂いたのです。その時の様子がこれです。これは話が終わった後、サインをもらいに行ったりした時の様子です。もうこの時は子供たちの目の色が全然違ったんですね。いつもの授業中、ぼつとしていたり、寝ているような子たちじゃないんです。この合宿で子供たちは自分の夢の種を見つけ、ワクワクして動き出しました。するとどうでしょう。その子供たちに、奇跡みたいなことがどんどん起こり出したんです。

ちょっといくつか、そのエピソードをお話したいと思います。その前に、みなさんに見てもらいたい写真があります。この写真です！この写真見たことあるっていう人、いらっしゃいますか？いらっしゃいませんね。これはある本物の写真なのですが、皆さん何に見えますか？何かが写っています。お分かりになりますか？今まで全国で色々な所に行ってこの写真お見せするんですが、一発で当てた方は、まだ10人もいらっしゃらないですね。なんでもいいです。何に見えますか？

『どうですか？』

『う～ん、内臓か何かの写真？』

『お～、内臓ですか。。。』

『いや、ちょっと違いますね。』

じゃあ、ヒントを言いますね。これ実は動物です。動物が皆さんの方を向いています。

『あっ、見えた！ 牛です！』

『お～、正解です』

『すごいですね、すぐに牛に見えました？』

『普通は、中々見えないですよね！』

『そう！これ実は牛なんです』

『どうです、皆さんだんだん見えてきましたか？』

『亀です！』とか、

『地図ですか？』などよく言われるんですけどね。

ただ、皆さんどうです？ 不思議でしょ、ほら一度見えて出すともうそれにしか見えなくなつてしませんか？もう一度ご覧頂きますよ！

『お～、確かに牛だ。。。』

『ねっ、すぐ牛って分かるでしょう？』

これで何をお伝えしたかったかというと、実は夢も最初は見えないです。ただ、夢の種も自分で意識したりして見えてくると（イメージ出来る）、もう、気になって気になってしまふがなくなる。皆さんも、今まで気にかけていなかつた事が、何か興味を持ち出した途端に、急に見えてくる！そんなご経験ないですか？

憧れの職業の人に会わせたりした時に、その人たちが共通してお話をされることがあります。

『みんないい？』

『何かにチャレンジする時って、出来る出来ないは関係ないからね！』

『根拠はいらないよ』

『俺だって、そんな事お前にできるわけないじゃないって散々言われ続けてきたんだから』

『そんな事、誰も分からんんだからね』

『チャレンジしてみたい事を、紙に書いたり写真貼ったりしてイメージしてごらんよ』

『そしたら、それを意識するようになるから！』

皆さん、こんな事を教えてくれるんです。

じゃあ、どうやってその夢を引き出そうか？そもそも、夢なんて考えた事ないような子達に、夢ワークでまずは夢の種を見つけます。そしてその夢を持ったきっかけや、どうやって叶える

のかを自分で考えて、みんなの前で1分間で発表します。その時の様子がこの映像です。これは僕の本にも書いてあるんですけど、いきなり「夢って何?」って子供たちに聞いても97~8%の子供たちは言えません。ちっちゃい子はプロ野球選手とかサッカー選手ということは言うんですけど、5つくらいしか出てきません。この写真は何をやっているかというと、自分の頭の中を紙に書きだすというワークショップです。そしてその後、そこに出でたキーワードを元に、夢探検マップを書いているところです。この目的はまずは思考のブレーキを外して、夢の種をまくということ。ただ、夢の種っていつも10年くらいしか生きていないのに、将来何になりたいって言われても分からぬですね。なので、こんなワークショップをやって、ドンドン想像させるのです。

例えば、この前面白い夢を言った小学生の子達がいました。

『僕の夢は鎌倉彫の職人になることです』

『あとは小学生の女の子が鷹匠っていう子もいましたね』

『お~、鷹匠ってよく知ったね、なんで?』って質問したら、NHKで鷹匠って鷹をこうやって操っている人を見て感動したそうです。

一人がそんな話をすると他の子も、思考の枠が外れて、

『私はこんなことがやりたい』

『僕は宇宙に行ってこんな事がやりたい!』っていう夢が出てきます。たとえ、人に笑われたり、馬鹿にされたりしてももう発想の枠を取つ払おうよと。とにかくお金もある、時間もある。誰が何と言ってもどうせ遊びなんだから、思いきり大きな夢を出してごらんよ!っていう話からもっていきます。最初は夢の種を見つけるところからスタート。

もう一人ご紹介します。中学2年生の時です。この子も寝ているわけじゃないんですけど、特にこれと言った夢もない。塾に来ても大人しい感じの子でした。その子がある時から大変身したのです。

彼はある日、

『僕は、ブルーインパルスのパイロットになる!』

という夢を掲げたのです。その時のやり取りで

す。この種を見つけたら彼はどんなことをやつたかというと、教室にあるパソコンを使って、インターネットであるキーワードで検索しました。

『パイロット 学校』

そしたらその男の子は、山梨県にある日本航空高校っていうところがあるのを見つけました。

『俺、ここ行くわ』

という話でワクワクしていました。毎日来るたんびにインターネットです。学校さがし。そして先生との会話の中で

『たかし、日本航空高校行ってここにパイロットまでどうやって行く?』

って誘い水を出した時に

『ちょっと遠いな』って言っていたんです。

『遠いって場所か?』って言うと

『いや、ここに行ってブルーインパルスのパイロットになるには、遠すぎるってこと』

『なるほど。じゃあどうするよ?』

そんなやり取りを何度もするうちに、道筋が見えて來たのです。彼はこの大学に行きました。それがこの防衛大学です。中学2年の時に防衛大学に行くって言ったんですけど、当時のたかしの成績は、中の上といった成績です。

『大丈夫、あと4年あるから頑張ろう』

『たかしやつたらいいけるいいける』

と声をかけながら、応援していました。この教室は中学までなのですが、彼は高校に入ってからも時々塾に来ていました。なぜかというと、教室の壁紙一面にみんなの夢の色紙が貼ってあるんです。やっぱり高校に行って色々な友達とか先生達とか色々な人と話すとネガティブな意見も出てきます。

『お前に出来ると思う?』

『今の成績で、防衛大学?無理だよ』

散々言われるので落ち込むんです。その時に、自分の掲げた夢をもう一度明確に思い出すために教室に来っていました。その度にみんなの夢を見ながら、『おお一すごいすごい』と言って帰っていました。その後、彼はそんなネガティブな意見を跳ね退けて、無事現役で防衛大学に合格したのです。この写真は、大学2年の時に防衛大学の制服を着て、塾に訪ねて来てくれた時の写真です。顔も身体、引き締まっていてかつこ良くなっていますね。

それと、これが関西で開催した夢発表会です。西宮のホールで開催しました。実は、これが30周年記念イベントの時に招待する、夢発表の予選会なのです。その時の様子をちょっと動画でご覧下さい。

「僕の夢はプロサッカー選手になることです。なぜこの夢を選んだか、理由は2つあります。一つはサッカーを幼稚園からずっとやっていて、プレーしていくすごく楽しく、自分が好きなスポーツだからです。もう一つはプロサッカーの試合で負けていても諦めない姿に惹かれたからです。そのためには中学、高校でサッカーをし、技術を付け、大学へ入り、関西のJ1チームに入り日本代表の選手になります。そして外国の選手とコミュニケーションを取るために、国際語となる英語が必要になるので、今英語を習っています。だから僕のプレーを見た子供たちが夢や勇気を感じ、何事にも頑張ろうと思ってもらえるような選手になります。ありがとうございました。」

そしてもう一人。

「僕の将来の夢は俳優になることです。特に僕はハリウッドで世界中の人々が見てくれる映画の主演になって、お年寄りから子供までを感動させる演技力を持った俳優になりたいと思っています。その理由は、僕には夢がたくさんありました。そして一つ一つこなすのには大変な時間がかかることも分かっていました。そして考えに考えて、ついに俳優になると決めたのです。なぜ俳優を選んだかは、俳優になれば考えていた夢が全てできると思ったからです。大学を22歳で出て、アメリカ・ハリウッドへ行き、俳優の修業をして30歳で最優秀主演男優賞に輝き、さらに心から泣いたり笑ったりしてもらうことが出来る俳優になりたいです。以上より僕は次の50周年パーティーでは夢を叶えてあげる側になっています。そのためには英語の勉強をしたり、自分の気持ち次第で泣けるように頑張っています。そしてこれからすることは、まず英語を完璧にして、表情の研究、発声練習などをして、さらに映画の照明などについて勉強していくこうと思います。これで終わります。ありがとうございました。」

どうです？ 二人とも小学校5年生ですよ。僕は審査員として前にいるんですけど、最初に

この発表を聞いた時に鳥肌たって審査することを忘れていました。何でかというと、この子たちの日ごろを知っているからです。日頃は、大人しい子なのに、この明確な夢を堂々とステージで語った姿に感動したからです。

一人目の発表が終わった途端、私の後ろの席がざわざわしはじめました。これから発表する子供たちです。

『ええ!?』『マジ!?』『何これ?』

そう言いながら、スーツと会場の外に出て行つたんです。彼らはもう一度、練習し出したのです。そしてこの予選で選ばれた子たちが、先にご紹介したその30周年の式典記念に来て、夢を発表してくれました。今、この夢発表をしたんですけど、これ実は本当に子供たちが自分で書いたんです。普通はそこに先生が付いて、「あんた、これ好きやからこれしちゃよ。これしひたらええやん。」って言いがちなんですが、それはダメ。あくまでもワークショップで、子供達自らが夢の種を見つける事。その為に先生は、ワークショップの中で子供達が描き出したキーワードを元に

『えー何でそう思ったん?』

『すごいな～ それ○○やったら出来るわ』

こんな感じで、色々な質問を投げかけながら進めていくのです。どんどん、思考の枠を広げていくんです。その時に夢は1個じゃなくていいからいっぱい広げていいよ。ただし、この発表する時に一つに絞って。お気付きの方もいらっしゃるかと思いますが、あえて彼らは全部断言しているんです。何とかをしますと。普通は断言してしまうと苦しいんですけども、あえてこの発表の時は断言するようになっています。ただ、その時に子供たちに最初に言うのは、

『その代わり夢は明日変わってもいいんだよ。明日成長してもいいから。』

今日例えばプロ野球選手になりたいと思った子がずっとプロ野球選手になろうと練習していた。それがたまたまテレビ付けてワールドカップを見た時に、メッシとか本田圭佑たちのプレーを見て、もう夜も眠れないくらいワクワクワクワクした。自分で知らない間にサッカーボールを蹴っていた。その子がセリエAに行きたいって夢を持っても不思議じゃないですね。ところが普通の周りの人たちは

『あんた、この前までプロ野球選手って言つ
とったやない。そんな一個もできんのに、なん
でそんなサッカー選手なんて出来るの』
ついつい言っちゃうんですよ。それをなしにし
ました。

そうすると、この子のエピソードを言います
と、彼の名前は遼太郎（仮名）。彼はこの発表
会が終わって帰る時の車の中、先生にこう言つ
たそうです。

『なあなあ先生。俺な、中学受験するわ。』

『そして、その学校でアメリカ行くまでの勉
強するわ』

『行けるやんな～？』

『えつ。。。まじで～？』

先生もびっくりしたそうです。なぜなら、そ
の時、遼太郎の学校の成績は下から数えて2番
目か3番目。塾に来てもいつもこれ大丈夫か
な？というような感じでした。ところがこの時
のあることが、彼の将来に奇跡を起こすのです。
先生と、ご両親の遼太郎に対する、声掛けです。
先生は、

『おー遼太郎、大丈夫や！お前やったら行け
る！』

『今日みたいな大きな夢明確に持てるやか
ら、絶対行けるわ。』

『あと1年あんねん。行ける行ける！』

という話をしたんです。なぜかというとうちは
学習塾で、無学年でやっているから、ここで6
年生の子がいて、5年生の子がいて、中学生の
子がいて、みんなバラバラに並んで使っている
んですね。たまたま遼太郎の隣にいた子が、大
阪に浪速中学ってあるんですけども、関西大学
と提携校になっているところがあるんですけども、
そこに2番で合格したんです。それを見ていたんで、

『あいつが行けるんやったら、俺も行けるよ
な。なあ、先生。』

『お一行ける行ける』

っていう話をしたんです。

もう一つは、帰りの車を降りてすぐ、先生は
お母さんに電話したんです。

『お母さん今日帰ったら、たぶん遼太郎は中
学受験するって言うと思います』

『さっき車の中で言っていました』

『それでねえ、お母さん、絶対言ってほしく

ないのが、「あんた何考えとんの？」という言
葉です』

そうじゃなくて、

『へえ～そうなん？』

『何でまた？』

とかそういう質問してあげてください。

『あんた、今の成績でどうやって行こうと思つ
ているの？』

とかは言わないでくださいね、という話を事前
にしたそうです。その通りやってくれました。
もしかしたら、この2つが彼の奇跡のきっかけ
になったのかも知れません。なぜなら、この子
はその中学に見事合格し、その後学年でも5番
以内に入るくらいまでになったのです。あまり
の変身ぶりに学校の先生も塾に訪ねてこられた
くらいです。夏休みくらいは「先生、マジで吐
きそうやで」って笑いながら言っていましたも
ん。そのくらい勉強していました。

さっきの夢発表のところなんですけれども、
どうやってやったかというと、これは実は夢探
検マップというのを作るんです。最初はこのも
う一つ前に好きなこととか、欲しいものとか、
行ってみたいところというワークショップを2
分間でチームでやったりするんですけども、
そこで出てきたキーワードを、ここにぶどうみ
たいにドンドンと広げていくんです。これが私
たちがやっている夢マップです。

例えばこんな感じ。

この子はちょっと少ないんですけど、ここが
真っ黒になるくらいに書きます。そして出た時
にペアを組んでいる子にキーワードに対して、
“そのきっかけは？”とか“それいつから？”
など質問をするキーワードを入れてもらう。自
分の頭の中にあるものを引き出し、紙の上に描
かせるのが目的です。さっき夢発表したと思
うんですけども、あの発表は実はこの方法で
作ったのです。作文形式で書いて、それを覚えて
発表している訳ではありません。どうしてい
るかというと実は、このシートに書いているん
です。最初に発表した子は1分5秒か10秒です。
2番目の子は2分かかっているんですけど、1
分間で自分の夢を発表するっていうことを目標
にしています。さっき夢マップで書いた中で自
分のキーワードをここに入れていくんですよ。
例えば最初の子でいうと、「僕の夢はプロサッ

カー選手になることです。その理由は2つあります。1つは小さいころからサッカーをやっていて好きなスポーツだからです。もう一つの理由はプレーをしていて最後まで諦めない姿に惹かれたからです。そのために中学、高校、大学でサッカーをし、関西の大学に入り、日本代表の選手になります。また、外国の選手とのコミュニケーションをとるために国際語となる英語が必要になるので、今英語を習っています。だから僕は僕のプレーを見た子供たちが夢や希望を感じ、何事にも頑張ってもらえるような選手になります。ありがとうございました。」でちょうど1分。

最初の子は何百人といいる中で、何も見ないで発表していたでしょう。あれはこのシートに書いたおかげなんです。なぜこのシートにしたかというと、1分で発表すると言った時に内容が長すぎたり短すぎたりする。そこに追加したり、消したり。どちらにしても、みんな消しゴムでバーッて消してまた書き直しになります。作文形式で後から書き直しだすと、中々出来上がらないんですよ。

このシートを活用する事により、自分の発表内容をイメージで捉えてるんです。あえて、発表の練習をする時は、ステージ側に立って発表する練習をすることです。練習の段階から、前に出て発表する。最初子供達は「いやいや、そんなん恥ずかしい。嫌や。」って言うんですけど大丈夫！その時のコツがあります。

最初は、あえて発表する姿勢な内容にはフォーカスを置きません。じゃあどうする？実は、時間にフォーカスさせるのです。例えば、iPadやiPhoneを持って、その様子を動画で撮るのです。

『いい？　これを全部言って45秒から50秒の間に収める！』

『もし、時間が足りなかったらここに何か1個付け加える』

例えば僕の夢はプロサッカー選手になることですって書いていたりなんだったら、そこで、一言例えればどんな？っていうキーワードを入れたら何秒増える？

『え？　どんなって何？』

自分の頭の中でもまた、イメージが膨らんでいくようです。「世界中の人々を感動させるような

プロサッカー選手になる」っていう内容になつたのです。そうすると子供達は「ねえねえ、今ので何秒？」笑顔で動画覗き込んで、ぐいぐい食いついてくるんです。そうやって夢発表シートを使いながら、この夢発表の内容が出来ていきます。

最初は試行錯誤の連続でした。中々頭の中にあるものを、紙に書き出せない。ブレーキが何度もかかるんですね。なので、あえてこういうシートにしました。良かったら、このシート皆さんにお土産として差し上げますので欲しい方はどうぞ、お持ち帰り下さい。

最後に、こちらの動画をご覧頂いて終わりにします。この夢の取組みをするきっかけになつた、あのひろゆきがつい最近、塾に訪ねてきました。その時先生が彼に、当時の事を振り返りながらインタビューをしてくれたんですね。その映像です！

『今年齢はいくつでしょうか。』

『20歳になります。』

『今大学でボランティア活動しているって本当でしょうか。』

『はい、しています』

『ボランティアをやるきっかけって何ですか？』

『最初友達にやってみないかって言われて、やってみようかなあっていう感じです。』

『じゃあ、それをやってみてどうやったですか。』

『楽しいですね。なんかスカッちります。笑顔とかもあるし、体も動かすんで心身ともにスカッちります。』

『それは人に喜んでもらえるから？』

『喜んでもらえるのもあるし、自分でやると楽しいからですね』

『最近一番心を動かされた出来事ってあります？　その中で。』

『高齢者を支えたいっていう思いがあって、ありがとうって言われる時ですかね。』

『なるほどねー。じゃあちょっと振り返ってもらって、中学校1年生の時にペガサスに来た時、いつも寝ていましたけど、あれどんな感じでしたかね？』

『あれはせこかったです、もう。』

『今振り返ってみても？』

『はい、そうでしたね。迷惑かけました、マジで。すいませんでした、ホンマに。』

「ペガサスで夢活動とか色々チャレンジしてもらつたけど、今大学3回生になってペガサスってどうでした？」

『ホンマにいれて良かったと思います、マジで。これやってなかつたら腐っていましたね。』

「そう言ってくれて嬉しいねんけど、じゃあ今3回生で来年4回生になるわけやけども、今一番ボランティア活動がやっていて楽しいこと？」

『そうですね。ボランティアが一番楽しいことですね。』

「今後方向性としてどんな風な道に進んでいきたいと思っていますか。」

『介護系です。』

「じゃあこれから活躍を期待しておりますので、これをぜひ高岸さんに見せたいと思います。高岸さんになんか一言。」

『迷惑かけてすみませんでした。これから頑張ります。』

「いや、迷惑は掛けないと思うよ、きっと。」という素敵なメッセージを送つてくれたんです。

最後に、私たちが今チャレンジしている事をご紹介しておきます。子供達が、何か人前で発表する時、率先して自分で前に出て行き、笑顔で発表する！そういうことを習慣づけさせたいなと思っている取り組みです。

これがうちの教室でやっている朝礼です。こんな感じです。あの子たち、最初の頃はうちの教室に入ってくる時挨拶もしない子だったんです。一入ってきて一帰るような子だったんです。それでうちの教室では、日本一の挨拶をしようよっていうことから取り組みをやりました。実は今年の6月7日、墨田区の本所中学校からこういう取り組みをぜひ学校の授業でやってくださいという依頼が来ました。嬉しいご依頼でしたが、学校の授業としてやるのは初めて。どうやって、この短い時間で子供達の夢の種を見つけてくれるんだろう？土日もみんなで集まってリハーサルを何度もやりました。その結果、6クラスで190人を対象に一斉に全クラスでこの夢ワークショップをやろう！そして、最後は自分の夢をこういうドリームツ

リーというところに貼る。これをゴールにチャレンジしました。

生徒達、最初は先生の様子ばかり見ていました。後ろ見ながらやっていたんですけども、段々表情が変わっていくのです。やっぱり子供たちって人から褒められたり、認められるとドンドン笑顔になっていきますね。夢発表する時に必ず大きな拍手をし、右手でグッドサインを出して「いいね！」って言います。この時、夢発表した子も聞いていた子も、めちゃくちゃ表情が変わったんです。いや～、子供達のあの表情を見ると、こっちまでワクワクしますよね！

今そんな取り組みを学校とかPTAの方々にも応援して頂きながら広げています。来年の3月は横浜と京都、新潟でこの夢ワークショップイベントをやります。子供たちの夢を引き出し、種をみつけチャレンジさせるきっかけづくりが目的です。

目標は来年、再来年と世界大会をやってみたいと思います。なぜ世界大会って言うかというと、子供たちのキーワードの中に、“世界は”“世界で”というキーワードが出だしたのです。じゃあ、いつそのこと世界大会をやろうよ！ということでチャレンジしていきます。

話があっちこっち飛んじゃつたんですけど、これが私たちがやっている取り組みです。

本日は、貴重なお時間を頂き、御清聴どうもありがとうございました。

質問

今、教室はいくつ持つてらっしゃるんですか。

回答

今全国で370教室くらいです。ただこの夢の取り組みをやっているのは30教室くらいです。今海外はバンコクにもあるんですけど、来年もバンコクとクアラルンプールに1教室ずつ、開校に向けて準備しています。

質問

その30教室の先生方に対する共通した研修みたいな制度というのはやってらっしゃるんですか。

回答

はい、ドリームファシリテーターという研修を受けて頂いています。今年「一般社団法人日本ゆめ教育協会」というのを立ち上げました。ペガサスという枠を取つ払って、学校だったり色々な学習塾、児童養護施設までこういうアクションをやる。今度はファシリテータ役の先生を養成するような講座をやっています。夢を引き出すファシリテーです。

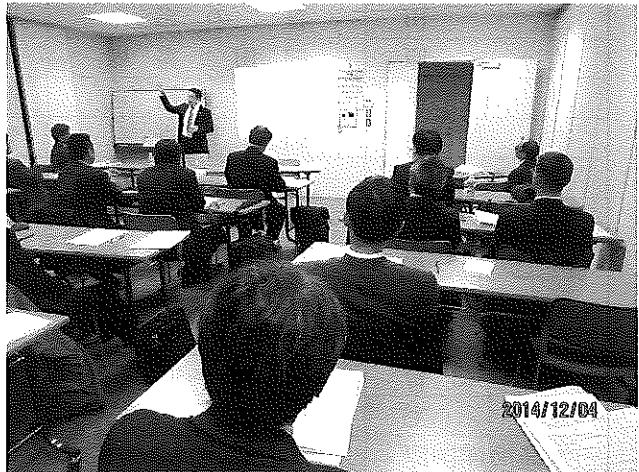
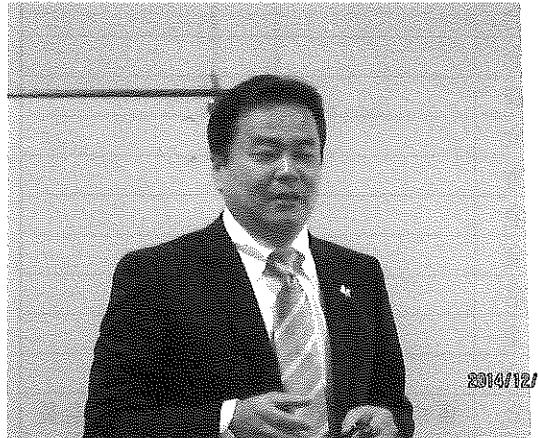
だからこの学校でやらせて頂いた、夢ワークショップ。ここに立っている人達は、ドリームファシリテーター養成講座で資格を取った人たちです。会社の社長さん、テニスコーチだった

り、セミナー講師、会社員の方々と様々な業種の方々です。

この取り組みをやって一番変わったのは大人だったり、これをサポートしてくれている、大学生とか高校生かも知れません。ファシリテーター役でチームの中に入ってくれたりするんですけども、彼らのマインドと、行動力。見ててびっくりする程でしたね。

(文責：事務局)

これは平成 26 年 12 月 4 日（木）に行われた第 8 回総務部会での講演の内容です



11. 会員異動

定年退職者（7名）

平成 27 年 3 月 31 日

学校名	氏名	26年度副校長協会役職名
芝商業	新井 義雄	
両国	藤井 英一	
江東商業	太田 充幸	
葛西工業	中村 彰	
清瀬	川口 典子	
六本木・定	鈴木 春子	
蔵前工業・定	松本 哲雄	

校長栄進者（27名）

平成 26 年 4 月 1 日発令

現任校	氏名	前任校	25年度副校長協会役職名
農産	並川 直人	砂川・定	
三田	笹のぶえ	西・全	
美原	鶴田 秀樹	小山台・全	
日本橋	岡本 裕之	指導部指導企画課	
本所	山下 康弘	鷺宮・全	
深川	三保 和彦	東部セ支所	
紅葉川	黒澤 敏明	富士森・全	
墨田工業	小林 晶代	足立西・全	
荻窪	遠山 裕之	荻窪・定	
杉並	伊東 龍司	立川国際中等・全	
杉並総合	若林 直司	東久留米総合・全	
三宅	中間 均	江北・全	東京都公立高等学校副校長協会会长
大島海洋国際	千葉 勝吾	六本木・定	
文京	久保 淳	町田・全	
北園	牧野 敦	日比谷・全	
鷺宮	石坂 敦子	広尾・全	
石神井	川嶋 直司	府中西・全	
野津田	池田 克則	小平南・全	
府中	内田 圭一	立川・全	
府中東	古川 直浩	指導部指導企画課	
農業	金子 勉	蔵前工業・全	
清瀬	梅原 章司	人事部職員課	
多摩	常國 佳久	秋留台・全	
多摩工業	渡邊 隆	中部セ支所	
小平	柄倉 和則	飛鳥・全	全日制副部会長
小平西	福嶋 一佳	西部セ	
東村山西	保坂 吉則	西・全	

中学校長（1名）

平成 26 年 4 月 1 日発令

現任校	氏名	前任校	25年度副校長協会役職名
杉並大宮中	高澤 功	富士附属中	

全日制間の転任（17名）

平成26年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	25年度副校長協会役職名
日比谷	杉本 悅郎	武藏附属中	会計監査
上野	池田 茂樹	新島	
墨田川	大竹 浩一	小岩	
小岩	齋藤 直子	国際	
橋	難波 伸一	忍岡	
西	佐藤 和彦	日野	全日制西部B研究幹事
小山台	小林 正基	江戸川	
国際	須永 修爾	白鷗	全日制東部B常任幹事
高島	西田 豊	芦花	
飛鳥	新鞍 均	小石川中等	全日制東部B研究幹事
鷺宮	武田 一郎	第四商業	
町田	深澤 真澄	八王子桑志	
立川	西野 良仁	多摩	
府中西	稻垣 彰	園芸	
東久留米総合	鹿子木由紀夫	足立東	全日制東部A常任幹事
東大和	高野 学	科学技術	
福生	清水 真	東大和	

定通制から全日制への転任（14名）

平成26年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	25年度副校長協会役職名
大山	佐々木 義文	一橋	定通制研究部次長
足立	石井 久美子	桐ヶ丘	定通制教育活動部長
江北	山田 温	一橋	
足立東	佐藤 和博	本所工業	
広尾	平塚 浩司	足立	定通制東部AB地区幹事
白鷗	清水 智之	江北	
蔵前工業	近藤 安彦	総合工科	会計監査、定通制中部AB地区幹事
蒲田	神津 良雄	大森	定通制部会長
板橋	鈴木 信也	大島	
富士森	宮澤 良光	五日市	定通制西部CD地区幹事
片倉	角本 芳樹	世田谷泉	定通制活動部次長
農業	神谷 晶平	青梅総合	定通制研究部長
立川国際中等	勝嶋 秀行	東久留米総合	
秋留台	杉浦 昭彦	農芸	

他校種・行政から全日制への転任（2名）

平成26年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	25年度副校長協会役職名
深川	稻葉 久男	中央晴海中	
富士附属中	平田 誠一	江戸川鹿本中	

全日制から定通制への転任（6名）

平成 26 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	25 年度副校長協会役職名
足 立	黒 田 正	大 山	
江 北	山 浦 敏 之	深 川	
大 森	廣 末 修	高 島	
大 江 戸	森 茂	板 橋	
総 合 工 科	内 田 隆 志	墨 田 川	
砂 川	村 山 正 仁	福 生	

定通制から定通制への転任（1名）

平成 26 年 4 月 1 日発令

現 任 校	氏 名	前 任 校	25 年度副校長協会役職名
本 所 工 業	渡 邊 英 信	小 金 井 工 業	

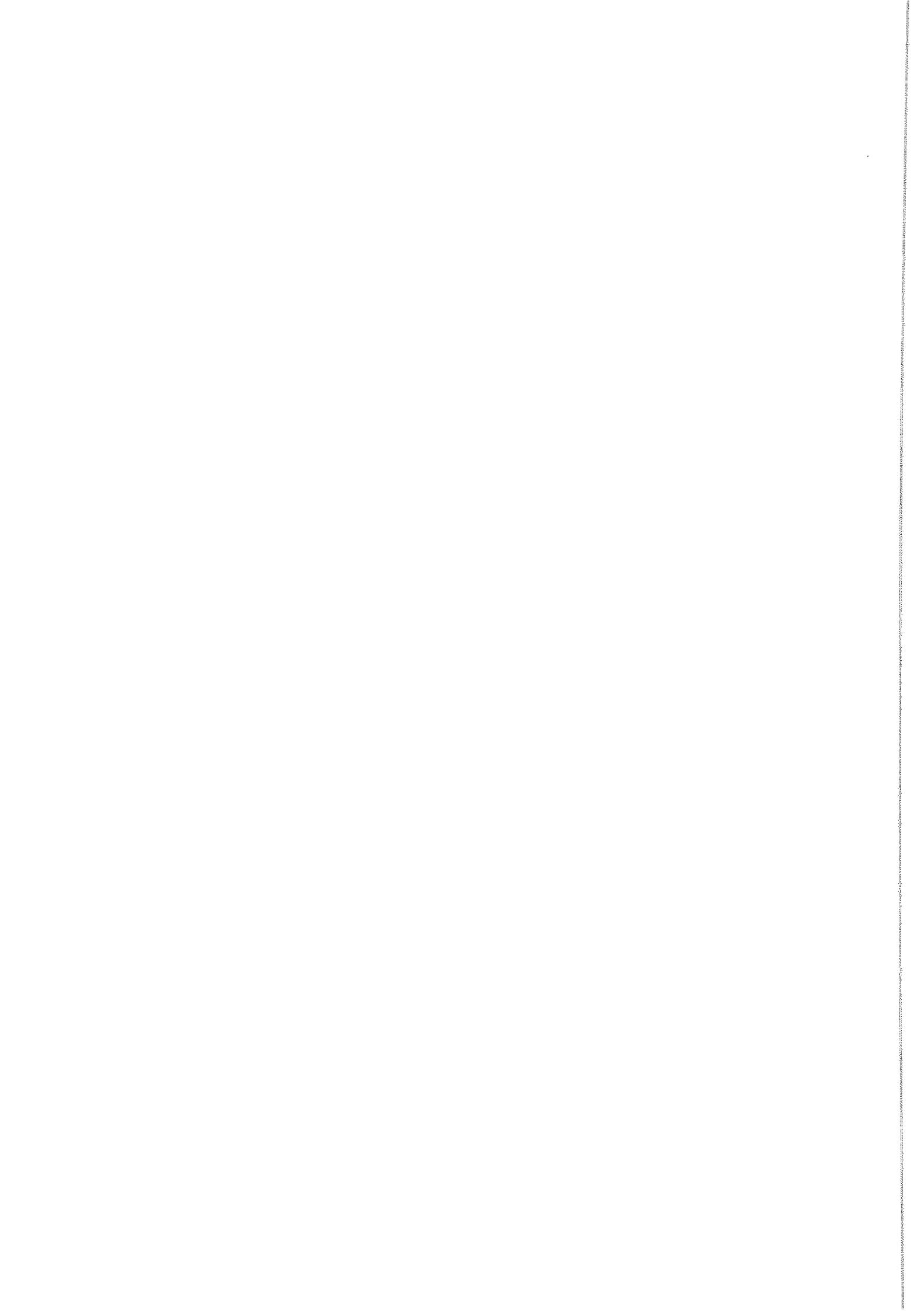
26 年度途中の昇任者（1名）

現 任 校	氏 名	前 任 校	備 考
葛 飾 総 合	穴 沢 努	葛 飾 総 合	平成 26 年 11 月 16 日発令

新任者(45名)

平成26年4月1日発令

現任校	氏名	前任校	備考
足立西	玉川 弘文	王子総合	昇任
工芸	奥澤 稔	墨田工業	昇任
忍岡	山崎 秀樹	東七支所	昇任
荒川工業	嶋村 晃	科学技術	昇任
小石川中等	堀江 敏彦	指導部高指課	昇任
日本橋	福島 泰直	浅草	昇任
東	瀬木 信子	大田桜台	昇任
江戸川	永井 有士	小笠原	昇任
紅葉川	池田 美穂	荻窪	昇任
科学技術	田川 健太	都立部高教課	昇任
芦花	林 達也	立川国際中等	昇任
神代	片山 敏郎	拝島	昇任
八丈	牛込 俊裕	田柄	昇任
小笠原	富田 真理子	葛西工業	昇任
第一商業	相田 誠一	芝商業	昇任
総合工科	人見 正嗣	練馬工業	昇任
園芸	小堀 卓二	農芸	昇任
新島	河合 洋	赤羽商業	昇任
北豊島工業	古藤 一弘	足立工業	昇任
井草	加藤 泰弘	都立部高教課	昇任
第四商業	采野 慶明	東山村	昇任
練馬工業	竹内 藤夫	東七所	昇任
大泉附属中	清水 和紀	指導部高指課	昇任
日野	福原 利信	指導部高指課	昇任
八王子桑志	古溝 紀也	国際	昇任
府中工業	劍持 利治	総合工科	昇任
武蔵附属中	尾崎 肇	人事部試験課	昇任
多摩	延昧 道都	砂川	昇任
小平南	佐藤 信孝	石神井	昇任
一橋・通	小川 孝	第一商業	昇任
一橋・定	久保 剛	田柄	昇任
六本木・定	塚田 雅人	足立西	昇任
世田谷泉・定	小嶋 正之	美原	昇任
荻窪・定	藤田 雅一	秋留台	昇任
大島・定	下寺 弘	杉並	昇任
大山・定	赤嶺 治	千歳丘	昇任
桐ヶ丘・定	中村 直樹	光丘	昇任
農芸・定	佐々木 一憲	園芸	昇任
八王子拓真・定	中村 勝徳	小川	昇任
東久留米総合・定	倉井 康維	大泉	昇任
小金井工業・定	鈴木 貴栄	工芸	昇任
五日市・定	加藤 和宏	大泉桜	昇任
青梅総合・定	小笠原 和彦	練馬工業	昇任
農産・定	長野 泰明	葛飾商業	昇任
中野工業・定	荒繁 勝	小金井工業	昇任



編 集 後 記

東京都公立高等学校副校長協会会報第 42 号の発行にあたり、ご多用中のところ原稿をお寄せいただきました先生方に深く感謝申し上げます。今年度の活動も 4 月の総務部会を皮切りに 6 月幹事会・総会、8 月の研究協議会と行われてまいりました。この間、定例の総務部会にご出席いただき、地区副校長会を支えていただきました常任幹事の先生方、研究協議会での協議運営に当たっていただいた研究幹事をはじめ、さまざまな形で携わっていただきました先生方に重ねて御礼を申し上げます。

さて、この一年を振り返るとさまざまなところで事件や事故、変革があった年ではなかったでしょうか。東京では入学者選抜の採点誤りが発覚し、全都の高等学校で再点検が行われました。また、学力スタンダードが始まり、夏には J E T の配置、毎日日の前の仕事をこなすのがやっとで、何をやるにも一人では何もできないことを痛感しております。副校長の業務が増大する中、目の前に山積した困難な教育課題を解決していくには横のつながりを強固にし、いろいろな情報を共有し、活用することが重要であると考えます。本会報が、情報交換の一端となり、課題解決の糸口となることを祈念して編集後記とさせていただきます。

全日制副本部会長 筒平 篤生（王子総合）

会 報

第 42 号 （平成 26 年度） 非売品

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

編集者 東京都公立高等学校副校長協会事務局

発行所 東京都公立高等学校副校長協会

〒113-0034 東京都文京区湯島 1 - 5 - 28

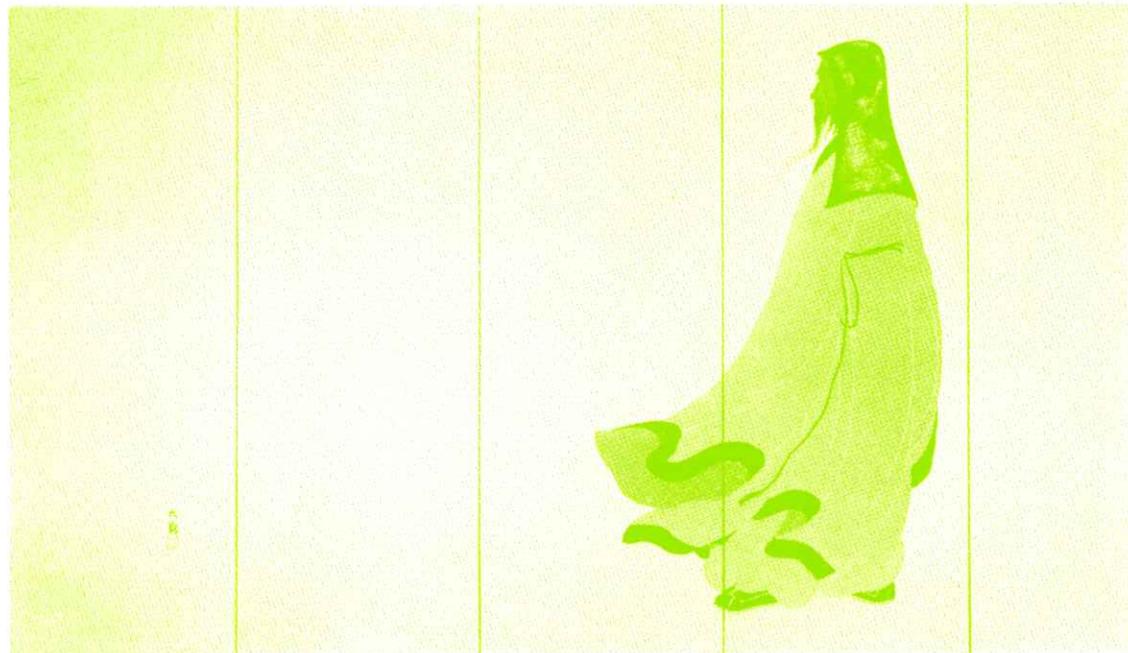
ナーベルお茶の水 2 階

電話 5840 - 6104 FAX 5840 - 6108

E-mail: info@zenko-kyotou.jp

印刷所 社会福祉法人 東京コロニー 東京都大田福祉工場

〒143-0015 大田区大森西 2 - 22 - 26 電話 3762 - 7611



横山大觀 五郷先生